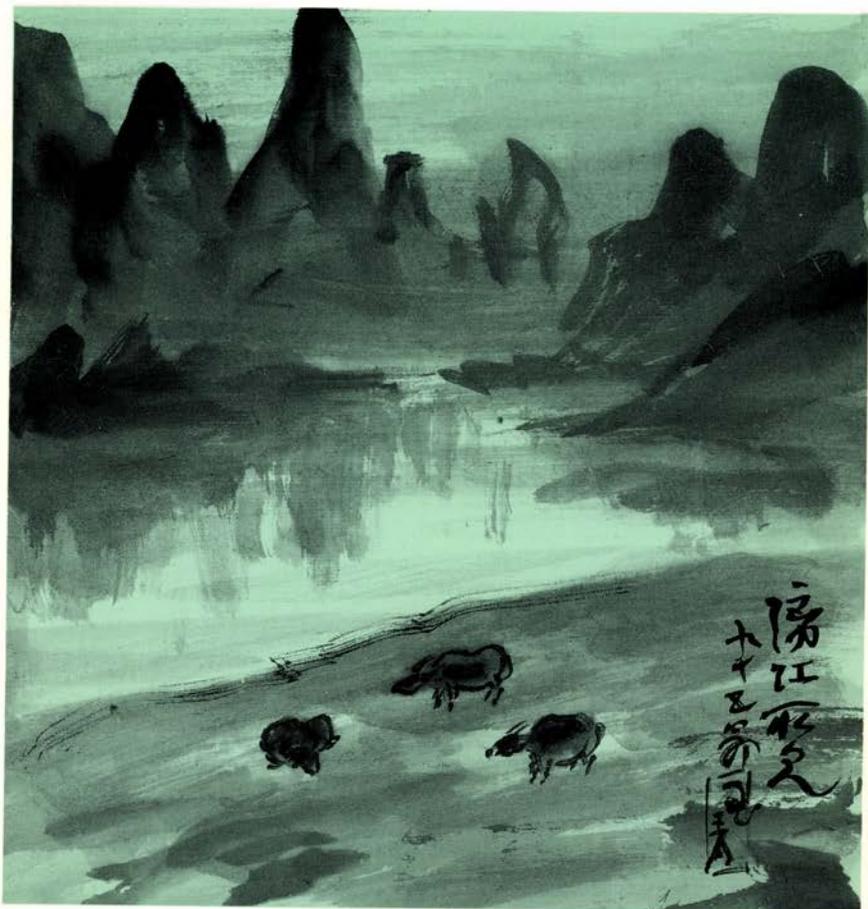


川柳塔

創刊大正十三年 通卷八五六号



日川協加盟

No. 856

九月号

第4回 川柳塔まつり

〈平成10年度同人総会〉

と き 10月7日(水) 午前10時から

ところ ホテル・アウリーナ大阪 (なにわ会館)

(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車)

議 事 平成9年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成10年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

〈各賞表彰式〉

路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の表彰式を同日午後1時から行います。

〈記念句会〉

各賞表彰式に続いて開会。午後4時終了予定

おはなし	弓削川柳社	濱野奇童氏
兼 題 「にんげん」	(香川)	木村あきら選
「千円」	(青森)	高瀬霜石選
「飾る」	(京都)	都倉求芽選
「からだ」	(鳥取)	小西雄々選
「強い」	(大阪)	河内天笑選
「進む」	(事前投句)	橘高薫風選

◎各題2句 出句締切午後1時

会 費 1000円 (当日いただきます)

〈懇親宴〉

と き 同日午後5時—7時 同会場で開催

懇親宴会費 8000円 (会席料理)

宿 泊 アウリーナ大阪 8000円 (朝食付)

◎事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌最終ページの申込用紙に明記の上、9月10日(木)までに本社事務所までお願いいたします。

懇親宴・宿泊の御送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願いします。

主 催 川 柳 塔 社

Tip Top Tap

橘高薫風

昨年(一九三〇年)の十月十二日、青森県の蟹田町で第五回風のまち川柳大賞に関するイベントが開かれた。メーソンの川柳大会に先立ち、観瀾山公園では、例年と同じに雨を伴う強風の中、受賞句の句碑除幕式が行われた。

茄子の馬風がふわりと来て座る

長野県生坂村の藤澤三春氏の句である。除幕の瞬間、私は息をのんだ。五・七・五が三段横並びに書かれてある。従来のような縦書きでなく横書きの句碑だった。今年になって梅田の阪神百貨店の一階のコーナーにチップ・トップ・タップと

いう蕭洒なティールームが開店した。

コーヒー、紅茶は二百六十円、ケーキとセットで四百八十円、他の品も格安だから気安く利用している。お向かいに見える店はコーヒー四百円だが、客筋は女性が多く時に並んで待っていることもある。世の中はつくづく面白く出来ているなど思わされるのだ。

店の名が変わっているので、その意味をウエートレスに聞いたら

「ホップ・ステップ・ジャンプと同じようなものでは」との答え、

「まるで雨垂れやね」と私。

そこで煙草に火を点けて、

雨垂れのチップ・トップ・タップ

珈琲館

と一句がメモされる。無論、阪神百貨店には雨垂れなど無縁だが、ここで私の想像が広がって行く。

青森の小さい町の粹な喫茶店だ。雨垂れの上句が「氷柱解け」と変化する。川柳塔の自選欄に発表した句の謂れはこのようなことであった。

川柳塔みちのくの一句集にも

ワンサボンナタイムと

孫について行く

という句を出した。

この句も英語そのままの綴りで横書きに表記したら一層気分が乗る。昔昔ある所に……と語りはじめる昔話の出だしである。私は、Tip・Top・Tapの句とワンサ・ボンナ・タイムの句を短冊に横書きしてみた。そして、これ面白いと言わんばかりに田中正坊さんに貰っていただいた。

インター・ネットの時代、二十一世紀には川柳も横書きになるであろう。

それは、新聞が横書きを採用したときであると私は思っている。

悼 児島与呂志さん

その頃の水客 与呂志 阿茶 豆秋
孫の飴一つ欲しいに言い出せず

密談の男ふたりの観覧車

浴衣にも祇園祭りと大文字

曼珠沙華入日に馴染む色となり



座右の句

小木か大樹か先が見えぬ苗

私の句

花の声よく聞えると造園師

(公一)

中田 あい子

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 Tip・Top・Tap

私のぐうたら川柳

橘高薫風 … (1)

川柳塔 (同人吟)

西田柳宏子 … (2)

自選集

橘高薫風選 … (4)

大空のころ (92)

橘高薫風 … (55)

座右の句・私の句 特集 (2)

川柳の群像 渡邊蓮夫

東野 大八 … (60)

古川柳歳時記 『相撲』

清 博美 … (62)

水煙抄

河内天笑選 … (66)

秀句鑑賞

同人吟

仁部 四郎 … (64)

水煙抄

藤解静風 … (89)

私のぐうたら川柳

西田 柳宏子



永い私の川柳とのつながりもいつの間にか44年の歲月を経て、今更のように感無量なものがありません。性来順応性の強い(と言えば

格好よいが本当は自己主張を持たぬ、他人まかせのええ加減な男)私はその時、その時の風まかせ波まかせの浮き草みたいなものだったなと自嘲自戒している昨今です。

清水白柳師(当時白柳亭と言っておられた)

との出逢いから、路郎先生門下の不朽洞会員にして頂きながら、一向に路郎先生の二指導頂ける川柳塔欄への投句をするでもなく漫然と末席に名を連ねていたことも今になってみると、何と馬鹿な奴だと言っ他はありませんが、結構それなりに本社句会や玉造川柳会(現在の南大阪川柳会に吸収された)阿倍野支部(現南大阪川柳の母体)或いは大萬川柳等々に顔を出し、ちょこまかとお手伝いして重宝がられたことが懐かしく思い出されます。現在と異なり生活第一、会社大事の環境の中で川柳第一に出来なかったのも今になってみると後悔の残る時の流れだったと思います。

渺湖抄	八木千代選	(86)
茴香の花	西出楓楽選	(90)
「指」	森田文選	(92)
一路集「降りる」	岩原喬水選	(92)
「涙」	井上柳五郎選	(93)
初歩教室「決める」	吐田公一	(94)
路郎賞・川柳塔賞中間発表	高瀬霜石	(99)
句集紹介『平成十年』	菱田満秋・橘高薫風	(100)
悼 吉本菁風君	塩満 敏・上岡正直	(102)
ああ児島与呂志さん		(104)
八月本社句会		(108)
各地柳壇(佳句地十選/蘭田猿杵)		(122)
柳界展望		(123)
九月各地句会案内		(124)
■編集後記		

座右の句

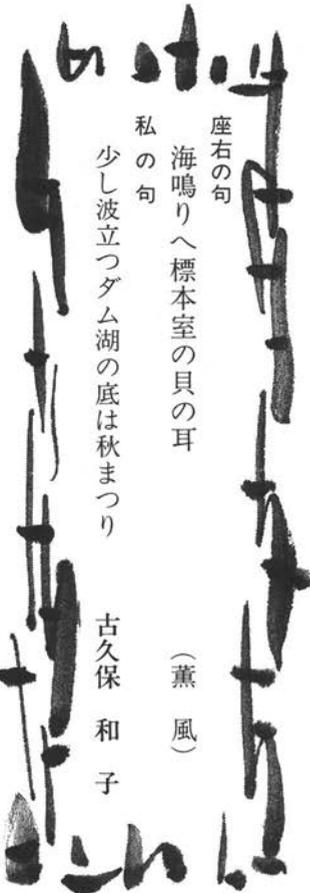
海鳴りへ標本室の貝の耳

(薫風)

私の句

少し波立つダム湖の底は秋まつり

古久保 和子



そうした中で多くの先生方、諸先輩のお引き返し、数多くの柳友の皆さんのよいしよにうまく乗せられて、ええ調子に動いている内に、いつの間にやら肩書許り増えて、実力の伴わないのに名前ばかり先行してしまい、自慢出来るような句もなく苦笑しながら、それでも何かお役に立てばと自惚れながらとび歩いている現在に、まあいいさ今更仮面つけ替える気もなく皆さんがご覧の通りの柳友子で行き度いと思っています。

最後にちよつと偉そうなことを言わせて頂くならば時代の変遷というか、川柳も随分進歩(?)前進したのでしようか、私には判らぬ句が次第に幅を拓けており、私が川柳らしい川柳と言う句は古いと歯牙にもかけて貰えぬ風潮が見えることに独り憂いを覚えています。多くの新進気鋭の川柳愛好作家の皆さんの鋭い柳論を拝見するにつけ、自分の不勉強が恥ずかしくなります。しかし、私のような古い川柳の世界に溺れている多くの川柳愛好家も、決して今の川柳について行けないとあきらめないで、まだまだ私達の心に生きています。川柳らしい川柳を論じている柳友が沢山居られることをしっかりと見据えて、私達の言う川柳らしい川柳を愉しみ、あとあとへも伝えたいと思います。

路郎先生の言われた「生命ある句」これはあなたから生れたあなたしか詠めない句です。

川柳塔

橘 高 薫 風 選

守口市 森 川 まさお

引き潮の干潟生きとし生けるもの
蛍籠光るは平家の公達か

つくもつて構図をつくる菖蒲園

新幹線 田植に戻るといふ娘

翩翻と大漁旗と日の丸と

蟻螂はこどもながらの鎌かかげ

黒石市 千 葉 風 樹

村芝居雨降る位置のプロンプター

画鋏からボトリと病葉が落ちる

癌巣が溜る大都市の火葬場

糠床の中には妻の爪がある

お選び下さい自殺過労死突然死

胃薬を知らない頃よ下駄の頃

京都市 山 海 友 照

懺悔すること多かりし墨をする

おんな坂急にけわしくなる都

友達に逢いたくなつた湯葉のつゆ

いつまでも泣くなと曼珠沙華が長く

ひとり旅三年坂を登り切る

秋風よわたしを笑うことなかれ

藤井寺市 吉 岡 美 房

孫はもう我が戦中を理解せず

豪快に昼のうどんを食べて夏

駅一つ手前で降りて夏祭り

煩惱が浮いて流れる夏の川

まだ酔うてへんぞ それそれ酔うて来た

選挙戦化けそこなつた党が負け

竹原市 小 島 蘭 幸

フルーツパフェ去年と同じ席に着く

ひとつ許してまあるくなつてゆく父か

約束ばかりしている男 水を飲む

船は動かず いい人ばかりいる
郵便屋さんのバイクと赤とんぼ
美しい日傘 振り向いてはならぬ

竹原市 三宅 不朽

限りなく亡父若く笑む雲の峰
涛頭勇者聖者のごとく散る

いっしんにいのち吐きだす鉈屑
からす二羽農夫の距離をむつまじく
鍵しらず蝶や野犬に守られて

よく喋る女がグイヤを買うと言う

米子市 田中 亜弥

冷凍魚目のあたりから解けだした
ごつい背なあれはよほどの頑固者

恋人と同じ夢ならゆるされよ
柩の中の遊び道具が多くなる

百足さんよ足が多くてつらからう
影絵いま鳥のかたちでとんでいる

弘前市 佐治 千加子

立て結びばかりする子の放浪癖
降水確率猫黙々と顔洗う

膝を抱く祈りひとつを抱くように
草原に首をもたげて蛇身かな

みずうみは雨にふくらむ桜桃忌
人間失格 母みずうみの風となる

新婚の隣へへちま這うてゆく
「毒」と言う香水に立ち向かう

死んだ振りでときどき義姉をまごつかせ
血まなこになったことある恋一つ

逃亡中に女神がくれたにぎりめし
離婚三度目三文判でこと足りる

和歌山市 木本 朱夏

前世の扉がひらく蛍の夜
いつか見た夢のつづきか沙羅の花

つぎつぎに蜻蛉生まれる水の闇
晩闇に眼凝らせばイエスの目

美しく飾ってみても籠の鳥
陽炎のカーテン抜けて逢いにゆく

和歌山市 堀畑 靖子

身を守る方にハンドル切っている
私だけのブランド縫っているミシン

幸せを私にくれる色がある
女という壁が私の前にある

軀身はもうないだろう米を研ぐ
身代りになれぬから折る千羽鶴

豊中市 安藤 寿美子

出発はこの町角の道しるべ
考えることは頭の呼吸かも

富山市 舟渡 杏花

図書館へ行けと教えてもらえない
梅雨冷えの夜は冷酒をほんすこし
日記またさぼって日記にはならず
楽しくて水割りダブルにしてもらう

東大阪市 指宿 千枝子

梅雨晴れのむくげの花はより白く
こうへいと呼ばれている子泣いている
儉約もそこまですると淋しすぎ

堂々とお金の話しています
お茶を汲む隣の分もついでです
エレベーター知らない人と二十秒

男いっぴき試す酒にも女にも
眼を閉じる涙をこぼさないように
家系図に孫の名前を書き入れる

鳥取県 土橋 螢

夕焼けに解けてしまった恋晩夏
真実を吸いこみ嘘を吐き捨てる
愚の中に男の本音らしきもの

気位の高さは猫に負けている
女らしい男の隣の席が空いている
秋芳洞うでを貸したは父恋か

故郷じまん義公烈公みとなつとつ
アルバム過去のしあわせだけを貼り

宝塚市 嵯峨根 保子

いたずらな鳥のことで自治会議

弘前市 高橋 岳水

薰風へ森の楽器が喋り出す
夕焼けて振り向くことが多くなる
濯ぐほど心のシミが鮮明に

アンテナを張り巡らせて不眠症
平凡の良さを忘れて背伸びする
耳底のネプタ嚙子が眠らせぬ

酔い機嫌ふつと目玉が欲しくなり
光線の角度で分る陽が沈む
諦めは歳が背負っていく言葉

風呂上がり妻の真似して窓の月
出来ぬこと聞いて恥かく阿呆らしさ
嫌なこと忘れる寝酒酌いでくれ

和歌山市 堀端 三男

薬包紙の鶴が飛び立つ退院日
立ち話昨夜見た夢聞かされる
何かある彼が雷落とすには

ぶらぶらとしているが金庫握ってる
肩の力抜けと勧めるのほほん茶
ご先祖の余徳に胡坐かく余生

人間も話も裏があるので
松原市 玉置 重人

下積みの自負を知ってる靴すべり

マグカップひとりの夢は考えぬ

美しい汗だ子がいる妻がいる

ポーナスはええな小遣いくれる孫

クローラーは強で内田康夫を読む

岸和田市

岩佐ダン吉

おおい蟬僕も言いたいことがある

猛暑つき反核マラソンを走る

四割の自給世界を食べている

甥のリズムに母が浮かびくる

反抗の章を自分史抱いている

夾竹桃僕もまだまだ耐えている

唐津市

山門幸夫

思いやり満ちて溢れて句会かな

梅雨上がりワシワシワシと煽る蟬

夏雲に猿犬猫や彼も居る

子雀も蚯蚓争うほどになり

虹浜があるから帰る夏休み

笑み浮かべ成り歩進める面憎さ

大阪市

川端一步

風蘭を咲かせて妻はご満悦

躊躇した後の勇気を褒めてやり

文豪の讀も書き添え旅だより

老眼をかけると裏がよく見える

加害者の声大きい事故現場

明日があるそんな嬉しい日々である

東大阪市

谷口義

他人ならそんなに怒ることはない

本気ですかいたずらですか嘘でしょう

いたずらを呆けてきたかと思われ

幸せはもう隣まで来たらしい

だまされる話二人並んで聞く

頭から燃えて爪先から冷える

倉吉市

松本よしえ

標的を決めた無口がおそろしい

音消してすーっと止まる救急車

絞り染め解く楽しみが干してある

コンパスの中心にいる自尊心

母さんに限るとおから炊かされる

新築の屋根葺いていい眺め

岸和田市

田中文時

尊敬はするが仲間には向かぬ仁

理不尽な手助けもする多数決

快い疲れ夕刊配り終え

ふる里の川滔滔と小気味よし

先生が生徒に媚びてどないする

長生きを約し別れる過疎の駅

熊本市 永田俊子

打つても鳴らぬ明治の太鼓世を嘆く

ハードルへ再起の視線高くする

物好きが骨董屋から帰らない

欲求不満地団駄を踏むジャズダンス

握手にも温度差がある選挙前

熊本県 高野宵草

排ガスを撒いて森林浴にゆく

野仏の瞑想に愚痴ぶちまける

父の日を持って来たよと孫がくれ

高級車拭いてまわった子の指紋

棺埋む鳴咽の花と茶毘へゆく

唐津市 田口虹汀

五分刈りで蘇鉄も夏を迎えます

生唾を誘う朝漬け茄子の色

扇風機よりも団扇の風が好き

会費等本に挟める癖がある

五風十雨一寸長生きしすぎたか

唐津市 久保正剣

華麗なる采譜ドボンの匂いする

裏芸に長けて下積みから抜けず

恰好の逃げ場に傘が置いてある

人生航路人魚の好きな船長と

手放せぬ用事三人待たせてる

唐津市 仁部四郎

祀られてからでは遅い無辜の民

玄関に作り笑顔のカタログが

本棚の定位置人に貸せぬ本

開式の君が代世代の順に立ち

舗装路を島の火葬場二本寄せ

庫津市 山口高明

痛風も連れて巡拝奥の院

荷物には成らぬと老母が別居する

泉質を問われ受け売り披露する

表札に犬の名前も書いてある

爆竹の音も賑やか葬がゆく

唐津市 山門タミ

サクランボお手々つないで食べられず

人でなし隣の花は見えました

命がけ過去より怖い未来像

同じ孫うすい縁と濃い縁

蜜を吸う悪魔のように黒揚羽

唐津市 市丸晴翠

小さい手が支え横綱土俵入り

大臣の椅子にも慣れた二枚舌

自分史の終幕だけは決めている

検察の過労気遣う世紀末

猫の目も驚いている円相場

北九州市 梅田宣司

新聞のたまる早さで老いが来る
友情がときどきへそを曲げてくる
くすりか酒かやっぱり酒にしときます
生きて居るはずだが出も欠も来ぬ
酎二杯人間やめられそうになし

高知市 北川竹萌

品性を笑われる人笑う人
薬箒民芸品に編む八十路
ひと月も目を遊ばせて取る糸瓜
参議院九十の意地をぶつつける
思い遣り互いに八十路越えてゆく

高知県 赤川菊野

花吹雪この淋しさは何だろう
一升びんさげてハチキン飛んできた
逝く時は鳴子おどりで送ってね
賑やかな人が淋しき置いて去に
大空と大地 私の味方です

松山市 宮尾みのり

瘦せすぎの頃もあつたと言うておく
花だった人老いてなお花のまま
不得意は不得意なりの意地を見せ
地殻変動女の会にある予感
実権はまだ九十が離さない

松山市 丹下美津子

午前五時妻正確な水の音
兄弟揃い職場きまつたいい電話
その時はかふる覚悟の印を押す
見送りの母と別れた峠茶屋
山の駅カッパル降りたまでわかり

今治市 矢野佳雲

校庭へ芋植える日の来ぬように
さあ跳んで来いと大きな父の腕
働かぬアリを裁いたアリ地獄
お得意のポーズスルメがそりかえり
家中が乗り気 本人だけ嫌気

今治市 野村京子

そして夏ざぶざぶと菜を洗う
カタログの迷路にはいり小半時
お皿よく割る白魚の指である
母は海ことさら深い夏の海
おにぎりの真ん中梅がよく似合う

今治市 越智一水

寡婦ひとり戦を孫に語り継ぎ
雲無心 僕も無心で雲を追う
母なる水父なる光のわさび田よ
帝国ホテルのコーヒーだけで自惚れる (上高地)
光太郎の「腕」から愛がこぼれ落ち (碌山美術館)

香川県 木村 あきら

海鳴りも聞こえて来そう蜷汗

頂点を目指す男はわき見せず

一徹の父で石にも矢を通す

撒き餌に誘われ罟が待っている

北鮮に鳩の舞う日を待ちあぐむ

香川県 池内 かおり

新札に替えてもすぐに羽根が生え

落款を押すと僕の字生きてくる

蜚舞う昨日や今日の川でない

百貨店寒すぎないかキャミソール

散髪をして来た夫と投票に

香川県 川崎 ひかり

カニカエル車にひかれペツチャンコ

真つ直ぐに疲れはせぬか竹の性

澄む水の下も生死のドラマあり

いい事があつて寄り道まわり道

金魚すくい八匹すくい五匹死ぬ

香川県 成重 放任

叱られる人が居るから幸せよ

一点の重さしみじみかみしめる

澄みきつた月の冷たさある予感

限りなく大きな母の思いやり

参院選サッカーほどの熱がなし

香川県 工藤 吟笑

就職もトントントンと七光り

お誘いが来ても早いと追い返す

駄馬は駄馬連れ互いに誘い合う

眠りから覚めた埴輪にある笑顔

千年の齢を保つ古代蓮

下関市 石川 侃流洞

病名を自分で決めて病んでいる

消費対策もうりサイクルやめますか

僕の骨抱くのは妻と決めている

オーイ雲老人パワ―見ておくれ

湯割り五分 結婚記念日ですあなた

美祿市 安平次 弘道

切り札を使うと愛は逃げてゆき

雑用に追われ謀叛は消えていた

鉛筆の芯とがらせて飢えている

打ってみな打った果報は寝て待とう

成功のもとですミスは気にしない

柳井市 弘津 柳慶

深酒を詫び仏壇のとびら閉め

養老院めでたく一対の花が咲き

細工師の指が苦心の里の味

恵みの雨が過ぎて山崩れ

定年になつて希望の虹も消え

宇部市 平田実男

思い出の土地を喜ぶ土ふまず

賞味期限切れているのが立候補

鍵のある部屋でいびつな子が育ち

ストレスとウツを溜めてる見ないふり

赤字国債を打出の小槌から

広島市 森田文

若い日の正論抱いて笑われる

五ミリ高い踵で買えぬ好きな靴

七夕飾りサツカーボールも仲間入り

野の花に重ねて惚ぶ人がある

歳月や過去にはできぬことがある

竹原市 古谷節夫

マイナスにマイナス掛けて夫婦独楽

官僚の主語は尻尾が切つてある

ジャンケンの強い女性と居るチーム

鬼さんも乾杯してる祭の輪

雨だれのテンポの良さよ秋が来る

竹原市 森井菁居

野党躍進与党が減つただけの事

受診日も老母は欠かさぬ薄化粧

お遍路の鈴風に溶け岩に染む

OBになって訃報に疎くいる

六十路とや生命線が気にかかる

竹原市 時広一路

まだ捨てたものではないぞ爪伸びる

愛一杯詰めた日もあるゴム風船

曖昧な心を叱る夏の天

防犯のカメラはポーズなど知らぬ

戦争の頃の話も出て法事

竹原市 石原淑子

片想い白いパンプス買いました

夏の陽に桔梗の愛の剛さかな

帰宅するミラーに螢二つ三つ

ゆたゆたり金魚の溜息見てしまふ

核廃絶平和を願う夾竹桃

竹原市 岩本笑子

身もだえるように夾竹桃の赤

分岐点貴方まかせの道みどり

八月のオハグロトンボと逃げ水と

手拍子へ敵の姿も二三人

昨日と違う何かがあつて生きている

呉市 榎田英詩

日めくりがさらさら風も明日を待つ

蠟燭の灯で今日も父母に逢う

号令を自分に掛けて背を伸ばす

後半に賭けていますと負け惜しみ

下駄箱に下駄一足もない不思議

広島県 藤 解 静 風

無罪とは無実と違ふ梅雨ぐもり
堅忍不拔暑さ封じにならないか
溜息を入れて折り鶴千になる
病院の待合室でデートする
背景の妻を忘れんようにせな

岡山市 井 上 柳五郎

八月は戦争記憶鮮烈に
無に還る順は先輩からでない
裏返す枕に往時茫茫と
ためらいを見ているようなこの電話
頑なな心を溶かすこの涙

倉敷市 田 辺 灸 六

台風一号遅刻真つ平御免なさい
日記には猛暑猛暑とのみ続け
これからの日本を背負う子を産まぬ
字が下手で暑中見舞は出しません
肩書の椅子がムズムズして困る

倉敷市 井 上 富 子

よく笑うプラス思考のイヤリング
情報はチャッカリ利用する狸
別居した日もありました夫婦墓
流行をそつと着てみる試着室
女房が一足先に痴呆症

岡山県 小 林 妻 子

賞め言葉も夜通し白菊の中で
仏の花はみんな表を向いて立て
割れ皿が無理難題を聴いている
汽車に乗るくわえ煙草の生徒たち
里帰りまだまだ老母に尋ねたし

岡山県 矢 内 寿 恵 子

捨てる神拾う神あり長い旅
引き潮の美学は神の意のままに
神の目を汚して地球病みつづけ
スイッチオン朝が動いている文化
片道切符亡父の浄土ほどのあたり

岡山県 福 原 辰 江

末っ子がいきなり彼女つれてくる
愛想のつもりが本当についてくる
萌えてます弾んでいます電話口
濡羽色の誇り捨てたか茶髪たち
好調ののって因果をふと忘れ

岡山県 江 口 有 一 朗

また田植え一年あつという速さ
田植え終え緑の風も色を増し
六十億人休耕田も今のうち
電車まだ汽車と呼んでるご老体
対策の会議を笑う温暖化

苦を抜けてたとえ話が多くなる
あれ以来音信不通の夏帽子
岡山県 山本玉恵

花の彩におぼれ易さの細い首
程々の暮らしに慣れた下駄の音
定位置にだあれも居ないまま夜に
岡山県 大石あすなろ

鉛筆の亡母の手紙は宝もの
爪先に余情ひたひた祭り下駄
一本の筆が降らせる雪の嵩
さくら葉桜世代交替いつか来る
と言うわけで相合傘で濡れてゆく
岡山県 二宗吟平

行列が長い黙って椅子を借り
一枚のカード老いの日へ褒美
ジョギングの寝呆けボタンを注意され
友達になって小鳥がチークチク
誰とでも話合わせて生き上手
岡山県 福原悦子

四捨五入削られそうな位置に居る
別々の部屋で家族が冷えてくる
旅なかば二人で探す珈琲館
敗戦の奇跡を越えた一代記
腹芸へとうとう妥協してしまふ
岡山県 佐野木みえ

読めもせぬ軸が目出度い部屋にする
修繕のきかぬ時計に似た私
岡山県 富坂志重

瘦せた方持てばうちわも涼しそう
またすねたチャックが千円札をかみ
行員さん郵便局へ貯金する
松江市 舟木与根一

八千万増の地球で耕地荒れ
初年兵が主役に替わる慰霊祭
鯛よりは秋刀魚おとこの一行詩
ノータイで目線を合わすレクリエーション
バス停の鳩は歩車道心得る
松江市 川本 畔

殿様蛙過去の夢から抜け出せぬ
レモンティー上品なとききたがる
空晴れて嘘のひとつが乾かない
風が動かねば何も始まらぬ
花に水をやりやさしい風をもらう
松江市 佐野木みえ

気が付けばライバルの影踏んでいた
肩車して貰ったねお父さん
垣根ごし内緒話を聞かされる
沙羅の花ひっそり寺の隅に咲く
若くして逝った母です三十年

松江市 浦辺 静江

育ちよくさすがみんなの目に留まる

散歩してなじみとなつたおばあちゃん

香りよい花いつまでも堪えている

年金の粹でいろいろ趣味達者

カラオケのお蔭ストレス消えてゆく

松江市 安食 友子

ちよんと柀がはいってからの幕のろい

したり顔五体満足ではないが

夜間金庫に不穩分子の影がいる

泣き上戸大の男も様はない

酔いどれはすつからかんに気にしない

出雲市 板垣 夢酔

他所はよそ内はうちだと言う財布

花愛し鉢をいじつて人嫌い

看板の絵に詫びさせて工事中

貧しさに母はピエロを演じきる

腕まくり夫炊事に妻バイト

出雲市 小白金 房子

おはようさん嫁と対話の朝が来る

門限へきつちり並ぶ赤い靴

次女三女 我が家の花がこぼれ咲く

いい夢を探すわたしの旅日記

湯上がりの身がるさ喜ぶ児のはしやぎ

出雲市 吉岡 きみえ

手の折れた地蔵まっすぐしてあげる

あるまじき話をきいて梅雨あけぬ

いとしくてひとつ頬ばるさくらんぼ

母の忌は一日母のこと思う(七月七日)

若い気でいても小さくなつた影

出雲市 竹治 ちかし

子が捨てる想い出妻と溜めている

人間が神を忘れた世紀末

人間よ地球は四十六億歳

良い道路付いてたぬきの死亡事故

良い事も良くない事も言う仲間

出雲市 園山 多賀子

七夕の握手に籠る師弟愛(教え子の同窓会に招かれる夫に同行して)

乾杯に卒寿を古稀に支えられ

中央で小さく納まるハイチーズ

昭和史にゲートル巻いた過去手繰る

同窓会腰巾着の責め果たす

出雲市 石倉 芙佐子

父母も恩師も居ます遠い駅

沈んでも陽はまた上る古稀の坂

花時計 戦で死んだ人のこと

朱夏の駅風も女も秋の彩

天の川渡っていった恋虫

出雲市 富田蘭水

島根県 伊藤寿美

動かないくせカレンダ―気にかかり
嫁の前おいしかったと言う平和
桃に期待小さな小さな夢ひとつ
予定表びつしり詰まる幸せが
一歳半ばちばち偏差値囲まれて

出雲市 久谷まこと

光の曲チエロ胸に沁むITM (伊丹)
残高ゼロ見事な老父の大往生
クラス会へ行く老婆の透ける服
祝叙勲内助の妻はジャスマンティ―
酸欠の街で漫画がよく売れる

島根県 堀江芳子

俗念を払う拍手重ねうつ
世渡りの思案で変わる上手下手
鏡には他所行きの顔しか見せぬ
居心地が良いから揃う笑い声
伸びをして噂話を聞き流す

出雲市 岸桂子

耐えていく盲の一字を大切に
孫よりも頑是ない日の夫の背な
残されてたまるか夫の独り言
いい親になれぬにほろりさせる子ら
人恋えば向こうの山の声がする

島根県 小砂白汀

この角もわたしの曲る角でない
こんな日は一日雨の音を聞く
淋しがりやで赤がだんだん好きになる
希望という橋を親子で架けている
平凡な日に風鈴は鳴り止まず

島根県 松本文子

清流へわたしの汗もひと滴
じんましん出してサツカー見えています
焼きいもになるとは知らぬ甘藷の苗
悪いとは思わぬ木魚叩かれる
呑めぬ奴死屍るいるいと骨を積み

島根県 森茂美

惜しい人だったと人に言われたし
几帳面に余白を埋めて鳥になりたし
肩をずらせてみても重苦しい街だ
幾つになってもうまくなれない別れ方
着けてみたり外してみたり肩パッド

手の中の蛍にいのち小さくきく
いい人に逢えて心の糧増える
飲むほどに話が泡をふくビール
薪能と思う長良の鵜匠舟
手花火の姉を真ん中三姉妹

島根県 藤原鈴江

平和です寝足りて寝足りてまたねたり
友がきて私の愚痴を持ってゆき

うつつ晴らすすべなき老いの独り者
征きたいと思つて征つたわけでなし(夫沖繩に散る)
水面でスキーやつてる飛魚の群

鳥取市 倉益一瑤

不眠症の枕を駆ける過去未来

善人に浮世の風は冷たすぎ

地図にない抜け道母は知っている

チャンスとピンチ神は意地悪紙一重

地獄耳疲れるだろうなと思つ

鳥取市 石上悦子

人様の平熱わたしには微熱

結び目はゆるめがはやる赤い糸

シュレッダーあつさり味に懂れる

僕だけは何も盗られてない侮辱

試着して大人っぽいと母が言う

鳥取市 植田一京

梅雨明けてビール王者の貌になる

幻の人 風になる夏の宵

夢叶いでんでん虫は雲の上

日曜にゆくオアシスは決めてある

自分史をパズルのように組立てる

鳥取市 西村黙光

柳友の訃へ追憶の風胸を刺す
熱燭で亡き柳友偲ぶ熱帯夜

風変わり炊事軍曹僕もする
徳利にくやしき溜めていつき飲み
生き恥を晒して仮面取り替える

鳥取市 春木圭一郎

少しずつ聞くと本音がついぼろり

聞く耳を持ったおかげで友が増え

飲み会と聞けばとにかく出る私

まず聞いてまわりの動き見きわめる

血の通う政治声なき声を聞く

鳥取市 杉本孝男

勝たせたい手に汗握る一点差

この程度悲鳴あげてはまだ青い

ミス続き縁起直しの酒を酌む

切れそうな絆一献温める

人相見が言うほど金も溜まらない

鳥取市 岸本孝子

情報が先走りする不況風

目立つ人やる気あるとは思えない

現役を降りる花道まだできぬ

蛙の子習わなくても三味をひく

夢の中生まれた家は古いまま

鳥取市 岸本宏章

才能がないからやる気見せておく

言い訳はするなど月が澄んでくる

景気いい話はないかたつむり

減反に蛙も抗議したかろう

子の希望じっくり聞いたことがない

鳥取市 岩原喬水

歳隠す技を鏡は知っている

手本にはならぬ私の過去語る

遅咲きの恋が人生狂わせた

その先は聞かず言わずのままがよい

俗名で呼ばれ本名わからない

鳥取市 前田一枝

聞きもせぬ上手なうそも吐いて居る

青い梅しそに馴じて色を変え

ほんのりと深い情けの灯が赤い

冷える手も温めてくれる胸がある

梨の花愛のみのりに手をそえる

鳥取市 武田帆雀

受話器から察する声は順調だ

新聞三社この家にどんな人が棲む

赤サンゴダイヤリングも真つ盛り

馬鹿になる癖がほんとになつちやつた

居酒屋にインテリ崩れご退席

鳥取市 近藤佳子

有難う踏まれた草も花が咲き

梅らつきよう漬けて主婦業梅雨が明け

雲見てる還らぬ兄よ喜寿なのに

神様は遠く祈りが届かない

夜よるを重ね家族の絆綯う

鳥取市 美田旋風

縄暖簾くぐれぬ友が遠くなる

散る花が心変りをそそのかす

綺麗事だけで話が弾まない

少子化の波が日本を揺るがせる

目を入れてやったダルマの目と合わぬ

鳥取市 上田宣子

朝顔が一輪ころ通りすぎ

足どりもメリーポピンズめく日傘

だんまりを決め込む芸が続かない

抜け出した後のコップの中の泡

帯は小幅に肩の力を抜いている

米子市 林瑞枝

満天にときめくギリシャ神話だな

かわせみが飛ぶ人と川のつながり

湧き水を山の子岩に伏せて飲む

五線譜に書き込む海のホヘミアン

蔵を出た黄色い声のする日誌

米子市 政岡 日枝子

あの人の四つん這いには負けている
身の内の沖はざぶざぶ荒れている
沖から戻る仲間を待つて飯にする
哀しみを干してやさしくなつていく
戸がきしむ隣近所にわからぬように

米子市 野坂 なみ

蛇とかげ人に嫌われ人ぎらい
行くつもりない方向へ這っている
荷を軽くしたら目方が増えてきた
声のせぬ家に野良犬住みついた
気がかりな進路船から降りられぬ

米子市 鷲見 正子

白旗に見える夾竹桃の白
原発増設 魚は不安持っている
これボール甲子園まで行きたいかい
地球儀で遊ぶと核が落ちて来る
旅人のこころで出雲試乗会(サンライズ出雲へ試乗)

米子市 木村 富美子

待つ人がもう居ないから急がない
まかすと膝をたたいた人はなし
膝がしらお前も年を取りすぎた
心臓も時々休み取りたがる
背を押して友がやる気の風をくれ

米子市 白根 ふみ

颯風が遅いおそいと騒がしい
ご近所は高齢だから青二才
手前味噌わかつているか膝小僧
鏡の奥で亡母とわたしと重なつて
鏡の前でうぬぼれていないかな

米子市 澤田 千春

前向きに進むつもりがバックする
沖に出て怖い貌した波に逢う
先生と呼ばれ先生の顔になる
ケンケンパ夢中で遊ぶ子がいない
淋しい鬼があそぼ遊ぼと里に出る

米子市 木村 春枝

蝸牛生まれた森を這っている
ゆつたりと雨の旅情を噛みしめる
翔ぶ日には此の子もいつか背を向ける
夏の陽にむくげの花はしたたかに
古寺に説明の声よどみなく

米子市 永井 美津子

飽食が切れる人間産んでゆく
ダブルベッドも一人気儘と言う勝気
寂しさに恋夢見ては亡夫に詫び
床の間に置けば本物らしい壺
母の義務終えたらあなた迎えてね

米子市 石垣花子

妻にさえ職場の苦情まだ言わぬ

弱み知る妻へ亭主の意地通す

男の甲斐性通し頭が上がらない

添いとげた人見送って枯れてゆく

しっかり者のバアちゃんがよく叱られだした

米子市 青戸田鶴

この世からこぼれそうです這っている

旅の終り軽いつづらにしておこう

遊んでもどこかでさめている私

通り過ぎる季節も今は無表情

華やかな宴もほんの一瞬だ

米子市 中井ゆき

天平の顔に残った紅おぼろ

鏡台のさんごころ母の声

私に手綱がほしい時がある

這い這いは思いだせない程むかし

夢幻花咲かせホタルの恋終る

倉吉市 淡路ゆり子

切り捨てるまでに時間のかかる髪

リストラにますます白髪増すばかり

履き物の高さで転ぶ歳になり

勇み足昨日と同じ手で負ける

請け判で家を一軒明け渡す

倉吉市 野中御前

梅雨最中笑い袋もしめりがち

アジサイが手抜きしている七変化

年金と格闘ワイン飲みながら

まだ燃える女で鏡覗きます

髭面がときどきやさしいことを言う

倉吉市 野口節子

金運もあるが女難の相もある

なりふりを構わぬ八起きめのダルマ

寺小屋に師の影踏まぬ教えあり

博学を誇ったペンも折れはじめ

硝子玉ほどのお値うち品である

倉吉市 山中康子

洞窟でもがいてやつと陽の目みる

大の字で天を仰いで見た梢

ささやけど亡兄まぼろしの影ばかり

いつまでも共に生きたい得手勝手

鍋みがくいきおいにのる手足腰

倉吉市 米田幸子

椅子一つ競った友も今は古い

浴びるほど飲んでも港間違えぬ

父ちゃんが急に大枚投げだした

にこにこ帰る夫に角も折る

矢印にそって進むと亡母に逢う

鳥取県 西川 和子

ふらふらは毎度の事と動じない
目が覚めて不意にドライブ思いつき
好き勝手大きな影に見守られ
ぼたもちが不意に棚から落ちて来た
虫干しを終えてタンスでまた眠る

鳥取県 鈴木 公弘

やがて来る話し相手の居ないめし
おしっこに甘い私が出てしまう
若い手を握り返したおばあさん
どんな顔にも父がいる母がいる
沖合の風を信じるほかはない

鳥取県 土橋 睦子

苦も楽も握った母の掌が温い
ゆっくりと肩の力を抜く法話
山梔子の花に唇あててみる
不意にきた風に乳房を覗かれる
老体を鞭打つように立つ裸

鳥取県 田村 きみ子

雨嫌いのわたしを誘う喫茶店
オムライス娘へ愛情も包みこむ
鼓動が早い自律神経失調症
秋雨の音聞いている夫とわたし
秋蛭ひとりぼっちになったのね

鳥取県 新家 完司

金を数える気力も失せて臥せている
生きなければならぬ蛙ピョンと跳ぶ
夏山で真つ黒な影とりもどす
体形を隠す術なし炎天下
しあわせな時に死にたい今しあわせ

鳥取県 乾 喜与志

命見つけた折鶴が飛んでいる
ふらふら帰る爺ちゃんの勤務明け
若人の気炎にんまり見て飽かず
嫁さんがやっとな娘になりました
兎にも角にも稲ぐんぐんと伸びている

鳥取県 津村 八重子

満月に老化の姿うつさせぬ
朝露をあびる幸せひと抱く
カブト虫王様然と角を振る
どうあれど息子夫婦に歩を合わす
お休みと今日一日の幕を閉じ

鳥取県 原 みさを

五月晴れウチのセンスが干してある
会議室のいすに踏絵がおいてある
慰安婦の踏みにじられた春がある
子の尻尾おちて安堵の親蛙
潮満ちるここで大きな蛙とび

鳥取県 石尾 かつ乃

さくらんぼちよつと脱線したくなる

末筆の一行本音かも知れぬ

茶柱が句会のペダル軽くする

巢立つ日は青田風吹く頃にする

荒れた田を嘆く瑞穂の国の神

鳥取県 石谷 美恵子

不景気の中で豊かに肥えている

匿名にしたらワンサときた苦情

ある日ふと逆縁の子の年をくり

贅沢な嫁へはらはらせられる

ふらふらと試歩たしかめる嬉しい日

鳥取県 幸家 単車

揉み消したはずの事件が火を吹いた

茶の間から笑いのたえぬ家族です

計算は早いが実行には遅い

茶を呑んだ位で汚職疑われ

消火器を持って遠くで眺めてた

鳥取県 乾 隆風

からくりを伏せて減税論とやら

雷も一理があつて気炎吐く

爺ちゃんのテレビ丁髷ばかり出る

日本丸は既に喫水線こえる

八月の蟬しきり啼く兵の墓

鳥取県 土橋 はるお

ねじ鉢巻きの男が浜に屯する

さっぱりと百畳敷きの間に昼寝

トンボすいすい僕もやる気にならなけりゃ

体調が良くなる酒をのんでいる

とつておきの銭は遊びに出たがらぬ

鳥取県 橋本 多哥由

能力はあるが力を出せなんだ

いい人になったつもりで鬼になる

魚には水が澄んで住みにくい

老いてなお新茶の緑こいしがる

恋人とお茶を飲んでる四畳半

鳥取県 羽津川 公乃

幸せを吸い取るように布団干す

潮風に踊るスルメの暖簾干し

タレントの食事マナーが目障る

古帽子夢はすっかりセピア色

いつからか非常袋も忘れられ

鳥取県 西原 艶子

アンパンが好きだった師の背が丸い(栗先生のお写真をみて)

主義主張ほのぼのと抱く女です

アルバムに輝いた日の夫がいる

リハビリが輝く顔へ変えていく

ご馳走の余韻ほのぼの眠くなる

鳥取県 近藤春恵

愛想いい女の罫に気づかない
心ない酒が私をしゃべらせる
酒を飲む祖父の幸せそうな顔
ふる里に向かつて汽車が走り出す
大空が恋しくシャボン舞い上がる

鳥取県 林露杖

螢火に遠い面影ふと過ぎる
虹になる夢も紫陽花項垂れる
同世代また一人減り雨の葬
究極のある日コトんと逝く祈り
キャミソール世の塵類も透けて視せ

鳥取県 埴寛子

転移した病魔と明日の謀
病夫の呼ぶ二十四時間明日も来い
無器用なお方粉薬吹き散らす
風切った肩の薄さよ時移る
医者替えて明日天気になるならば

鳥取県 さえきやえ

てんやわんや ついに来ました初の盆
花の種またよき友をつれてくる
負けて売ることも美学とさかな屋さん
美しき想い出つれてエゾかんぞう
悲しみ峠越すにほどよい空の青

鳥取県 谷口次男

残したやニの字ニの字の下駄の跡
石油から人間作る日の怖さ
北からは怪しい桃が流れ着き
日本のヘソと眉とが見つからぬ
引き分けのような夫婦で長持ちし

鳥取県 上田俊路

炎天の街で不況の汗しきり
梅雨前線冷えた景気を連れてくる
図書館でゆっくり余命干している
遠雷に別れたひとの計報聞く
見知らぬ花雨に濡れてる父の墓

鳥取県 吉田孔美子

母の居ない里にバイパスついたとて
伏す父に楽しさの手加減がいる
お姑さん助けてあっち向かないで
義父は逝く臉を閉じる間もなしに
入院させたわたしが連れて帰ります

神戸市 中村ゆきを

昼の夢いま幻の女に逢う
迷い道無限の星に眺められ
幸せのカードよ何時まで裏返り
苦を分けて午後のひとつとき紅茶注ぐ
雨上がり幸せそうに行く二人

神戸市 山口美穂

レシビ通りがわたしの舌になじまない
雨つづきホットコーヒーにがくする

釣橋の不安も悲鳴も同じだ(キャビラノブリッジ)

体重計の針揺れ今日も同じとこ

庭の胡瓜その一本がうれしくて

神戸市 木村貴代子

正論を吐いた一人が浮いている

まん中に晴着を着せた娘を立たせ

完熟のトマトブルルン畑に待つ

青春のまん中親は忘れられ

新居うれし何を食べてもおいしくて

神戸市 池田善守

一日を二日に過ごし義父の看護

たたみ一畳妻とご寝で義父看護

エアロビクス十人十色のユニフォーム

こわい程予定通りに行き過ぎる

飛行機雲あのB29よみがえる

芦屋市 黒田能子

飼い主を見下している屋根の猫

尖らせた芯で本音をしゃべらせる

人生の甘辛の味少し知る

キャッチボールまだしてくれる人がいる

別々の揺れで吊り橋渡り終え

伊丹市 山崎君子

手を庇い足を庇って梅雨ながし

ベランダのパセリ役立つ不意の客

サツカーにちよつと忘れる世の不安

夏野菜器あれこれ好む老姉

スイトピー飛んできたよに今朝も咲く

伊丹市 小熊江美

芯のない男の風は乱高下

わたしにもパワーが欲しく爪磨く

芯のある意見は胸の奥に来る

日帰りの旅に余念のない仕度

浮き沈みあって今まで生きて来た

伊丹市 長浜澄子

分け合った日も返らないケーキ皿

聞き飽きた話も情にほだされて

娘と共に生きる走者を待っている

舌先の軽さブルータスお前もか

追伸はやっぱり胸に留めおく

尼崎市 春城武庫坊

猛暑来る未だ戦場の夢を見る

新聞のどの頁にも悪が住む

好奇心おこすと影が騒ぎ出す

世間渡ると危い橋が多過ぎる

盆が来る母はいずこで夕涼み

尼崎市 春城年代

吊皮を信じ切つてるゆきかえり

緑陰や時代錯誤の長い坂

昼なお昏し山荘の水すまし

ご近所の声で土曜日だと気付く

裏の二階に男の声がこのところ

西宮市 牧 淵 富喜子

上げ底のさくらんぼには罪がない

カオカオと遠くの人を呼ぶ鳥

テレビには故郷すもも頬張りぬ

産み終えて揚羽炎昼さまよえる

勢いで出ねば用事が捗らぬ

西宮市 亀 岡 哲 子

冷夏という夏もあつたと思ひ出し

戻り梅雨地軸に滲みる音がする

三キロの土手に種蒔く秋桜

耳朵の透けて朝陽に輝く子

ひまわりと並んで夕陽見て染まる

西宮市 奥 田 みつ子

この指とまれ一人ぼっちじゃないんだよ

良妻賢母演じ疲れてきた私

時々は銃口が向く酒の席

男には分からねぬ石を磨いてる

鼻少し上向いているのも魅力

西宮市 西 口 いわゑ

さわやかに負けてビールのおいしけれ

母の日へみんな揃って食べに来る

店頭のカボチャよ君も輸入品

真ん中のばら一輪がもの申す

雲悠々昨日のことは忘れよう

西宮市 門 谷 たず子

老いすこし浅瀬を渡る足さぐり

慢性になつて解らぬ倅せ度

姑という名のこだわりや貝の砂

石段の中ほど仏と手を繋ぐ

ふところのやさしい風と老いてゆく

西宮市 井 上 松 煙

年金の自動振込みこれ文化

幽明を分けても思慕は深くなり

無口だが川柳が好き人が好き

真夏日や先ず箸を出す冷奴

憂い時は無心と書いた額を見る

西宮市 秋 元 てる

思わざり病弱の身に傘寿の賀

白い眉そは他人事と思つていた

右の手で冷える左手かばいつつ

友の眼がノーと言うてる止めておこ

新しい友に恵まれ街へ出る

自動改札ほんとに利口かつ頑固
西宮市 山本義子

髪洗う頭さえよと願いつつ

水たまり踏んで決心つけました

声高な人に負けとく立話

善悪を箸でつまむと波が立ち

西宮市 久保まさお

月下美人今年も咲いて友偲ぶ

八十路坂半ばを越せり冷奴

美しく老ゆるすべあり夏帽子

友逝けど月下美人は咲きつづけ

うぐいすの声やわらぎて梅雨明け

西宮市 緒方美津子

同居して孫とブランコ風生まれ

知恵袋小出しに暮すこれも知恵

七夕に先生と書く孫の夢

住みなれた敷居に躓く老母をみて

孫抱いて亡母のリズムで盆踊り

西宮市 井上信子

うとましく思う日もあるこの指輪

婚約指輪父の葬儀を明るくし

コーちゃんの愛の賛歌に酔う指輪

新天地自由の女神見つめつつ

戦禍に追われ持てる財産指に差し

相生市 中塚礎石

きよろきよると方向音痴へたこ焼き屋

倦怠期そろそろうなる洗濯機

長生きをしたくて止めた酒煙草

ジョーカーの出番忘れた負け戦

子も孫もおらぬ寂しい床柱
姫路市 古川奮水

観光もゆつくりと聞く国訛り

東林院悲哀も愛でる沙羅の花

カレンジャーめくると年も半ば過ぎ

恙無い証を配るお中元

風向きにだんだん珈琲冷めてくる

川西市 松本ただし

順番を先送りして生きてます

欲深い泥んこ暮しが好きだから

下積みの生き方持った大阪弁

つつこみとボケどぶ板を渡る路地

骨仏散骨 答まだでない

川西市 氏林洋敏

ベテランが雑談ばかりして帰り

新世紀僕が変身するのです

私のお金と妻は区別する

闇夜でも僕は眼鏡をかけている

本物が粗末な箱に入ってる

宝塚市 吉田笑女

年金を受けて暮しの足しになり

年金のお陰で登る八十路坂

炎天下またつかまった話好き

仏の花替えて落着く老いの部屋

亡き夫の写真へ朝夕手を合わせ

大阪市 本間満津子

世の中と私どちらか歪んでる

生きる厳しさ知っているやさしい人

脇役に徹して誇り持つてはる

よく切れる鉄危ない使いよう

植木散髪ごめんごめんと撫でながら

大阪市 西出楓楽

青春はるか太宰没して五十年

自分とのいくさが続く母を看る

相続税払う納得できぬまま

エプロンの似合う男を信じよう

そうめんに乗切れないぞ夏の陣

大阪市 津守柳伸

ストレスをとても優雅に消す扇

伊勢えびとワイン入り日は美しい

伊勢詣でおかげ横丁膝栗毛

日々好日感謝忘れぬしまい風呂

台風一過東ねた趣味を選び分ける

大阪市 川久保睦子

句読点きれいにつけて星になる

ポツクリ酒一人で飲んで逝かあった

夫が逝き泣ける幸せありがとう

バカキライ 届かぬ亡夫へ書く手紙

仏壇の上にはいつも天の道

大阪市 井上白峰

クレームがついて気付いた自己過信

坪億の土地にも蟻は棲んでいる

正直に生きた証の住居

虚しさを隠してたたむコンパクト

刃こぼれを研いで再起を考える

大阪市 川内叭笑

転職もままにならない子連れパパ

虎の威を借りて印パは睨み合い

視野全て牧場ばかり飽きる程(ブラジル紀行 三句)

空の青地平の緑果てしなく

ブラジルにズーズー弁が闊歩する

大阪市 梶本落児

五十年やつと女房の良さを知る

絵蠟燭亡父も微笑をしてるのだろ

七十九お伽噺が好きになる

七十九絹のバジャマを着てみたい

僕よりも男前です嫌いです

大阪市 川原章久

だんじり囃子響く平野は古い町

亡母と来た三朝の宿にフルムーン

水茄子の浅漬が乗る白い皿

沢庵を噛むと貧しい時の味

金婚に言葉は無用顔と顔

大阪市 河井庸佑

進む道野心や欲に迷わされ

弁解が過ぎて醜さだけ残る

些細なことで軽く考え掘る墓穴

若竹を大きく伸ばす竹を伐る

ささやかな協力襟に赤い羽根

大阪市 藤田頂留子

人も空気も信用できん世をなげき

御輿かつぐ中の一人はきつと亡兄

虹つれたシャワー野仏うれしそう

風船が割れて都会に懲りました

ぐらついただけとショックに強い彼

大阪市 稲本凡子

一人居に背中への傷のぬりぐすり

敬老パスつもり貯金も続かない

梅雨晴間わたくしなりの忙しさ

机の上を片付けすぎて落ちつけず

数えと満で喜寿の祝いを受けている

大阪市 奥田良子

夏ばての友にうなどんさげて行く

恋日記やき捨てる日を考える

お願いの一票くらし楽ならず

半夏生老女独居の絹半丁

船べりをたたいて川と話しかけ

大阪市 板東倫子

おそろいのドレスでシニアコーラス会

リストラに遭うて聖書を読む男

戦友の絆被災の老女たち

こだわりが解けてのどごし良い言葉

耳鳴りはエロスの吐息聞いてから

大阪市 中田あい子

同じような運命と知って塀がとれ

人の世に生き生涯を犬孤独

パチンコや折込み広告出す不況

見つけた迷子にっこり母は泣き

万馬券あててにっこり舅殿

大阪市 町田達子

あじさいに遅いが豪華な蓮を観る(三室戸)

奈良公園の良さ改めて梅雨晴間

蝸牛よそんなに雨が嬉しいの

酸欠へ突然蟬の大合唱

想い出がふつふつ凌霽花咲く旧家

大阪市 神夏磯 典子

跳びつける位置を探している蛙

お医者さんの話はしっかり聞いてくる

老犬と寄りあつて夏を越す

ブレゼントの服が私によく似合う

人間の条件を問う核実験

大阪市 小林 周 信

あじさいのお色直しへ戻り梅雨

マンネリを避けると歌う唄がない

自由とは何と退屈妻の留守

猫嫌い猫はとづくにその気なり

ダイヤの指輪買ってさしてく場所がない

大阪市 田 中 節 子

想像のふくらむ耳に花の咲く

淋しんぼしがらみの中這い出せぬ

こま結び我が十指ではほどけない

好きですと背中に指で書いた日も

去るものは追わずといえど未練あり

大阪市 福 岡 雅 楓

金環食神の指輪か宇宙展

石秘めるオーラ思いつ指輪さし

お渡りの装束みんな役者めく

ルーズソックス未来の母よ寂しすぎ

今ようと長いドレスを薦められ

大阪市 大塚 節 子

あきまへんもう飲めまへん北新地

同年の訃報身に沁む秋の月

六方も祖父 父ゆずり辰之助

通夜の席またええことで逢いましよな

遠雷と知れても窓をハタとしめ

大阪市 杉 澤 汀

拡声器雑音のまま戦やむ

八一五遮二無二生きた五十年

路地裏は暑さとうさの吹き溜り

浮草の花は流されながら咲く

白いのもあったか今朝の夾竹桃

大阪市 辻 川 慶 子

先生に手術おまかせ寝ています

想像もしないわたしが杖をつく

雨もよし頓堀の雨読んでいる

エンピツを持つ感触も久しぶり

夕暮れの渚で足を遊ばせる

堺市 黒 田 真 砂

梅雨晴れも降っても多忙主婦の日々

紫陽花 百合 ヒヤシンス咲き庭の露

夫病みて耐えるすべ知る白むくげ

天上から見守り給え薬師如來

子後の夫と連れだつて行く月参り

付添っていききたい老母の死出の旅
堺市 志田 千代

耳とぼし目乏し母の黄泉の旅
身支度も覚悟も出来て九十三歳
長生きを嘆いていたはつい三月
十四の目皆揃い母おくる

堺市 柿花 紀美女

茶所へ嫁いだ娘から新茶着く
久しぶり友と話すは病の事
背伸びして自信過剰のニューモード
水飲んで苦い後味消しておく
旗振りには妻にまかせて従って行く

堺市 神原 文

情熱が醒めないうちに旅に出る
青い目とプールが待っていてくれる
吊り橋を渡りきっても手をつなぎ
イヤリングは要らぬ福耳揺れている
梅雨さ中インターネットで旅三昧

堺市 山本 半銭

賽銭の音もひっそり独り旅
腰伸ばすように優しい雨となり
茄子胡瓜一本ずつの漬かけげん
一万歩あるく家原の文殊さん
にやにやと歩いて来はる携帯電話

高石市 浅野 房子

眼の手術心にかかる遠い人(二弘様)
存えて齒の浮くお世辞聞いている
一本の電話で事を済ます気が
なるようになって結果はひとりぼち
新聞を見れば買いたくなる馬券

貝塚市 池田 寿美子

情熱の翼がほしい世紀末
七夕に夢いっぱいのソプラノ聞く(佐藤しのぶさん)
まっすぐに天国へ行く曲を選ぶ
日陰から日向を見上げ想いやる
天平の蕤静寂雨しとど(唐招提寺)

岸和田市 高須賀 金太

ムカつくキレる貧しいころは無かったな
凡人の証すこしの酒で酔い
くずし字が読めない長雨の鬱よ
ピアスまで着けてそれでも男かい
悪いことしていないのに背が曲がる

岸和田市 寺田 甚一

○の日がむやみやたらにでき過ぎる
年金暮しいま現役にうらやまれ
大騒ぎして力の差知つただけ
一言と言って長広舌止ます
同窓会マドンナの側まだ人気

岸和田市 原 さよ子

儲けより味を大事にするのれん
はにかみも添えて少女は頭下げ
漫画本わき見もせずに読み通す

ニックネームつけて先生慕われる

ロッキーマンの氷河の水を二杯も飲み(カナダの旅)

岸和田市 長谷川 呂 万

花言葉知ってた僕に恋実る

頑固さは相譲らない爺と孫

炎天のゴルフ日傘へ老いを知る

ライバルに勝って娶った妻だけど

頑固者いまま活動写真なり

岸和田市 原 苑子

水音も静かにかける終い風呂

堅物の父だが寝顔やさしすぎ

一杯のお茶が私を丸め込む

祖父に丸見せに駆けてるランドセル

手作りの浴衣うれしい下駄が鳴る

岸和田市 芳 地 狸 村

南京路見舞う黄砂に目が痛い(上海 三句)

はなやかな彩が酔わせる不夜の街

京劇でフィナーレかざる別れ宴

イメージと違った美女の大阪弁

関空を借景にする大ジョッキ

岸和田市 藪 野 けい子

コンパクトで汗をおさえる氷水

ローカルの露天風呂行く女連れ

曲り角わき見している携帯電話

シーズンオフまとめ買いする赤札市

定価で買い赤札でその品と会う

岸和田市 古 野 ひ で

心おきなくひとり謳歌という余生

糠床の息吹きこゆる茄子の色

お元気ですか まあまあとしか言えませぬ

炎天をいとわぬ子等の頼もしき

あじさいの無残な姿炎天下

松原市 小 池 しげお

父だとは思えなかった父の思

大声で笑う取柄が一つある

正装のときは一緒に歩かない

真実を言うてやろうと芽が伸びる

だまされて嵌って一人笑いする

富田林市 片 岡 智恵子

人許すわたしの箱は小さすぎ

太陽がコトンと落ちる胸の底

肩の荷をおろしてからの肩の凝り

本心はとうに許している無言

睡蓮の花よ絆の濃く淡く

富田林市 藤田泰子

雨もよし大きな傘の下に居る
蜚飛ぶ私の庭のエルニーニョ
懐の奥まで見せて昼夜帯
根っこから引抜いておく芥子の花
颯爽と群抜いてゆく長い足

河内長野市 井上喜醉

伸ばしても巻いてもホースが好き
いけにえの円が悲しい脈を打つ
医学では奇跡の起ることもある
生きるため道を貫く蝸牛
タルマにも心配かけたが返り咲き

河内長野市 植村喜代

ペランダへ何でも干して山笑う
営業の口調で喋る娘の電話
ゆっくりと世間を見たい五月晴
桜散る次は貴女といつ会える
暑さ越す老人にいるエネルギー

河内長野市 加島由一

朝顔に声かけながら水をやる
叩かれてひとつ大きくなる男
懐に金携帯を持たされる
殴られた痛み知らない子の恐さ
負け方がよくて時々誉められる

藤井寺市 中島志洋

苦勞した事は言わない束ね髪
台風が去ってやれやれ虫の声
混浴と聞くがおっさんばかりや
星明かり意外な二人見てしま
星影のワルツで二人結ばれる

藤井寺市 福元みのる

誕生日かまってくれぬ歳となり
誕生日期して親子で孫さすとす
曾孫誕生もう邪魔せずに生きるだけ
対談にタイや見せたい手の仕事
人間が変らず政治なおのこと

藤井寺市 高田美代子

昭和史に忘れられないことばかり
女房もまんざらでなしすだれ越し
雷の視野にとびこむノッポビル
負けましたどつと疲れて帰るなり
セピア色になった写真に居るわたし

藤井寺市 鴨谷瑠美子

自由には金魚の自由鉢の中
自由にと書いたじゃがいも持ち帰り
自画像の何処とはなしに母に似る
花の量愛情の量比べられ
離れゆくところは船の汽笛ほど

羽曳野市 榎本吐来

逃げ場ない俺と付き合うアルコール
金の要るとき憶い出す親父さん

喫煙の動機があつた律儀者

他人事で無くなつたと知る遺言状

敗戦忌しみじみ届く蟬の声

羽曳野市 三好専平

片えくぼ可愛いだけに人を刺し

百歳の美人に小朝頬を染め

核抑止などとあぶない夢に酔い

威張つてる教師に渾名つきもせず

モーニングいつも卵とパンの耳

羽曳野市 吉川寿美

頂点を極めてからの荷の重さ

前書きも後書きもなく突然死

今更に自分の歳にうろたえる

蝶結びの堅さ女の自戒とも

仕合せが少し後から旅半ば

羽曳野市 福田満州

党名を覚えられないまま選挙

月の砂漠の唄が聞こえてくる切手

大失敗大洗濯で気分換え

初対面誤解されてるサングラス

サングラスいけずばあちゃんだと見られ

羽曳野市 酒井一壺

聞かれても昔のことは喋らない

仲人は二人の過去をほめすぎる

悪友がわたしの妻をかいかぶる

背の高い嫁に希望を托します

高かった服で大事に着ています

八尾市 村上剛治

高い方のまむしドリンク飲んでみる

稲妻に肚の底まで見すかされ

人のエゴ神はどこまで許すのか

おしゃべりな風が町内一巡り

本流に乗れない雑魚が群れている

八尾市 宮西弥生

お遍路の一步一步のほとけ道

百歳の女を裸にさせる夏

修羅越えた指で親の墓洗う

見えすいたウソが一層暑くする

暑中見舞戻り梅雨して涼しなり

八尾市 内海幸生

満開の君を信じて種を蒔く

本心はどれか見せてよ万華鏡

故郷の方向にいる外人墓地

株で損したとは家族つゆ知らず

ハンバーガーだけでも地球歩けます

電子手帳慣れるまでの忌ま忌まし
八尾市 高杉千歩

執着もほどほど軽く夏おくる
午後休診 画布に忘我の四五時間

老碌はせぬが体が萎えてくる
均等法妻は昇進したようだ

八尾市 宮崎シマ子

極楽鳥花つめて柩の釘を打つ
レモンスカッシュ墓参を終えた喉ごしに

茶漬サラサラ雷去んだその後
言いたい事全部喋った百日紅

いも虫におもいをつなぐ子供の目

八尾市 高橋夕花

一病につかず離れず妻の行
好き嫌いはげしき夫の白い皿

果物も魚もたつぷり妻の夏
これからの一日いちにち宝もの

梅干しへ子育ての如そそぐ愛

八尾市 村上ミツ子

冷蔵庫すいかに支配されている
かわい子旅に出したら帰らない

杭一本打って流れを変えました
ささやかな反抗知らん顔をされ

がっかりが続き期待をしなくなる

宮島の旅に原爆忌を想う

文学の小径で一句ひねりだす

チョンマゲの地ビール呑んで萩の夜

萩の風ころがなごむ城下町

人間が大好き湧いてくる笑顔

八尾市 神原まさと

ジंकスは妻に内緒で守ってる
蛍狩り孫に思い出残したい

産み月のトイレに団扇入れておく
パパ奮闘赤ちゃん用のパーゲンに

今が倅せ滝のしぶきに小さな虹

八尾市 篠原いつふみ

気休めの作り笑いが続かない
五色豆みたいに男頭染め

ぬか漬と梅干し自慢亡母譲り
損得を読んで女は手をつなぐ

背伸びした男の息が荒くなる

八尾市 吉村一風

父の日へ孫にエプロン贈られる
定年の首温泉に浮かばせる

雑念をつうんと払うかき氷
出世した苺ケーキにでんどのり

父の歳母の歳越し不埒者

八尾市 生 嶋 ますみ

子の過去を溜めて光っているボタン
点滴の音なく落ちて生きる欲

旅帰り大阪弁にほっとする

昔を許し老いた夫婦が手をつなぐ

子供達に忘れられてる父の日よ

東大阪市 森 下 愛 論

下界見て定量済まぬ大ジョッキ

黄昏の色にジョッキの色が冴え

失言が胸にもたれた夜の酒

焼酎へ低い理想という真昼

戦友会八十路の私二等兵

交野市 山 川 日出子

箱庭の小亀つまんで水洗い

パイパイの代りの羽かつばくらめ

浴衣がけ虫除けうちわ十八歳

泳ぐより夢中になった潮干狩り

青い目がラムネの栓に苦心する

豊中市 田 中 正 坊

もがいても人間稼業やめられぬ

上ったら下りねばならぬ石の段

田中家のメインバンクが火の車

未来図にバラ千本を描いたとて

さわいでも騒がなくても新世紀

豊中市 吉 田 あずき

早送りすれば人生大差なし

黙ってるあいだに崖へ立たされる

格言一つたぎる心を抑えてる

湯上りの髪をきりりと投票所

釣り上げた魚きらめくのも哀れ

豊中市 湯 浅 馬 洗

耳鳴りに重なる蟬のカルテット

立ち話日傘の垣が通せんぼ

ワープロに選択実任教えられ

点滴にボクのワープロまた遅れ

コンビニにベットのグズズある安堵

豊中市 滝 北 博 史

長男が何思うてかアメリカへ

送別会欠席に丸父母だから

老夫婦がジャマイカ探す世界地図

日は西に心太食べる露天風呂

露天風呂老妻めざし螢の火

豊中市 井 上 直 次

アメリカがくれた自由到我忘れ

携帯を持たぬ自由にある不自由

幸不幸指輪などには捕われず

喜寿と古稀絆は探くなつてゆく

予定にはなかつた椅子の掛け心地

人生の双六神に操られ

豊中市 江口 明光

サングラス掛けて男を透視する

男の瞳胸に集める夏の服

騒音の橋背負わされ瀬戸の島

もめ事の裏に透けてた下心

豊中市 田辺 正三郎

運命の女神忙し投票日

終戦日真っ赤に熟れていたトマト

片目だけあけた達磨が隅に居る

ひとりもの猫におやすみ言つて寝る

W杯まさかに希望かけてたが

箕面市 岩津 ようじ

予想通り善戦の上予選落ち(W杯)

母白寿逝く凌霄花咲き盛る中

金持ちのくせにアメリカ喧嘩好き

成績の他はいうことない孫だ

つい欲が信用させたその話

箕面市 出口 セツ子

孝行を競う花々盆の墓

賑やかな家族巢立ちの日の孤独

手伝いをさせて心を語り合い

美味しい酒いつ飲めるのかタイガース

後悔はしない花火の見事散る

コンチキチン曲がった腰も伸びてくる

分水嶺どう流れるか一しずく

クローン牛未知の命がいたましい

逢いたいと昔の友がくれた文

内緒にの一言やはり無駄だった

吹田市 山本 希久子

暑中見舞の暑の字がとても暑そうだ

マイナス思考の底に出発点があり

沈黙の向こうにやさしいみずうみ

指先は忘れぬ恋のブッシュホン

どんぐりのひとつがふいに光りだす

吹田市 瀬戸 まさよ

男にはない一徹さ土井たか子

花も葉も長持ちのする夏の花

叩かれた母に子どもは味方する

羨望と嫉妬にめげぬ仕事好き

ときどきは劣等感にしょぼくれる

吹田市 古川 喜美子

一人居の自由たのしむかたつむり

見ためには何処も明るい灯がともり

観音の御手に翡翠似合いそう

善根を積んでいたのは砂の上

万緑の中に淋しい色もある

吹田市 栗谷春子

身に負うた傷にわが身の唾が効く

姉妹はさすが笑いの場がおなじ

妹と笑うたあとの涙ふく

カーテンがゆれてやがては夏のゆめ

すずめたちあわてて帰ることはない

吹田市 石原靖巳

お名前はかねがねなんて注ぎにくる

うたた寝へ鳴る風鈴は子守唄

夏本番景気をつけろ笛太鼓

盧舎那仏に核なし平和祈るなり(唐招提寺拝観)

ブリッジバンクまたカタカナで惑わされ

吹田市 野下之男

腰痛も忘れてくれる当たり前

少年が疑いもせず重い銃

光秀がキレたと知らぬ本能寺

記念日は妻を立ててる旅の宿

嫁はんの肩越しに見る美女の顔

枚方市 前 たもつ

義母頼む隣近所も古い二人(義母ひとり住む)

老い独り自給自足の茄子実る

ふるさとで見ても阪神負けている

北斎の額縁抜ける里の山

おふくろと一度も呼べず六十年

枚方市 海老池 洋

寄る年波が涙法師にしてしまひ

殺虫剤ばんばん使い虫供養

逃げのびた虫か涼しい声で鳴く

散歩でもするかと猫も背伸びする

節約は矢つ張り美德 ダイオキシソ

枚方市 二宮山久

僕の夢知ってか知らぬか妻の愚痴

幸せは中くらいなりカンピール

目がさめることに感謝の手を合わす

子供から女に変わる衣替え

宅急便届くお隣いつも留守

枚方市 寺川弘一

生きるのに遠慮無用と紀元杉

縄文の風も聞いたか紀元杉

樹齢百年そろそろ尊敬されだした

延長もPK戦も無い人生

どぶ川に夏は淫らな夾竹桃

枚方市 森本節子

朝顔の初花すこし疵ついて

いさかひを見つめるベットの悲しい目

私の名火屋に託しそこなつた

床几にかけ黒蜜かかったところてん

丸じるし少なくなつたカレンダ―

守口市 結城君子

大正は隙みて省エネへ切替える
ヘッジファンド聞いてお鍋焦げつかせ

呼びとめて棉の花を教えられ

熱帯夜竜宮城の夢みてた

訪う家に沙羅の花咲く涼しさや

茨木市 藤井正雄

妻と子が何か隠している陽気

自由謳歌但し年金範囲内

追いかける未練を叱る影法師

定年を祝う妻との膝栗毛

退屈な自由毎日庭を掃く

茨木市 堀良江

真夏でも素足見せない母の足袋

金魚すくい破れてからの気合いかな

リュックサックに似合う帽子が増えてくる

伏せた目が好きなこけしに似てるひと

紫蘇を揉む両の手赤く染め上げて

茨木市 井上森生

敗戦の記憶じつとり暑い夏

一発の人を政治にサツカーに

悠々のシニア平日ハイキング

向日葵が天命悟る炎天下

子を思う刹那につこりと痴呆の母

茨木市 島元ふみ

ふるさとに似た町角で涙ぐむ

医療負担プラス帰りのレストラン

二時間の癒やしドラマのいい男

ストレスの元凶おーいと呼び給う

孫の目に残る私を美しく

高槻市 川島諷云児

牛歩でもよし晩学の辞書を繰る

愛と憎秘めてひとつの屋根の下

凡人に徹して生きるむずかしさ

色褪せた俵せ他人からもらう

こだわりを捨てると解けるもつれ糸

高槻市 傍島克治

家捜しなんて大げさ1D K

茱萸の実に幼き味のハイキング

埋み火と言うには早いまだ七十

お前もか連れなき蠅がつきまとう

雨上がり西日にキラリ雫落つ

高槻市 井上照子

初恋の師をお見舞いに京の道

治療する目にサンガラス気がひけて

幸せを頂き今日も箸をとる

欲ばりだ七夕願うことばかり

ミルク来い犬の名までも可笑し過ぎ

寝屋川市 江口 度

夕立の相合傘は絵にならぬ

朝は東夕べは西をいく歩道

何べんも念を押すから疑われ

いつまでの命か預金目減りして

疲れたと言わず揃える明日の靴

寝屋川市 森 茜

花片をきちんとたたみ木槿の訃

盆栽のようにカットをして貰う

朝顔がほっと笑ってもの忘れ

五人の子育てた腕に叶わない

白檀の香り残したワンルーム

寝屋川市 柴田 英壬子

牛蒡買えばあと切り屑で五目めし

切り詰めのくらしへどさりチラシ来る

溶けにくい氷を入れて盆の花

身に過ぎた願いを祈る灯を点し

甘えてるようで若者そうでなし

寝屋川市 後藤 黎之助

昨日今日儲りまっか聞えない

はいはいと妻は火花をうまく避け

歳時記と遊ぶ背中に声かけず

叱りつつ賞める言葉を探して

向日葵咲いた吾が家に嘘はない

寝屋川市 堀江 光子

輝いて生涯縛る小さな輪

金策に賈と分かった形見分け

何かある今日のトップの無表情

首のようにあじさい一輪壺の中

なお胸に弾むもの湧く誕生日

寝屋川市 北岡 波留吉

自分に勝つ名案がまだ浮かばない

名案を空振りさせた多数決

冥土から電波が届くお彼岸会

蓮のうてな一際映えるお彼岸会

表札は亡夫の名前で一人住む

寝屋川市 籠島 恵子

アホやなあなんて愛されてる証捉

地の底に引き込まれそう蟬しぐれ

なんでもいいなんでもいと食べてへん

完璧な言い訳だった夢の中

ちよっと派手目もいいが嫁がぬ娘がいてる

寝屋川市 太田 とし子

選挙前私大事な人らしい

歎びか必死か今日も蟬しぐれ

悔しくてきれいに切ったミジン切り

路線バス話半分乗せて出る

花に水パジャマ姿の両隣

寢屋川市 富山 ルイ子

大阪府 八十田 洞庵

いざとなるとオロオロしてたのだな
頑張らずそろりそろりと生きていく
体の痛み神が与えた試練かも
失明の不安来年する手術
双方で感謝さわやかに生きる

寢屋川市 坂上 高栄

旅芝居子役に花の紙つぶて
喜怒哀楽酒が場を持つ今の今
指相撲負けてやるのも人気取り
初盆の道遠かろう麻幹焚く
有難う命を貰う医の進歩

寢屋川市 酒井 勇太朗

仏独伊操り英語話せない
主婦の価値換算できぬ愛がある
本番でミスする癖は親ゆずり
プライドを捨てた父など見たくない
生きがいをくれと病母にせがまれる

大阪府 榎山 隆盛

立候補眠れる獅子も見当たらず
B面が当たりした微笑かな
はだしの子地雷の道を踏むでない
札束に表と裏が混り合い
不死鳥になったスタントマンの夢

呼び鈴へせて女の髪を撫で
息つめて昨日の答え待つわたし
打ち止めの火花にほっと空模様
ペンドこに未だ芽が出ない文綴る
勝鬨をあげる中にもさめたひと

大阪府 米澤 俣子

鉄より手軽さ恋し糸切り歯
神の造形何と鮮やか熱帯魚
ストレスを溜めてはじけた石榴の実
余生にも壁次々に立ち向かう
二人三脚紐の結び目つい忘れ

和歌山市 青枝 鉄治

民よりも己のための票集め
嘘言わぬ立候補者の希少価値
政治家の皆にかけたいポリグラフ
政見を聞いたが迷い深くなる
野仏も耳ふさいでる選挙カー

和歌山市 榎原 公子

紫の便り北からラベンダー
遠雷よ忘却なんてありはせぬ
遠蛙私に戻る十一時
既婚未婚トータルをする幸福度
攻撃のリズムが続く未完の譜

和歌山市 牛尾緑良

花時計待つ幸せを高ぶらす
K点を知らずに越した赤い糸
悲しみの刺がささった人嫌い
濡れてゆくつもり別れを見届けに
パレットの色を増やしにひとり旅

和歌山市 福本英子

遠い日の記憶風鈴から貰う
親を越す歩幅で後を振り向かぬ
苦い顔添えて青汁勧められ
妻の掌の中で泳いだ怠け癖
大声の公約破る金バッジ

和歌山市 福井桂香

はやばやと朝顔と逢うふたつみつ
ピカピカの金魚鉢なら住みにくし
消去法 私けされてなるものか
有権者 義務じゃないんだ権利だよ

ホイホイホイ一票一票掘り起こし

和歌山市 川上大輪

生きているこれが私の答です
めし屋の看板説得力がある
たこ焼きを抓む他人の不幸聞きながら
見送ればボールを人は打ちたがる
台本が無いから続くデスマッチ

和歌山市 川上富湖

ストローの穴に詰まった好奇心
開運の印鑑少し欠けている
哲学を語るとラーメンが延びる
牽制球だろう私を廻る風
どうしよう取り放題と書いてある

和歌山市 木村初子

屈託のない人生にVサイン
レトルトの膳に馴染めぬ老いの舌
セーリング吸い込まれそう海の蒼
無為の日々風と遊んでいるわたし
あつけらかんと笑いとばしている孤独

和歌山市 細川稚代

とれとれのニュースあなたにだけ洩らす
好漢も巨星も散った五月闇
私の知らないところで舞うドラマ
入院へまた呼びかける血の絆
七夕の夜に別れの話聞く

和歌山市 楠見章子

BSアンテナみんなフランス向いている
プチトマト気怠い庭を盛り上げて
特売日だろうか主婦のツーリング
レースのカーテンで宝の地図かくす
無言電話の震えを描く泥絵の具

和歌山市 田 中 み ね

未来ちゃんと呼べば凍々しく孫はアイノ

跪く姿勢に嵌る保証印

大卒を誇る貴方の読み違い

宇宙からの使者か話が噛み合わない

銀河鉄道へ乗って亡父さん帰らない

和歌山市 玉 置 当 代

夜のとばりおりて星くず摺めそろう

山村の暮らしに思う夜は夜で

そうかそうかと何時でも膝は待っている

同居から別居ようやく回る花時計

夏草よおまえに勝るものはなし

和歌山市 山 口 三 千 子

少子化と聞くのに猫の子が増える

子を当てにせずゴーイング マイウエー

老いてから齢より若い服を買う

社交下手何時も粋から外される

拭き掃除すれば天気が変わりだす

和歌山市 桜 井 千 秀

ガラス戸に止まってハエの物思い

損得で焦ると秤狂い勝ち

ロボットに足跡あろうはずがない

ネクタイの無駄を縮めない人が言う

大自然の調和完璧だと思っ

和歌山市 古久保 和 子

剣花坊の句碑振り出しに萩の旅

日本が動いた庵ほどの塾(松下村塾)

臨月の妊婦に敵うものはない

黙々と働いている貨物駅

ハンモック胎児の夢もこのように

和歌山市 池 永 正 匍

白は白 自分の色を守る花

ギャル達に元陸軍が追い越され

そろばんの腕は船場で生き続け

豪華版一冊だけを置いた棚

せせらぎはピアノノソナタか三味の音か

和歌山市 宮 口 克 子

殿方はいつも勝手ネいいながら

奥深く広く根つ子のど根性

七味唐辛子の一つが欠けてからの味

アクセルもブレーキも右の足ばかり

原点に戻れぬ洗いなおせない

海南省 三 宅 保 州

社長室発令雷注意報

プランコの下に限って水たまり

無雑作に秘書花束を横へやり

飛行機を仰々しいと思っ鳥

しあわせに気付いていない倦怠期

奈良市 米田恭昌

父も古い雷鳴小さくなくなる

三世代同居畳の部屋の姥捨て間

くつろぎをやつと覚えた棺の中

表より裏の話が面白い

天平の伽藍は遠くから眺め

奈良市 天正千梢

玉葱の匂い流れて朝の市

肩書を光背と見し名刺受く

水平線オーイと呼んでみたくなり

正論を吐いているのに拍手なし

結局は金があるので座はしらけ

生駒市 麻生アート

淋しいと素直に言える塔の影

何くそと思う轍が泥を跳ね

雨の音午前一時を呑みながら

雷鳴をレクイエムと聞く三回忌

井勘定お金に縁のない男

生駒市 北山悟郎

梅雨空に心のネジがゆるんでる

根性を夏瘦せさせてなるものか

さんさんと栄えの陽浴びる時を待つ

今も僕続けて居ます捧げ銃

見栄捨てれば広々とした天地有り

大和高田市 岸本豊平次

一年中紅いが林檎に味の匂

止まり木のとまり心地を知らぬ下戸

広辞苑五七五が纏まらず

父母に孝 兄弟に友 夫婦和し

同期会思い出せないまま握手

大和郡山市 坊農柳弘

円安の煽りハワイが沖縄に

一坪の庭にカンナもひまわりも

地藏盆絵日記急ぐ孫の部屋

コスモスが人恋し風に風に揺れ

夕顔に恋の気配を見透かされ

大和郡山市 榊原慧心

虫メガネ夫婦で使うようになり

鳴く虫もその日その日の気分あろ

家ができ孫が生まれて次の夢

上役を夢の中では叱りつけ

味よりもいわれを食べる祝い膳

京都市 都倉求芽

絵の餅が今日もポストに選挙前

任期中にまた殿様がキレました

天気図に妥協はしない雲の峰

脳の辞書ときどきめくれぬ時がある

履歴書に特技正座と書く時が

京都市 大河 未佐子

冷えた茶が立板に水堰止める

イケイケの友に貰ったキヤミソール

あの若者の父さんならばおおてみよ

黒豆が炊けて自立の主夫となる

私観る男の齢も老いてゆく

京都府 稲葉 冬葉

冷静になっておつしやる意味が解け

無口だが誠が書いてあるハガキ

腹心の友に愛犬吠えやまぬ

昨日の今日で笑ってはいられない

訣別のセリフ残像を深くする

富山市 酒井 輝

雲の無い空いつわりの背に重い

自転車気兼ね人にもクルマにも

他所行きの言葉で妻に叛かれる

断崖に立つと後ろに見えぬ影

解るはず無言で無言電話切る

富山市 島 ひかる

梅雨明けの方から暑中見舞来る

痛いほど叩き人まちがいされる

よく喋る妻の寡黙にふと気付き

訓練と言う非常時の飯を炊く

雪山の遭難を読む熱帯夜

富山県 増田 紗弓

視野無限風が背を押す交差点

やわらかい海だ帽子が寄ってくる

ひっそりとひとりの部屋の冷奴

弱そうなおおばちゃんらしい吠えられる

川柳で気を紛らせて歯科の椅子

可児市 板山 まみ子

父の日の広告に見たシャツが来る

生ビール女の喉も歓喜させ

木もれ日に甘酒香る石だたみ(箱根旧海道)

湧水へ目玉ギョロリの鬼ヤンマ(柿田川)

還暦の裸身もうつる鏡ふく

大山市 早川 盛夫

四捨五入美人の方へ入れておく

釣りバカの仕事に欲しい読みと勘

鍵穴を覗く程度の好奇心

最後には骨骨骨になる命

天国じゃ父に会えないかも知れぬ

静岡市 安本 晃授

八起き目の鼻先で呼ぶ亡父の声

少々の解毒剤なら持ち歩く

通り雨止むと夫婦の猿芝居

礼節の厳しい父は兵のまま

肩書きを捨てる未来図措き替える

富士宮市 渥美弧秀

トッキョキョクと啼く鳥と住み森昏れる

窓は濃霧墨絵の界をホーホケキョ

恩師の訃受話器に泪こぼれつつ

盆に吊る風鈴亡母の声となる

二病息災千変万化の雲と在り

静岡県 蘭田 獬 杏

駆けて来た子供汗の爽やかさ

ひまわりが若し喋ったら毒舌だ

泣きに来たことを忘れて蝶を追

起工式神事の前をつばめ翔ぶ

梅雨晴間我がふる里の美しさ

横浜市 菱田 満 秋

七日は師の日君の忌忘れない(吉本菁風君へ)

ふるさとの土が黄砂となつて降り

聴き役に回らされてる蒸しタオル

家事をよくさばる可愛い酔っぱらい

身の内に別人がいて腹が鳴る

横浜市 清水 潮 華

携帯を握って座席眠りこけ

何時見ても車庫で待機の消防車

炎熱に背広妻には見せぬ汗

結局は着ない特売品を買

梅雨最中冷し中華が貼り出され

横浜市 菊地 政 勝

定年に作務衣着せられ典座役

正直に話せばまゆをしめられ

損得で知らないふりをする芝居

蜜カラに茶髪がまじる伝統校

初めてのデイズニールランドに若がり

町田市 竹内 紫 鍔

父の日は朗々と受け宅配便

大正の園児警咳求められ(幼稚園記念行事)

愛唱歌のあるカラオケへ孫たちと

家になしたバコの灰を落とす指

電子音もよしパソコンで合唱譜

仙台市 川村 映 輝

参院選明治はすでに影もなし

妻病んでコンビニエンスで朝餉買

日記帳妻の病状だけ余白なし

前例が無いなら前例作ればよい

酒好きの医者が許した二〇〇CC

弘前市 斉藤 昴

梅雨空をそつと見上げるねぶた絵師

雄花にも咲いた役目がちゃんとする

縄文の顔で出て来た栗古木

クローン牛やがてこの土踏むだらう

下校の子ねぶたの笛を吹きながら

雑草にだつて出身地はあろう

弘前市 高瀬霜石

丸木橋生まれの時も死ぬ時も

ざんぶざんぶ洗い流せる肩の幅

青空が「進め」と手旗振っている

にんげんでありたい親である前に

弘前市 小枝 ふさる

老木に気品漂う臥竜梅

すらすらと職業欄に妻と書く

手を焼いたあの子も親になると言う

背を向けたままで世間が疎くなり

正論を吐いた一人が輪の外に

弘前市 小寺花峯

リストラの波に浮かんだ子の寝顔

まだ先があるやに思う五十年

向日葵に吐いてる嘘が見破られ

均等法夫婦茶碗についての差

肝臓とよろしくやって酒二合

弘前市 蒔苗果林

お岩木山おがむよいことありました

田に入る水音よければ通り越す

おはようと蒼あわい稲掌に挟む

描いた絵が頑張ったねと笑い出す

薬缶なんか爺が研くと不足そに

伯父と甥暗い縁の総穩寺

弘前市 一戸ツネ

前向きに若さが戻る好奇心

女です指の毛糸になみだ壺

カルテから命の音が濁濁と

預金帳に暮しの疵の句読点

弘前市 櫻庭順風

無為無策ごうごうと音ばかり

コックピットの阿吽の呼吸する計器

コックピットの視野にオビ川収まらん

上天気沸く雲海の越天楽

丸い虹再度拝謁仰せつけ

弘前市 中山雅城

寄せ書きで孫から貰う古希祝

富士山は裾の乱れを気に掛ける

岩木山富士の気品に憧れる

河口湖富士を見たさに宿をとる

情っ張りで北の段差を埋めている

弘前市 岡本花匠

ミニトマト陽の愛みうけ子沢山

新じゃがの誇りに満ちた顔の旅

髪染めておとも残り火を燃やす

無心の掌合わすと詩想湧きあがる

バス旅行みな善人の貌ばかり

弘前市 今 愁 女

(生恵子改め)

五パーセントが痛い施政を変えなくちや
この不況政治の流れ変えてゆく
サポーターになつてシラクが興奮す
エアコンとビール不景気突つ走る
夏柑がグレープ代り秋間近

弘前市 福 士 慕 情

味噌汁にうまきいったと独り言
隣でも電話で済ます留守の礼
湯豆腐をなかなか取れぬ塗りの箸
さくら鍋馬がぐつぐつ文句いう
悪友と認めあつてる銚子猪口

黒石市 相 馬 一 花

セールの口三味線が止まらない
ご婦人と握手したくて行くダンス
アテランス脱いで頭をかくトイレ
果実酒がみんなワインの名乗り上げ
エンマには効くか効かぬか袖の下

十和田市 小笠原 敏 人

森林 鳴く鶯の姿無し
打たせ湯で破れた恋を打ち流し
懐かしく銚子片手に立ち話
我が片言生かしてくる人がいる
荷を降し見上げる空の雲はしる(定年退職)

十和田市 阿 部 進

怖いもの何にもなかった若い頃
カロリーにこだわる妻の料理下手
何よりもおいしい母の祭りずし
がらくたを大事にしてる老いし母
玄人も跣だ祖母の手打ちそば

青森県 諏 訪 柳 々

浴衣着て裾に女の香を零す
雨あがり青葉の贅を拝みおり
十年もまたたく間ですねお亡母さん
広く深く厳しく楽しく生きようか
原稿用紙真つ赤になつて朝日浴び

青森県 西 谷 大 吾

鬼一匹人差指に飼っている
一本の指が愛憎使い分け
荷崩れに気づかず駄馬は坂上る
行く当てがあるわけでなしカタツムリ
靴下の穴を這い出る蟻の列

砂川市 大 橋 政 良

読経より遺産気になっている親子
美しい嘘が一輪挿しである
大ジョッキ渴いた脳をしめらせる
未練とは泡の流れるようなもの
出る釘で目を放されぬのが一つ

熊本県 岩切康子

三浦三陸海産物の寄る厨

優しさが狙われている訪問売り

輪に入らぬわけを痛みが覚えてる

鴨が梅桃へ連れ呼ぶ嬉し鳴き

高知県 小澤幸泉

勝って飲み負けてまた酌む土佐の味

シャイな父手紙読まずに泣いている

季節感さがして歩くビルの街

結局はどこが変った戦終え

香川県 山地マツエ

花植えて老いの狭庭を弾ませる

報恩講今日一日は善人に

節太い指光らせて参観日

十戒をやぶる誘いに負けている

出雲市 小玉満江

叱られる幸せだつてあるんだね

コケコッコー茶席へ思わぬ声がする

場をぬけてトイレで二人長話

陽はさんさん読経は続くお葬式

鳥取市 福田登美

雨あがり紫陽花が濃く冴えている

踏まれても秘かに花を抱いている

ささやかな希望入れたい玉手箱

寺の鐘かすかな慕情かくれんぼ

鳥取市 坂田和歌子

卒塔婆も引火しそうな炎天下

耳たぶが厚い薄いと女たち

ただ黙し才市の詩を読むばかり

永遠の波を見おろろす千枚田

米子市 光井玲子

古い家に蔦を這わして生きのびる

少うし華やいでみよう残り時間

昔むかしが詰まる鏡台の引出し

底辺を這つても箸ははなさない

倉吉市 最上和枝

長話子供視野から離さない

初孫をひぎに仏の顔になる

敗け犬も理あり尻尾は振りません

ふらふらと大学を出てフリーター

倉吉市 山本玲子

真夏日に手抜きとみせぬ冷ややつこ

絵日記に太陽かいて向日葵かいた

三文判ですぐに間に合う名前です

ウイंकをしたまま立っている達磨

鳥取県 権代康女

ヒロインにされて仕舞った祝賀会

六人の友がこの世に見当らぬ

なまぬるい風で眠けにさそわれる

不景気を乗り越すバネが見当らず

妻逝つて加減が出来ぬ食の味
ピンボケにならないように眼鏡拭く
変な声喉頭癌かあのからす
投票は美女の候補に入れといた

鳥取県 山本 正光

娘が飾る意中の人があるらしい
此処もやっぱり緑を消して街が出来
此処の家も子のない夫婦共かせぎ
すんなりと本音をだした喋りすぎ

鳥取県 黒田 くに子

麦わら帽夏至より早く愛用し
若い者らしい気炎だ気持良い
晩秋の日暮れ靄がら焼く匂い
影つかぬ真昼の道を風とゆく

鳥取県 国森 武子

鶯に路を尋ねる花遍路
前を行く犬振り返り振り返り
夏祭り男の匂いだけ残り
禁酒した男冷たい餅が待ち

岡山県 荻野 鮫虎狼

ミニトマトずらり並んで赤くなる
Tシャツに汗が染みてる良い笑顔
コッペパン戦後はうまいパンでした
若者はハンバーガーにかぶり付く

西宮市 菊池 トミエ

亡き犬に似た置物に呼び掛ける
知らずでも識り過ぎもまた不幸せ
雨に良し艶滴らす花菖蒲
六歳の六月六日初御辞儀

宝塚市 黒台 伊佐武

半分は人のふところ当てにする
景気よい話に釘掛け直す
灰色のまんまで幕を引ききたがる
無い知恵を絞れば汗になつてでる

兵庫県 大谷 幸次郎

蛇口からぬるい水出て皆呆ける
出になつた涙映画に来て流し
子供より夫のしつけ骨が折れ
見つめられ咲こうと露地の花

大阪市 渡部 さと美

窓際にすだれ吊るして梅雨の明け
病窓にだんじり囃子遠く聞く
ヘルパーさんに頼む買物知れている
伸びきつて高枝鋏手に負えず

大阪市 北勝 美

誕生日の弁当なのに箸がない
独り暮しいつかこころに高い塀
一葉の映えた明治の日記帳
忘れてた快気に届く胡蝶蘭

大阪市 清水 絹子

大阪市 岡本久峰

鹿抜きに奈良の風景語れない
奈良漬を土産に友を見舞いけり
痛む足ひきずり心充ち足りる
川柳の祭典に湧く能楽堂

大阪市 清水利武

御先祖の霊喜んでいる盂蘭盆会
病室の窓から見てる娑婆の顔
土用丑鰻の助け借る暑さ
暑かった夏もどこやらやっとな秋

大阪市 小糸昭子

窓開けて景気占う今日の雲
プライドが変に纏れて死に急ぎ
大木に耳あて聞いた今日の運
内緒事電波のように風のように

大阪市 寺井東雲

スーパ―へおとうさん行くと買い過ぎる
一人旅過去から逃げる時もある
この薬一生飲んでと医者が言う
わき見せず水着の一点見つめてる

大阪市 松尾柳右子

涙枯れ喪が明けました蟬しぐれ
墓参り歓迎してる赤トンボ
炎天の信号待ちへドツと汗
信号を渡る犬にも明日がある

大阪市 津村志華子

日溜りで舟こぐ老母に菩薩みる
紅ひいて仏に朝のご挨拶
くすりやの回し者ほど数を呑み
朝シャンで老化の脳を目覚めさせ

堺市 近藤豊子

重そうにあじさいうつす昼の池
スイートピーうつむいたまま枯れてゆく
貴賓席飾りになつてくれてはる
初版本作者にめぐりあったよう

堺市 宮本かりん

昔話がたぎってお茶が冷めている
ストップの効かない口になり始め
お調子に乗りすぎですと影ぼうし
夏だなあ大口あけて西瓜たべ

和泉市 岡井やすお

臓器移植二重人格出ないかな
いにしへのピアスおしゃれか耳枷か
フィットネスクラブの帰り味の店
無料講座風袋料はちゃんと取り

和泉市 西岡洛醉

今日と言う戦へ吊革派手に揺れ
愛情を弥勒菩薩の指に知る
縁側の素足へ夏が語り掛け
可憐なる花の余生を抱いて生き

岸和田市 井 齋 一 齋

愛情を無視され女員になる
弱虫は二葉のうちに間引かれる
旅に来て父はビデオに無我夢中
ちぐはぐの返事が返る共白髪

八尾市 長谷川 春 蘭

夏旅の留守を守りて今朝二輪
独り居るこの空しさと扇風機
抱きし児の足が喜ぶ遠花火
襖みならずす男神今はなく

東大阪市 安 永 春

(晩子改め)

木道を水芭蕉には会えもせず
散歩道小粋にハット老夫婦
好奇心赤青黄色へアールック
キャンパスへ通りたくなるスニーカー

豊中市 松 岡 久留美

明月にあしたの無事を祈る母
冴え渡る月に心を見すかされ
生涯を気ままに生きた老いの幸
彼岸会の灯籠の灯が美しい

箕面市 椎 江 清 芳

廃船が増えて港が風邪を引く
花道を渡って弥陀の掌に還る
もう一度転べば記憶戻るかも
土の香の匂い父から来た学資

池田市 藤 井 計 光

指揮官はマイナス思考抱かない
ウインクの上手い紫陽花振り向かれ
喪服からのぞくうなじにほだされる
人間の業に女は立ち向かう

池田市 岡 本 吉太郎

大男言葉やさしく頼りない
飲まされて本音がこぼれあわててる
裏街道ばかり歩いて我れ淋し
金かかる話になるときえる人

吹田市 茂 見 よ志子

かあさんは家庭の華よ老いたとて
百合の名はモナリザ娘よりクール便
覚えは遅く忘れる速き嗚呼かなし
監査役判押すだけと長寿会

寝屋川市 岸 野 あやめ

東京へ来てまで買物好きの癖(東京の娘の家で 三句)
東京は近くて遠い歩道橋
祖母ちゃんは磨くキッチン風呂の椅子
天気運氣だて素直な五十人

寝屋川市 平 松 かすみ

喧嘩など出来ぬみーんな夫婦づれ
九回の裏かも今日を楽しもう
サークル日老いルンロンとシャトルバス
自己主張出来ぬ小花を束にする

和歌山市 山根めぐみ

水 煙 抄 (追加)

この指に戻らぬ子らの竹とんぼ
明日も振る尻尾ゆつくり休ませる
青柿も青いちじくも絵にならず
コツコツと生きるアイデア出ぬままに

横浜市 後藤早智

梅雨晴れの一日倍にして過ごし
気晴らしに田舎暮しの本を買
南国の海を眺めに休暇取り
新しい羽で七日をセミは鳴き

弘前市 相馬銀波

叔父伯母の従兄妹で亡父の七回忌
外食だ弁当買いだ若夫婦
計算は旨いが義理に疎すぎる
輪の中も輪の外も好き見る若さ

八戸市 島田昭治

白血病悪い病気にとりつかれ
三十四あまりに哀しい佳子さんの死
墓参り心全部を捧げて来
死んだひとに恋しているから死なれない

麻生路郎著「川柳とは何か」(復刻版)

麻生アート発行・橘高薫風序・B6判266頁

美装製本・頒価2000円(〒340円)

お申込みは川柳塔社事務所へ

定年後あっさり夫婦入れかわり
ビザカード持つてるだけの旅気分
愛媛県 宮本末子
大阪市 榎本 日の出
(日出子改め)

倒産の記事読みかえす炎天下
医者よりも信じて貼った常備薬
鳴門市 八木芳水

公園に犬のトイレのない異臭
しんがりを駆けて参加の意義を知る
枚方市 大昇隆広

キリの無いグルメの先に母の味
バカらしい世事も許せる余生なり
岡山市 清水金太郎

なるようになりつつ地球回って行く
選挙戦みんな上手な綴り方
鳥取市 谷岡清子

ナツメロに若き日の血が蘇る
ごきぶりが速いが勝ちと笑ってる
泉佐野市 大工静子

浮腫む足転んでなるか四股踏んで
長命は食べ物でそれほんとかな
松江市 松浦登志子

腹減った杜仲茶飲んでホッホッホ
金色のトンボ盆には赤トンボ

自選集

月原宵明

瞑想の中に残っていた軍歌
芸が身を滅ぼし路地の奥に住む
サツカーに生き甲斐貰う車椅子
婆ちゃんの青春がある小引出し
門衛にしては仁王の威張り過ぎ

黒川紫香

治ったねとお医者の声も弾んでる
塀裏を通る丑三つどきの声
夕焼けがいいので外へ誘い出す
明石大橋スイスイスイとみな通り
牛乳の冷たい味がまた美味い(牧場にて)

藤井明朗

母の愛効いたお灸の跡がある
足痛へ歳のせいだと医師笑う
太陽が健康守ってくれる汗
世話人で通した父のお人好し
多産系の日本人少子化に無理がある

松川杜的

M病院にて
お隣は何する人ぞ四人部屋
灯の無い世界が刻一刻と白い壁
即時入院エンピツ一本が貴重品
ドア開く度妻か妻かと待つしじま
先に年齢言うたらあかんお医者はん

野田素身郎

あの隅でいつも待ってた喫茶店
リハビリの笑窪かわいい療養士
遺言を書くには少し早い古稀
ワープロをただ打つだけの恋心
この夏もどうにか越せた秋の風

野村太茂津

癌信号かピクリ横腹驚かされ
横腹の躊躇い痕を撫でてみる
拘わりを捨てると風は爽やかだ
現代を悲観論では進まない
ちゃらんぼらんんな人に委せてみたものの

恒松 叮紅

直線がとても気になる几帳面
紙によくなじんで筆が軽くなる
人柄がにじむきれいなベンの跡
長針が遅々と進まぬ無策の日
背を曲げているから影に叱られる

西田 柳宏子

台風も連れずに今年の夏は来ぬ
梅雨もまだ明けぬに暑さ夏本番
寝苦しい暑さわが家はとうに夏
二人して一丁前だよなあお前
齢かくす妻の化粧が長くなり

遠山 可住

社長という髭が今だに落とせない
ウエートレス素敵コーヒー一杯に
エルニーニョですかりんごの実が着かず
愛憎の吊橋古希へ揺れつづく
あきらめるわけにはいかぬ古希の恋

辻 白溪子

より添うて歩くに丁度よい暗さ
居酒屋のコップに枯れたままの花
言訳をかえず言葉に嘘がある
いじめっこなどは居らない手話仲間
遅刻して同じ言訳ばかりする

小林 由多香

しつこいと言われようとも靴が向く
曲っても味には変りない胡瓜
許すとは言わない父の目が笑う
人柄が良すぎて攻める隙がない
酒ぐせが悪く群から外される

正本 水客

さりげなく立って障子を閉めてくれ
こだわりを捨てろと月がのぼりきる
泣き笑いして座のふんいきを変えてくれ
峰打ちの意味がわからぬ世とはなり
背伸びしてものを言うなど他人めく

波多野 五楽庵

人間の演技に少し疲れ果て
極楽も地獄も行って見たいとこ
歯刷牙子が今日の命を磨き出し
ピアノスト私のアクビ見ましたか
神様とジャンケンをしている夕日

阿 萬 萬 的

好胤さん死へしみじみと塔仰ぐ
背伸びした自分を悔いて脱ぐ背広
少しずれて妥協するのも齡のせい
年の功 的を外さず言う皮肉
屋久杉のいのちに教えられるもの

小西雄々

駅長の白手袋に安堵感

不本意な別れまますます微熱でる
稼ぎ場のネオン待つてる眉を引く
モナリザに相談しても返事せず
晩学で摺みはなさぬ青い鳥

金井文秋

賞味期限過ぎた余生に人間味
呆け封じストレス封じ趣味を持つ
鉛筆削った頃のナイフは友達だ
ドシャ降りへ朝顔日延べ出来ず咲く
カタカナ語の花なお分らない季節感

宮口笛生

ピアス揺れて男らしさの無い男
一蓮托生政治も君も悪いのよ
もう夏はいらんいらんと熱帯夜
ナスキュウリトマト瓜まで鳥食べ
止り木の温みが好きでコップ酒

板尾岳人

洋菓子店主 五句
小生もチーズケーキも年をとり
十八年錨を上げて海に出る
どの島に着いても種火絶やさない
贈答品 和菓子 洋菓子十八年
夫婦とや春夏秋冬旅支度

藤村 女

心ゆるすと風は何でも話し出す
のびのびと長旅をする蝸牛
さわやかな朝が欲しくてガラス拭く
母の味たっぷり見せて茄子の色
夕顔がおっとりひらく夕月夜

八木千代

どうしたことか秋の暦に華のいろ
褪色をしてもかごめの華である
オフィスには予備の華まで育っている
結界のあたりに根づく曼珠沙華
背姿も華でなくてはならぬなり

高杉鬼遊

お詫びから始まる便り筆無精
抽斗に満期の金を休ませる
ゴキブリの一びき殺す仏の日
貧しさに慣らされころ豊かなり
うつぶせに夫を寝かす保険金

河内天笑

木洩れ日がぼくの五感をつつき出す
夕立を浴びてよろこぶ茄子の花
心おきなく蟻螂を眺めている
汗を拭く間に逆転がはじまった
偏屈とど偏屈やな君と僕

・落ばした木にわたしをおもつなり

肉体を苦しめあえぐことで心の苦しみを忘れようとする私に与えられたたつた一つの道

・ひとりごととしてあきらめまじよか

・よるの日記に死のとかきます

・わたくしに白き花あり死をしいる

白い花は愛する乙女への幻想か。若い看護婦さんらしい。冒頭の路郎の句の小町だろう。その激情をおさめてくれるのは晴れた美しい朝の空である。

・指きりをした日をちらりおもつなり

断崖へ足を掛けるが、足はふるえるだけ、喰いながら波を聞いている私への自嘲

・だまって梨くつ旅をつづける

・あきらめて臥ているへ

遍路のりんなって行きます

・秋ふかくまた瘦せましたとかくのです

・痰ばかり出てひとりの旅の霧ふかく

高知にたどり着き、帆船の人たちが歓迎の宴をして下さる。酒の強さを言われながら胃をいためた私へ笑げんの威勢の良さ。

ひとり宿へ帰つてくるとボンボン花火の音

・きみを忘れる巡礼の旅です

・巡礼の静太に花火みえません

日めくりばかりが秋の風にめくられてゆき、いよいよ秋も深まってくる。

・巡礼に桑畑のむこう柿うれて

巡礼の果てに見た夕日に映える鈴なりの柿の実は、静太には寂光土ではなかったか。

さて、ここでまとめとして、昭和十年一月

一日発行の「静太句集」に触れておく。

序文は麻生路郎

「静太句集の序文を書くためにバットを幾ら喫ったかしかない。病を抱いて句の中に生きる生活にも、十二月の風はさぞつめたいたろうと思うと、ペンの運びにもぶりがちである。(後略)」と十行ほどで、かつて革新を目指すした路郎先生も「川柳雑誌」を軌道に乗せて十数年、十ヶ年計画の安定を見た時期なれば自由律には厳しい処し方であったか、また一年後の死など予期されなかつたらう。

「静太句集」抄(新仮名遣い)

さびしさに万年筆を持っている
死ぬまぼろしいやですいやです
真昼月僕は施療患者です

とかげが美しい僕の恋です

なおつてみせるぞあきのそらはすむ

好きな看護婦さんの靴がちびてる

なおりたくおもつ朝刊のにおいする

咳すれば夢は流れてしまつなり

ひるのなみだは

うちわであおいでいるのです

死にはしませぬのはの写真をみています

あきのあめきみはぼすとのほうにゆく

ふるさとの夢ばかりなり落葉する

自嘲する中に自分の鼻があり

蟬が啼いていますね

お母さんくすりのみまます

恋すてた静太へ雨がふつている

句集出版後の句

あおのけのわたしに春が徂くのです

ことわれしに

おじゃまいたしましたというてでる

秋の汽車きいてひとりの恋にしておきます

(一〇・一一・二)

各地で追悼会あり、柳人悼句を捧げる中
で私が一番感銘したのは長野文庫の作である。
生命を一句一句にわけたるか

座右の句・私の句 特集 (2)

座右の句

あんたかてうちかて阿呆で伸直り (天笑)

私の句

妻だからためらわないでノーという 高田 星子

座右の句

稔るほど頭を垂れる稲穂かな

私の句

花を見たついでに拝む阿弥陀様 田辺 正三郎

座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか (薰風)

私の句

転んだらそこに思わぬ青い空 富永 敬子

座右の句

友を思いわが身を思う窓の星 (薰風)

私の句

ふんぎりがついたようだネい顔だ 奥村 しずえ

座右の句

旅人も月もやがては去る砂丘 (薰風)

私の句

子も親も一晩だけのクリスチャン 板山 まみ子

座右の句

一步出ずれば吾れ旅人となる心 (栗)

私の句

新茶入れ白い時間の中にいる 木村 初子

座右の句

労働歌蟻が歌えば凄かろう (薰風)

私の句

じいちゃんの顔に似てくる焼きなすび 楠見 章子

座右の句

転んだら天を仰いで寝てやろう (美房)

私の句

遅れても我が道をゆく蝸牛 山根 めぐみ

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

究極のグルメと思うにぎり飯

石原靖巳

座右の句

参観日この秀才の親が来ず

(薰風)

私の句

道順は夫の背なに書いてある

神原文

座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

(薰風)

私の句

提案をした本人がやらされる

菊地政勝

座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

(薰風)

私の句

巢立つ子の背を見て亡母の心知る

後藤早智

座右の句

山の本読む昂ぶりを老いとせず

(竹二)

私の句

一徹を通し暖簾にしみた味

早川盛夫

座右の句

人恋し人煩わし波の音

(葉)

私の句

持ち味を活かせば塩も甘くなる

川久保睦子

座右の句

もう未練ないが糸屑とつてやり

(路郎)

私の句

手を焼いた子が一番の親思い

篠原いつふみ

座右の句

魂で咲き魂で散るさくら

(薰風)

私の句

狙の鯉の涙を見てしまふ

神原まさと

座右の句

富士山の藍に一礼してしまふ

(薰風)

私の句

明日にまた私がつける灯消す

村上ミツ子

座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

(路郎)

私の句

疑わず出されたお茶を飲んでいる

村上剛治

座右の句

旅人も月もやがては去る砂丘

(薰風)

私の句

切れた風追つて砂丘にまだいます

塔 寛子

座右の句

虎杖の中の空気とともだちだ

(夢草)

私の句

しあわせが行ったり来たりラムネ玉

石上 悦子

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

塩分を氣遣う母の迷い箸

富坂 志重

座右の句

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

(栞)

私の句

奥さんがつがねば飯を食わぬくせ

二宗 吟平

座右の句

人恋し人煩わし波の音

(栞)

私の句

老いてなお人敬いて長寿たり

坊農 柳弘

座右の句

六角堂 幾何学的に暮れて行き

(路生)

私の句

古希からは子丑寅と急テンポ

竹内 紫鏡

座右の句

夢に見る父は父よりやさしかり

(薰風)

私の句

一年草 忘れ上手に花をつけ

細川 稚代

座右の句

漆黒のピアノから出る海の音

(薰風)

私の句

失言を置いて帰った見舞客

北田 一笑

座右の句

国境を知らぬ草の実こぼれ合い

(信子)

私の句

死の抗議 金魚は白い腹を見せ

有働 芳仙

座右の句

愛あれば詩屑もキンの星となり

(亜鈍)

私の句

カメの子の視野に太平洋がある

平松 かすみ

座右の句

白と黒 乳と蠅なる天地かな

(亜 鈍)

私の句

休みたい足騙しつ歩く

藤村 亜成

座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

(路 郎)

私の句

歙光るきのうや今日のものでない

小池 しげお

座右の句

少年の幾人いても毬一つ

(薰 風)

私の句

紫陽花の最後の色が決まらない

中山 雅城

座右の句

どん底を生きしたたかな葦となる

(天 笑)

私の句

苦も楽も溶かして母の海は風ぐ

最上 和枝

座右の句

償いの壺を満たしてから死のう

(千 代)

私の句

掃き溜めで死ぬと冤罪着せられる

森山 盛桜

座右の句

凧の糸のばして風にさからわず

(茗 人)

私の句

齒車のひとつ背いた音でなる

森田 熊生

座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

(薰 風)

私の句

どくだみの未婚のままの白い花

野中 御前

座右の句

おっさんと呼ぶなよ今日はモーニング

(耕 花)

私の句

雨の日は僕を耕す古机

井上 富子

座右の句

八十になったら恋をしてみよう

(薰 風)

私の句

少年の悔し涙よ川になれ

浅田 隆樹

座右の句

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ

(葭 乃)

私の句

泣きに來た人を手ぶらで帰せない

板東 倫子

渡邊蓮夫

東野 大八

『回想の田辺幻樹・嶋田扶実雄』（川柳研究社昭和55年7月刊）という小冊子がある。

田辺幻樹とは、戦前の『川柳研究』誌の黄金時代、主宰者川上三太郎を支え、師三太郎門下随一の詩川柳家と囑望されながら、37歳の若さで肺疾患のため死去した作家の名である。この幻樹は、渡邊蓮夫にとってはかけがえない川柳の先輩で、九つ歳上のこの幻樹は師三太郎よりこの兄事する幻樹の作句作法がもろに蓮夫に影響したらしい。

この幻樹を偲ぶ小冊子に、彼が神戸の『おだち』誌に寄稿した五頁にわたる長大な悼文が転載され二人の因縁をよく物語っている。

大正8年（一九一九）8月26日生れの蓮夫が文部省官吏として勤務した同じ部屋に幻樹が居合せたことが、川柳の蓮夫としての生涯

を因縁づけたわけである。三太郎師も幻樹も川柳を、人間詩”として捉えきっていたことが、蓮夫川柳の命脈を織り成していたとみるべきだろう。

人を恋う人があつまる冬の酒 蓮夫

を晩年の蓮夫は色紙によく書いたものだ。

平成10年4月15日肺がんのため死去。享年78。蓮徳院柳詠日行居士が法名だが、この居士号をみつめると、わけもなく毎日新聞柳壇「まいにち川柳」選者として十三年間も寧日なくここで敢闘し続けた彼を想う。

筆者と蓮夫との出合いは、敗戦直後、戦時中から王子に籠居していた三太郎邸だったと記憶する。万事無口で控え目で、どこか昂然とした気魄の感じられる若者であったが、何を語り合ったか全く記憶がない。

ところでこの人がやがて大陸引揚げ川柳人同窓会を七年前にわたり親身の面倒をみるこゝたになったのである。そのきっかけは昭和51年福島県土湯温泉での第13回目の集まりからで、以後、同会が高野山で第19回の解散宣言を行うまで続けられた。

まだある。この大陸川柳同窓会の解散ごろから、彼は井上剣花坊五十年忌川柳大会を鎌倉建長寺で開催されたのに参加したのをしおに、落ち目の柳樽寺川柳会の句会や集まりを積極的な世話役に肩入れして、鎌倉や吉祥寺での同会の集まりには、同志を引きつれての面倒見のよさは、剣花坊の一粒ダネである大石鶴子女史を大いに感動させている。この柳樽寺川柳会の機関誌『川柳人』の五月号（七九四号）誌上は、渡邊蓮夫先生追悼号”である。

「先生と始めておあいしたのは、昭和49年9月の剣花坊下田句碑除幕の前日で、夢二郎・青竜刀氏等との前夜の宴は忘れることができない。以来先生は柳樽寺を大切に思っていて下すって、微々たる柳樽寺の力だけでは如何ともできない剣花坊五十年忌川柳大会を鎌倉建長寺で開催した。（中略）これらの企画はすべて蓮夫先生の陰のお力こそであった。

（以下略）——大石鶴子悼文）

大陸川柳作家同窓会がとりもつ縁で、その間、この蓮夫大人(タイジン)とはよく各種の大会で顔を合わせ、長崎での池田可宵句碑まつりなどは、狭い部屋で彼と二人きりで同宿というわりなき夜もあった。

『川柳研究』編集発行人渡邊蓮夫なる同誌巻末の文字を見るたびに思い出すのは畏友小池鯉生が筆者宛によこしたおびただし書簡の山の中の次の一文である。

「神戸から都落ちしてはるばる埼玉は浦和在におちつき、日銭稼ぎのしがない玉子屋に落ちぶれた鯉生居に、三太郎師はよく門下二、三人のとり巻きをつれてきて、即席の酒席を幾度も開いた。そんな折、この先生は

『おい、誰か酒買ってこい』

というのが口癖だった。そんな事の多かった某日、三太郎師が「おれが死んだら川研は誰がやる」と酔眼を光らせあたりを見回した瞬間『わたしがやります』とキツパリ言い放つて、スックと立ったのが渡邊蓮夫だ。その顔を呆氣にとられて仰ぎ見ていたのが佐藤正敏である。このときの正敏がわたしに「お前は川研の幹事だ」といった当人だった」

大きな原稿用紙に、パツパとなぐり書きした鯉生の筆跡が今も手許に残っている。

とにかく蓮夫の「まいにち川柳」は全国版

だが、よく旅先でその選句ぶりをつらつら拝見していても、彼の持句の一つである「人を恋う」人間性がそこはかとなく胸を打つ。その「まいにち川柳」が今はラチもない「万能川柳」とやりに肩がわりして、眼のやり場に困っている。

この人間詩をこよなく信条とした彼のトレードマークは、木槌のような焦げた木製パイプと、銀髪のはみ出した黒いベレー帽だ。このスタイルは、おんな泣かせだ、とよく私はからかったものだが、これでいて人も嫌がるハンセン氏病棟や、刑務所の仕事着相手に川柳を説いて倦むことがなかったのである。これは頭が下がると当方敬意を表するのが常であった。

「先頃、一世を風靡し、世界的にその名を馳せた藤原義江の追悼テレビをみていたら——はくはイタリアで声の出し方を覚え、フランスで声の使い方を覚えた。しかし、一番大事なことを覚えたのは浅草だ。芸人の愛情と芸術家の誇りと両方兼ね備えなくては、オペラは歌えない」という言葉をきいた。

浅草は庶民の町である。そこに住むのは芸術家でなく、庶民と一体となつて心を通わせ合う芸人であった。ここで得たものが一番大事なものだったこの芸術家は述懐するので

ある。俗より出て俗に還る。

川柳は庶民の詩として発生し、継続し発展してきた。庶民の意識は時代とともに向上し変遷する。川柳もまたそれに伴つて変つていくのも当然であろう。だがそれはどこまでも庶民とともにである」(昭51年綜合誌「川柳」誌上)

彼の句集は日本『一期一会』のほか構造社刊の『渡邊蓮夫集』があり、群馬県太田市に例の「冬の酒」の句碑が建っている。川柳人協会会長で、全日川協理事。著書に「川上三太郎」構造社刊の他「川柳のすすめ」等がある。

渡邊蓮夫句集・初期から遺詠まで。

そうだったのか若き日の花ことば 蓮夫

花の名は花屋で知った町育ち 〃

老衰の母へ賢母の日の記憶 〃

嫉捨てに似て病院へ母を入れ 〃

母の死へいつより伸びておりし爪 〃

父の齢越ゆ父よりも健やかに 〃

遺詠—

病み伏して普通の人が羨まし 蓮夫

いつまでも生きている気でいた不覚 〃

治そつとしてゐる医者へ治さねば 〃

▼次号は「有本 泉三」

『相撲』

清 博 美

相撲は秋の季となっている。これは宮廷行事としての相撲の節が古くから七月頃に行われていたことに起因する。

相撲についての『日本国語大辞典』の説明は下記の通り、「二人の力士が土俵の中で素手で相手を土俵の外に出すか、倒すかして勝敗を争う競技。古くは、打つ蹴るなどの技もあり、武術として発達した。また、宮中行事や農耕儀礼の神事としても行なわれた。足利時代になって、興行化、あるいは遊技化され、職業力士集団も生まれた。近世になってから、きまり手、禁じ手や土俵が定められ、職業相撲が発達した。」

江戸における相撲興行は貞享元年（一六八四）正月、寺社奉行本多淡路守が晴天八日に限って興行を許可したのが始まりである。場

所は、深川八幡の境内であった。もつとも勸進相撲はこれに先だって行われていた。

『東都歳事記』は、「古今相撲大全」を引用して次のように記している。「春秋二度なり、官に乞ひ、晴天十日が間、寺社の境内に於て興行す。夏は京、秋は大坂にて興行す。都合四季に一度ツ、年に四度なり。本所回向院を第一の場所とす。其余茅場町薬師、深川八まん宮、芝愛宕社地等なり。見物の貴賤未明より幅轆し、蕃昌毛穎に尽しがたし、又花角力と名付て、稽古の為臨時に興行すると

きには、婦女子にも見物せしむ。江戸勸進相撲の始は、寛永元年明石志賀之助といへる者、寄角力と号け、四ツ谷塩町に於て、晴天六日に興行す。其後故ありて、三十七年中絶せしが、寛文元丑年中、年寄官に乞て再び興

行しけるが、夫より相續て、今に年々興行しけるよし。『古今相撲大全』に見ゆ。興行以前より、江戸中番付を商ひ、又興行の前日毎に太鼓を廻す。」と。

『嬉遊笑覧』には、「そ、ろ物語、もとよし原のさまをいへる処に、勸進舞蜘蛛舞獅子舞すまふ浄るり、色音論、彌宜町にさこんがかぶきまひすまふとあるは慶長より寛永頃の事なり、また延宝ころの一枚絵に志賀之助相撲の図あり、（行司は木村喜左衛門すまひ人はかこ之助大竹などあり、めぐりに幕を張り上の方さじき男女見物の体）勸進とて仏寺などの建立修覆の為にするのみにあらず、そのかみは寄を勧むるをもて勸進といふなり、大全などには彼勸化の為にするをのみ勸進と心得たるにや、それ故千葉寺鎮守八幡宮再建の時を勸進相撲のはじめといへるなるべし」ともある。

『続飛鳥川』に、「相撲の始は、人皇十一代垂仁天皇七年、当麻蹶速と野見宿禰と云勇士勝負あり、野見宿禰勝たり。夫より当文政十年迄千八百六十年に成。近頃にては天津風谷風などの盛の時分、安永天明寛政の頃を盛とすべし。安永の頃は勸進角力八日限りなり。其頃より十日となりし」とあるほか、「角力谷風棍之助は近來の関取にて、元伊達ヶ関と

いふて、安永より寛政まで大関を持って、力も強く角力も上手なり。目方も五十貫余有り。横綱免許も吉田善左衛門より受たり。上覧の節小野川に勝たり。『角力釈迦ヶ岳雲右衛門は出雲の産にて、身長七尺一寸六分有り。安永、天明の大関を持、享保の頃鬼勝象之助は身長七尺三寸有といふ。其後の大男なり』などとも記されている。

また、『塵塚』には「○土左衛門 享保九年六月、深川八幡境内にて、相撲を興行したり、其の番附の前頭の初めに奥州の人にて、成瀬川土左衛門といふあり。東京にて水死人の事を俗に土左衛門といふは、水の為に膨張したる形の、成瀬川の肥満に似たる以て名付けたりといふ。さもあるべし」とある。

天明六年、相撲興行の場を本所回向院に定めたが、その折りのことを「十一月本所回向院ニ於て角力興行有り、当年より晴天十日被ニ相免一候、今までは八日也、此節谷風渦ヶ淵取組ニて其繁昌前代未聞いふ計りなし、然ルニ去る十月二日夜回向院之住持を殺害し、有合之金金式百両盗み取り候者有レ之、右は全く元之弟子之所為なる由、世上之噂なり」と『天明紀聞』は記しており、この頃から興行日数が八日から十日に変更されたことが判る。それにして、何やら生臭い事件も起こって

たよつである。

また、『宝曆現来集』には「天明六年の秋、駒込竹町越中屋と申富家の町人有り、此抱に雲林と申角力あり、幕下迄取上げし男なり、此雲林の工みにて、近所並作法とを教へて、白山権現於ニ境内一、子供角力為レ取、中々面白き事なり、誰やらの申上げらや、代官町において公の上覧有り、其後又文政年中誰が工みなるや、子供角力と号し、此比も三四十人集り、角力取れる。文政五年五月廿六日、田安様、清水様、根津廻り駒込御鷹部屋御覽有て、日暮里浄光寺に於て、彼子供角力御覽有けり、其節は誰が師範せしや、予知らず」とある。この一文を見ると、相撲取りを抱えたのは大名ばかりでなく、裕福な民間人も相撲取りを抱えたことがわかり、また、市中の子供などにも角力が浸透していたことも知られる。

相撲は我が国の国技と云われるほどの伝統を持つている。従つて、相撲に関する文献には事欠かないが、このくらいにしておこう。

最近は、年六場所十五日の興行である。その他の地方巡業がある。つまり、相撲取りは年中相撲を取っていることになるのだろう。その点では、昔の相撲取りは万事にゆつたりとしていたのんびりしたものだつたに違いない。

*

い、天気土間へた、みを八日しき

安九礼6

—本句は晴天八日時代。

きつい好き羽織斗りも八ッなげ

安五松3

—本句も八日時代。晶原の相撲取が勝つた

ので羽織を投げる。一日一枚ずつて八日

を暗示。

近年シハ二日はだかによけい成り

一三二2

—本句は十日興行になつた句

山〳〵嶽〳〵を晴天十日見せ

二六3

—山々嶽々は四股名

女ひでりハ晴天の十日也

四〇2

—相撲は女に見せず。

芝居より高いさじきハなわからげ

二二2

—見物席は材木を縄で縛り付けたもの。高さ

さがかなりあつた。

安七智7

—深川八幡社の相撲興行

角力場に氣のない男ほうづえし

二4

—角力場には入つたものの、角力に興味な

く、芝居が見たい男。

関取りの立ち合までに骨を折り

明三礼2

—角力好きにはあの仕切が良いというのだ

が。

大イの男をぐんばいておしつふし

天二百1

—行司の采配振り。

秀句鑑賞

同人吟 仁部 四郎

—8月号から

漫画が面白いのは、諷刺と笑いが期待できるからで、子ども向けのものでもそのことに

変わりは無い。日曜日の午後六時から、「チビまる子ちゃん」と「サザエさん」を連続して観るのが私の楽しみの一つだが、「まる子」により興味を惹かれるのは、川柳の味を「まる子」は含んでいるからである。川柳的な毒があるから面白い。

川柳の詠み方、川柳の読み方は、それこそ十人十色でよいことであるが、自分一人を高い所において周囲を見ろというのではなく、視線は同じところにおいて見れば、毒は毒として賞味できるとかねがね思っている。

さて、「川柳塔」には千八百を超える句がある。この稿を依頼されて初めて気付き、重責を感じたことである。私が、作者とお話をしてみたいと思った句は数多いが、紙面に合わせて思い切り数を絞り、私なりの感想をのべることにしたい。句に順位をつける意識は全くない。

少年が病む先生が病む国が病む

藤 解 静 風

いわばおとなしい地方の進学が主目的の高校勤務が長かったが、定年退職前の二校五年間は、風雨がやや強い学校であった。この句と次の三句は、そういう私の経験が強く関心を惹かせた句である。

「少年が病む」のは既に社会の常識となつて久しく、常識という言葉はこの場合面妖であるのだが、「先生が病む」現象も、新聞やテレビによく出るようになった。いつの頃からそのようになったのか、日時の限定などできるはずはないが、私が勤務した学校でそれぞれにあったから、学校の種類や地域によっては例も多くならう。結核が教員の職業病として認定されていた時代がむしろ牧歌的でさえあったと言え、大方の叱責を受ける。

「国が病む」のは、結果なのか原因なのか。梅雨空を突き農高のVトライ

齊 藤 蒔

農業県とされている佐賀県内には、農業高

校が五校あったが、ここ三年のうちに三校の校名から「農」が消えた。天下の趨勢とでも言うのだろうか。

この句の作者は、農業高校に在職された人と聞き及んでいるが、気概あふれるこの句に大きな拍手を送りたい。

百年の校門いじめ受けぬ

岡 本 久 峰

この句も気概のある句だが、切なる願望の句とも読める現実の情勢がある。「受けぬ」と言い切れる学校は、小・中・高の伝統校・名門校とされている学校でも数が減ってきている。それぞれの学校の生徒、保護者、教職員、卒業生の、むしろ哀切な共感を誘う句ではあるまいか。

空を見る時間が足らぬ子供たち

新 家 完 司

昭和二十年に中学へ入学した頃のことである。動員で農家の田作業の手伝いに行き、お昼に、鯉の煮付けが出て、驚きつつもおしく食べたことを思い出した。憧れの県立中学校に入つて、学業を捨てての勤労奉仕が楽しいはずはなかったが、この句であの時のことを思い出したのは何故だろうか。

賑やかな法事の隅のひとり酒

榎 原 慧 心

父母の忌も三十三回めともなれば、四男坊の役目は、酒を勧めて座を賑わせることであつたが、参会者一人一人にはそれぞれの想いがある。どういふ類いの法事なのかこの句では判らないが、この句の「ひとり酒」の経験がある人は少なくないであらう。

線香よりたばこの煙ほしかるに

川久保 睦 子

御夫君を最近なくされたことを知つていてこの句に接した。素直な愛惜の念の濃密な句だと思ふ。

お隣のおばちゃん焼香して送る

西原 艶 子

「おばちゃん」に温みがあるし、「焼香して送る」も当然のことながら、いかにもふつくとした心情がある。

喪服着たままで一軒誘われる

山口 高明

この句の情景がよくあるということは、人が人の死を自分の姿に引き寄せてみるという暗黙の衝動にかられるからか。

お疑い召さるなお茶を飲んだだけ

土橋 螢

「召さるな」の相手は、検事かそれとも奥様か。奥様と読むのが多数派であり、不倫願望の句と見立ててよければ気が楽になる。

スーパへは空腹で行くものでなし

西出 楓 楽

一家五人でワゴン車でやってきて、時には庭の土まで買い込んで行く姿を見かけて、つくづく感心することがある。帰りにファミリレストランで、お好みのメニューを漁るのかなとついつい失礼な想像をしてみました。

散歩にも財布はいつも持つて出る

酒井 一 壺

やっぱり不安なのか、それともタシナミと言つべきなのか。私も貴方もおそらく丸腰では散歩に出かけないだろう。途中にスーパのある道はコースから外してあるにしても。

法律が変りましたと風呂の事

籠島 恵 子

私が住む人口八万弱の街も下水道の工事が着々と進行している。公的補助も若干はあることではある。健康で文化的な生活になることだし、この句の下五が、「徴兵へ」にならぬよう用心しておこう。

二の足が爛てに乗ってヒョイと出た

山本 玲 子

人間業もすでに六十余年、知つたかぶりもよくしているのに、それがまたこの句のおおりの事、明日の事でもある。この足を元に戻すのはとてもたいへんだ。

弁護人席には犬を座らせる

川上 富 湖

ビクターレコードの犬も、渋谷のハチ公も性格は同じだと私は理解しているが、その犬だろうか。それとも法の番犬にしても忠実が売りものではあらう。

イヌとは書いてない犬の話を開きたい。句のムードとしては思わず膝を叩かせるものがあるが、「犬」には降参というところ。

抜き足さし足で追いついていった

志田 千代

ナルホド、ソウダ、ソウダの句だが、具体的な情景となると、読む人次第で面白くなりそう。追いついたのは、時間か、ライバルか幸福か。追いつかれた方は、さし足だったから気がつかなかったのだが、忙しかったのだろうか、ボンヤリしていたのか。実は気づいていて悠々と見送っているのか。

笑い話にするまで負けてなるものか

吉田 あずき

何事によらず追いついた記憶がない。追いつかれたという意識に悩まされた記憶もない。同窓会に出て、「先生、実はあの時私は先生を……」という話を笑い話として聞かされたことがあるが、この句はそのことにも通じる句のようでもある。

水煙抄

河内天笑選

横浜市 荒井広和

節約は美德でけちと違います
絶妙な話術に偽善透けて見え
糠床が語る我が家の食文化
甘い水だけ撒いてる選挙カー
使い捨て人事に社訓などいらぬ

横浜市 田中笑子

乾杯の音頭へ大ジョッキは重い
巡りくる四季を褒めたり貶したり
なる程と納得しては見入る辞書
写真にはいつも笑顔で写ってる
バツイチが自己紹介へ悪びれず

札幌市 三浦強一

リストラという鮮やかな処刑人
職安へ行く蟻たちに影がない
アジサイに雨 父さんに縄のれん
海岸のゴミが目立ってくる夜明け
跡継ぎも嫁も決まった耕運機

東京都 井上つよし

枝打ちをされて男になって来い
雷が大音声に夏を告げ
パン屑をやつれた鳩の方へ撒き
始発駅始発電車の顔馴染
焼け過ぎたパンを取り込む妻の皿

大阪市 立蔵信子

ふるさとの駅に挨拶してしまふ
休日は退屈すぎるほうがよい
いらんこと言うおとこにはわらつとく
君の目が誰を見ても気にかかる
くもりのち雨がいいですこの残暑

河内長野市 柏本靖子

オレンジの重さ比べている両手
廃線を歩く汽笛が聞けそうで
プレゼント届き誕生日と気付く
肝心な時に内気が邪魔をする
時々の手抜きは主婦の骨休め

綾部市 藤田芳郎

兵庫県 安達厚

日帰りの旅で傷口陽に当てる

奥さん美人子が秀才で許せない

子別れの儀式お日柄など褒めて

大根がピリツと主張して夏に

赦された程を許して夫婦とや

横浜市 鈴江純子

知ることも忘れることも生きる術

未熟さを補う愛の隠し味

青空を近く感じる退院日

ポットの湯たっぷり残しひとり住む

忍術の好きな眼鏡を持っている

横浜市 川島良子

地味かしら九十歳へ贈る服

沢山の知恵を拝借して生きる

住職も歌手ものど飴しゃぶってる

午後三時人魚になっていく私

長電話夫のいびきききながら

羽曳野市 川口信子

バーゲンで見知らぬ女と意見合

ダイエツトうまくいったが皺が増え

ポケットに詰めてる愚痴がこぼれ出す

夢ばかり詰めて帽子が重くなる

偏差値の通りに行かぬ人の運

うっとり梅雨も風物文化です

菊づくり極めてみれば土づくり

ダイオキシン奢りの果ての鬼だろ

手ぶらでは行けぬ思いが遠くする

苦勞した裸のままの君が好き

貝塚市 吉道時子

石段が太り過ぎだと笑ってる

楽しいけれどお友達と言われている

失恋中の彼にかすかな望み抱く

宗次郎笛はやさしい土の声

埴輪顔連綿と続く血の流れ

羽曳野市 西村りつえ

野仏の胸の赤茶は恋のあと

嘘と知り話題をかえるケーキ皿

悪女にもなかなかかなれず痩せてゆく

ひまわりがでかい目で呼ぶオーイ水

笑い皺一本ふえたクラス会

出雲市 梅ミツエ

同窓会心の奥も丸はだか

戦前派賞味期限は気にしない

よい言葉で言ったつもりが出雲べん

青蛙は殿様気分花の上

ねそべって雲の彼方の子を想う

鳥取市 西尾 敬之介

洞くつの冷気土産にしてみたい

どの隙間入ってきたのか紋白蝶

はいチーズこの一言で固くなり

無人駅思いきりよくしゃみする

おごられて高いものから頂く

大阪市 中澤 伽羅

ガイドさん一人で旅を背負ってる

お化粧をしたら表へ出たくなり

くつろいで見てるテレビで肩がこり

右左趣味は違うて夫婦です

淋しい日古い文箱をあけてみる

唐津市 井上 勝 祝

効くと聞けばあれこれ試す命乞い

ムシヤクシヤを酒でうすめてゴロ寝する

侘しいな叱ってくれる人が無い

人恋しカルチャターの輪に縋りつく

買わずともおかめの面は家にある

東大阪市 今岡 貞 人

満ち足りてからは読めない風の向き

ネクタイの要らぬ職場で肥えてくる

門構え見ればなるほど見栄っ張り

意表突く一石惰性つき破る

眠りから覚めた地酒のこの色香

伊丹市 延寿庵 野 鶴

脱皮して飛び乗る風を待つトンボ

束の間の花の命に似る齡

残された余白を埋める花遍路

走り梅雨さわやかな風庭に置き

星空の雫に光る花菖蒲

倉敷市 家守 政 子

挽ぎたてのトマトをかじる陽の恵み

ああ赤宇田や農機具に罪はない

添書の一語にこもる母の愛

中一を見上げて叱る強い母

挽ぎたての桃試食する恵比須顔

和歌山市 森 口 美 羽

わたくしを貰いて傷深くなる

人はひと大騒ぎすることでない

ときめきの匂いのこもる封を切る

点滴の修理でつないでる命

わたくしが匂うあなたが酔っている

秋田県 湊 修 水

窓の外風こんなにもうまいとは

散髪をすると散歩がしたくなり

でたらめな市長と泳ぐ池の鯉

少子化が玩具売場を閉めさせる

天災を忘れ果てたか米いじめ

八尾市 與田 明

出雲市 名原 純子

常識の裏とおもての使い分け
不揃いも味覚のひとつ手打そば
甘い汁吸うた同士のなすりあい
肘鉄のやがてじわじわくる痛み
カタカナに腹立てながら辞書を引く

横浜市 小野 句多留

横浜市 山梨 雅子

行先を告げて定年後は出掛け
新入りの議員バッジよ重くあれ
声高になってお酒の量が知れ
豊かさの中を不景気のし歩く
代らねばと思う一票持っている

高知県 百田 幸

神戸市 船津 とみ子

思いきりピンタやりたい今日の夫
もう年だなんて言うのは止めにする
性格は温厚だけど妻には別
お出かけへ香水匂うおじいちゃん
冷房は嫌い自然の風が好き

島根県 加藤 要子

今治市 渡邊 伊津志

W杯爺も一端評論家
自惚れて見ても鏡はごまかせぬ
雨雲の行方気になる梅雨末期
花萼を敷いて一気に夏座敷
薬草で余生を生きる知恵もらい

ひれふして大仏拝む異国人
引きぎわの美学そろそろ模索する
日時計の影は孤独に耐えている
デッサンの線が生きてる裸婦の肩
痛いほど視線背中を刺している

いつまでも遺影は若く悲しませ
道具屋に見せると捨ててあげましょう
血圧計買ったが計るのがこわい
朝顔が袋と違う色で咲き
鮮やかな虹に観光バスを止め

母の夢久しく見ない五目寿し
信心の声がお隣から聞こえ
雀の数が俄かに多くなった木だ
或る日突然わらびお餅が食べたくて
水菓子を送る真夏の仏前へ

ひたむきに咲く十葉が嫌われる
さりげない言葉の中の温かさ
千円の時計が好きで見せ歩き
おさまりは教えて分かるものじゃない
慰めるよう叱るよう海の顔

京都市 高島啓子

護岸工事してから河童出てこない
鬼太郎が散歩している下駄の音
つと立ってふすまを開ける猫と住む
地下都市はこんなものかと蓮畑
夜の顔朝へひきずるのが女

倉吉市 大下智子

軽い靴履いて転ばぬようにする
羽目外す事でバランスとっている
久し振りお日様に身を干している
ビビビビ雷感じ結ばれた
雷に直してほしい金欠病

吹田市 三浦 憩

美しい嘘を見抜いた事がある
手抜きして宅配ピザに太らされ
独り言ふと言いそうな墓参り
風だけに本音を寄せる無人駅
幸せの相違追わない事にする

藤井寺市 太田 扶美代

農繁期すんだら妻と旅をする
定退の机に忘れた物がある
床柱老いた私を見てござる
赤信号のあいだに心休ませる
少年がひとりよがりをする月夜

今治市 中村好恵

シナリオのない毎日が忙しい
好きな人訪ねる道に花が咲く
ざわざわと心が騒ぐ楠若葉
とんでもないとこで見つけた探しもの

横浜市 保田絹子

取りあげた母がゲームに嵌められる
こま鼠の母を女と見ていない
閃きは肩の力を抜いたとき
土に帰す農に余生の夢がある

大阪府 澤田和重

ユカタ美人ニューハーフだと後で知り
親切を押し売りされてくたびれる
腹の中おみとおしだな内視鏡
大胆な意見が変える風の向き

藤井寺市 岸本寿代

雨降ってあじさいの花重たそう
おしやれしてちよつと変身してみたい
徳積んでぼっくり行ってこの墓に
お世辞だとわかっていても顔ゆるむ

大阪市 尾崎黄紅

銀行で借りていた頃儲けてた
空家が増えて爺婆が淋しそう
ばら銭持って郵便局に爺がくる
酒提げてあかんだれに逢うあかんだれ

握手して一票入れる訳でなし
新潟県 高野不二

悪役の笑顔を見せるコマーションル
メートル法一升びんが生き残る
ばけていて女の恥ずかしさを残し

愛媛県 黒田茂代

愚痴やめて暑さと妥協して暮らす
生涯を委ねる人を選び損ね
いいドラマ見た昂りが眠らせず

ゼロからの出発怖いものが無し

鳥取県 橋谷静江

ひたむきに生きた証にマイホーム
スランプの私へ嫁の熱いお茶

身近にもライバルが居て元気出る
景気良く振る舞う父の痩せ我慢

尾張旭市 三浦きぬ

通販という便利さと恐ろしさ
物言わぬ方が素敵に見えた女

仏教で間に合ってます○教さま
駐車禁止が読めない人の多い街

兵庫県 高見末野

減反の野菜畑のカラス追う
今日も雨ミシン踏んでは物思い

胸を張り今日も出て行く野良仕事
いつの間にか戻れぬ道に来てしま

こぼれ萩眺め酒酌む旅の宿
香川県 向山治延

地藏さん昔の民話聞かせてよ
竹籠の中で小鳥は友を呼び
孫の作文家の出来事サラケ出し

横浜市 北沢街湖

相性が良くて喧嘩をしています
楽しんで生きて不良と呼ばれてる

ブランドはもったいなくて使えない
夕食に追われ夕焼け見ていない

愛媛県 中居善信

ガラス戸が鳴った広島音がした
あゝ八月りんごの唄をハーモニカ

警察予備隊あれから自民許さない
米の重さへ何時か頭を下げさせる

島根県 武島ちよえ

枝豆のお喋りビールまた空けた
据え膳に甘えています病み上がり

素颜では太刀打ち出来ぬ向かい風
責任を感じています茄子の花

島根県 福岡博利

息子にも相談しよう墓の場所
二人共夜中におきて本をよむ

脱いだ気のスリッパ足をはなさない
追い風は逆風のあと吹いてくる

横浜市 金 森 徳 三

癌保険先に会社が死にかける
ふと期限気になる朝の生たまご
居酒屋で耳にする愚痴なつかしや
核持ちが核を持つなど無理を言い

東京都 吉 田 土 風

度忘れもこう重なると疑われ
度忘れをした顔をしてトボケてる
人込みを縫って嬉しい二人連れ
ちっぽけの庭でも心癒やされる

高槻市 乙 倉 武 史

食べ物はみんな薬とよく噛んで
機嫌よい彼女の白い歯がこぼれ
身に覚えあつて強くは叱れない
長い目で人間を視る事に慣れ

兵庫県 植 村 雄 太 郎

次の世は条件付きで添いましょう
時計屋の柱時計に凝視され
ごめんねですんなり事がすむものを
何一つ持って行けぬがあ世です

静岡市 大 村 正 雄

叔母さんに母の面影重ね見る
こおろぎが去年の場所で鳴いている
朝顔の支え蜻蛉に残しとく
胃を切つて肝っ玉まで小さくなり

尼崎市 河 津 正 治

雨しとど天氣が似合う水着シヨ
満ち足りた深い眠りの妻の顔
疑似餌にはもう騙されぬ総選挙
頂上に立って聞こえぬ雑魚の声

今治市 越 智 青 園

熱帯夜体と心分離する
いい汗に自己満足の青い空
波の音暑さを少しずつくたく
水やつて野菜の吐息聞いている

富田林市 山 原 昭 水

ハーモニカ吹いて若き日とりもどす
焼鳥屋で息子の悩み聞いてみる
豪邸でカップラーメン食べている
数珠もつて美人に見とれけつまずく

岸和田市 徳 庄 美 智 子

縁先で食べた西瓜がなつかしい
気懸かりなロマンスシートの甘い声
往年の背広脇腹がだまつとらん
花の匂い当て合ひこする朝の庭

横浜市 平 達 也

裏切られ冷たい人になる努力
建前と本音ごちゃごちゃ妻の愚痴
世話された職場で老兵生き返り
丹精の甲斐あり百合が話しかけ

横浜市 長島 亜希子

陰暦の四季に合わせるエルニーニョ

健康のための散歩はノーマネー

肩書きのない名刺持ち歩いてる

横綱の口上が手に書いてある

横浜市 山下 省子

くちなしの蕾は蝶の哺乳瓶

ゴキブリも神に生命を貰ってる

建前にソッポ向かない世間さま

死に方に上手と下手があるなんて

堺市 梶本 哲平

天が地に価値観変えた終戦日

人生の極暑は燃えた四十代

ぎりぎりのところで拾う神があり

笑ったり腹を立てたりして古希に

八尾市 山本 宏

眠れぬ夜時の流れに耳すます

辻辻に母の祈りか地蔵尊

相槌をうつ人がいて旅楽し

忘れ方上手になつて年をとる

羽曳野市 芦田 絢子

トッピング変えて今夜も冷奴

梅雨明けをせかせるように蟬の声

神様へお礼参りの鈴の音

馴染まない子も一人居ていびつな輪

豊中市 みき わきみ

判決は未だ出ず老いは深みゆく

敵塩のトレード今日も又負ける

銀行が潰れる時代に二度出合い

政官はバブルのまんまそのまんま

東大阪市 北村 賢子

七夕かざり天にとどけと子の願い

みけんにしわよせず生きましよう余生

終章へここるかよわす老いふたり

親友のころころにあつたらうおもて

河内長野市 妹背 尽呂久

情報の最中で右往左往する

サッカーの狂乱いささか別世界

妻も妻夫の昇進ふれ回る

石段を斜め斜めに登る知恵

川西市 田中 喜俊

同年輩痛み話して友となる

友会えば同居の辛さ聞かされる

出不精になった友達誘い出す

外出に着かざる義母も楽しそう

兵庫県 倉垣 恵美

納豆とふりかけあればいい子です

生ごみの中からスプーン出てきたよ

母ちゃんのように歯みがきしてと言う

仲良しになつてまた来た雨蛙

堺市 矢倉五月

ハイハイと言うて父より強い母

先ず母の糠漬けつまむ里帰り

そろそろと思つていたら電話鳴る

三十年振りに告白されたとして

大阪市 平井露芳

梅雨のない北海道で雨に遇い

目の毒と言いつけして目目の保養

水道局うちも美味しい水だつせ

いかなごの中であちちと釘がはね

憂鬱を消す妙薬はよいニュース

滋賀県 中宗明

おかしい世四季の早さに追付けぬ

六十路来てやつと楽しむ余裕でき

サッカーで親子の会話盛り上がり

横浜市 岡田芳江

行きましたが選ぶ人なし投票所

ぬか床の味を残して母が逝く

おいしいの一言ほしい倦怠期

七夕の逢う瀬 地球は騒がしい

和歌山市 福重美子

酸性雨抱え込んでる雲の上

昔から知つてたような初対面

再入院同室だった顔も見え

病みつけば命の期限気にかかる

岡山県 国米きくゑ

無肥料の草伸び伸びと生い茂り

愛憎を吞んでポストの無表情

夢一つ掴みそこねて黄昏れる

残しては逝けない人の米を研ぐ

岸和田市 不破仁緑

飄々としながら獲物狙つてる

古稀過ぎてまだ見ぬ駅へ夢無限

死に急ぐ蚊がブンブンと付き纏う

ああ言えはこう言いながら五十年

八王子市 播本充子

道草の上手な人と手をつなぐ

ハイテクの玩具を唾う竹トンプ

惨敗に肩の力がやつと抜け

ときめきへ老眼鏡を磨き上げ

岡山県 土居ひでの

でで虫よお前も少し左巻き

一粒はあんたがくれた嘘の種

知恵袋開いて欠伸かみ殺す

七夕へひと筆願うしやれた文字

島根県 谷岡ふみ

野菜切る手元のにぶる老齢になり

母娘して言葉のみだれなげき合う

鶏の声電話の中で聞きました

菓子一つひかえて明日は検診に

米子市 門脇晶子

初孫はみんなの愛を一人じめ
窯出しのかたちに陶工目がひかる
不景気に関係のない華燭の宴
鏡は真実時には僕に意見する

尼崎市 岩倉キク子

公的資金とははて誰のお金
預け貸取られるよりはと低金利
姦しく娘と孫連れて小旅行
最近ではほんまかいなが本当の話

八王子市 井上京一郎

インターホンまた宗教を売りに来る
一陣の風院長のご回診
野良猫の群れにもあった躁とうつ
球場にエコーも弾むお立ち台

横浜市 近藤道子

株下落いつかいつかの夢うすれ
さり気なく言われ出方を試される
がんばらぬ生き方に替え楽になる
諦めて明日飛ぶ夢を描いてる

静岡市 増田扶美

窓みんな開けて朝の幸を入れ
捨てきれぬ物ばかり増え疎まれる
弱音吐く心叱って小石蹴る
躓いた石に進路を諭される

河内長野市 大西文次

歯並びがよいと入歯を賞められる
よもぎ餅老母が丸めりや丸くなる
心配をするなど家出置手紙
希望には遠いちやちだが一戸建て

鳥取県 高尾京

日本の夢乗せのぞみ飛ぶ宇宙
平和な世子孫に残す難しさ
冷たくて安全な水欲しい朝
我が家にも海難二仏供養する

千葉県 那賀島雅子

遠い日の夢よみがえる波の音
波風はたてずストレス胸に溜め
古鏡もう諦めの顔うつす
独り膳はなれ小島か老いの部屋

横浜市 秋元和可

研ぎあげたような秋刀魚が売れている
地下街を出ると日が暮れ雨も降り
同郷に思いを馳せる桜桃忌
人生の最後に咲かす種を播く

北九州市 岡田幸生

忌憚なき意見を述べてから落ち目
均等法はくは焼酎妻ワイン
旅人もおなじ輪になる風の盆
人脈に組込まれたか三次会

生ビール夜まで喉が我慢する
宇治市 松本漢揆

酒二合体にいいとはありがたい
ぼけてないゆうべのおかず思い出す
昼ごはん時間は腹が教えてる

今治市 村上久美子

観光地ゴミの名所も見て帰る
音たてぬように気乗りのせぬ拍手
耳に栓したい話がよく聞こえ
ガン病棟で下手な芝居を打ってくる

鳥取市 富山雄幸

浜木綿の花に海辺のロマン聞く
思い出は隠れて泣いた母の顔
雑音もアハハとかわす歳になり
七夕の宵に秘蔵の恋かたる

唐津市 樋口輝夫

変節は頬被りして立候補
恋女房なんかもてた五十年
近くまで来て寄られると困る家
愚痴っぽい酒につきあい二日酔

福岡県 本田忠男

香煙の向こうで笑う亡母に逢う
美人ではないが笑顔に魅せられる
成金に溺れ嵐に流される
同期会お金も暇も惜しまない

庭の草主がまめで伸びられぬ
尾宮弘治

八起きめの気力世間に拾われる
転寝の母に一枚着せかける
一杯でぐっすり父の仏顔

尼崎市 森安夢之助

あらたまることあるまい君と僕
一生持ち歩く名前だ磨かねば
不況風に吹き飛ばされた軽い首
散りぎわの花は淋しい貌になる

和歌山市 松本良

謝って点数稼ぐ人もいる
どさくさに貧富広げるビッグバン
やるだけはやった風向き受けて立つ
空腹が燃やしてくれた青春譜

大阪市 小泉久子

見送られ曲り角来てホツとする
きれいなねと言われて磨き掛けている
お洒落して行くところでない整骨院
捨てたくて始めた整理よう捨てず

兵庫県 北川とみ子

長いよな短いよな金婚譜
すき間風の一つに火種あおられる
ほのぼのと里の茶漬けに労わられ
言い切つてしまわぬ罪が少しある

沖繩県 杉谷カズエ

おむすびの形にこだわる気も少し
行き先に傘置いてある気の軽さ

羽で札言うて貰うた花のみつ

変人の家庭を見たい好奇心

倉敷市 森本文子

病む夫妻がファッション見せてます

喜びと悲しみ織った私の布

若輩が身の上相談されて燃え

ゆずられた席に我が身を振返る

兵庫県 仲井素水

わしや九十雀百には負けまいぞ

時止れ秒針余命きざむ音

草臥れる老人旅行気乗りせず

草餅にいつも想うは亡妻の味

富田林市 中井アキ

そろそろとマンガ文化の灰汁が浮く

他人にはやさしい妻と言うてます

デパートに私に合うた服がない

辛口の意見のほしいひとり住み

姫路市 服部一典

利子よりも粗品につられ定期する

自慢の子同居せずに都会へゆき

初恋の人にはやっぱり逢わぬこと

結婚せず子供は欲しい女たち

鳥取市 夏日健一

質種が僕を信じて待っている

辻褄が合わなくなった作りごと

炎天下まっ赤な入陽ビルを呑む

大人でもここにナイフ隠してる

鳥取県 西垣美知子

日焼けした母には四季の詩がある

ここからは子供のために踏込まぬ

疑えばすぐに眼鏡がかすみ出す

農政の始末どうあれ歎にぎる

和歌山県 坂東和代

まだ七十としよりじみてどないする

ほととぎす聞ける里にも豆腐売り

頭数揃えばよいと誘われる

行楽によさそうな場所墓地選ぶ

川崎市 和泉見早子

言う事を良く聞く子等が頼りない

任せると言っても口は出してくる

雷がさらって行った言葉尻

セロテープわたしの指紋ばかりとる

尼崎市 田辺鹿太

人形の正直すぎる瞳がこわい

平穏な日々にする気が埋もれる

進退は電車に乗ってから決める

矢印の逆方向に夢がある

兵庫県 西 山 八重子

さりげなく負けて顔には出さずおく
根っからの働き者の靴を干す

どのように抱いても嘘がばれてくる
遠くまで飛んでもみたし老いの羽根

寝屋川市 井 上 すみれ

気に入ったバッグに夢を詰める旅

星影のワルツに泣いた若かった

中流を競い合ったは古語となり

ご機嫌が斜め 車間距離をおく

三重県 佐々木 森 哉

夢ひとつ抱くと影も弾みだす

白髪に似合う化粧でまだ女

ティータイム風の噂が渦を巻く

全ページ渦巻いている今朝の記事

兵庫県 谷 田 多美子

芝居見た涙の後の京料理

観光の人 人々の活断層

他人には触れさせたくない娘が嫁ぐ

週刊誌人漬したり生かしたり

大阪市 一 本 勇 太

人臭い話が溜る耳の底

飽食の死角へどっと飢えが来る

今にしてわが人生の正誤表

平坦な道できれいな嘘に逢う

和歌山市 吉 村 さち子

刺のない言葉で恩を着せられる

人間味出せばこの川渡れない

反対の風も味方にする度量

ふっ切れた過去美しい走馬灯

和歌山県 中 村 君 枝

のんびりが長生きすると限らない

炎天下脳細胞も小休止

焼きますか守りますかと夏の肌

炎天下アシカも餌を欲しがらず

和歌山市 武 本 碧

エンゲル係数うなぎ登りになる不況

てにをはを誤り進路見失う

涙腺を緩める温い風が吹く

冗談が過ぎて虎の子とり逃がす

富田林市 大 橋 鐘 造

お人好しいつも端数を負担する

冗談が本音になって砂を噛む

相づちを打って相手を確かめる

ここだけの話言わせる聞き上手

河内長野市 木 太 久 正 一

二台目のテレビは妻にハイビジョン

十年目生れた句集撫でている

自分史を重ね聞いている流行歌

入歯して世の中少し暗くなり

大阪市 星野ひさ

雨音のリズムに合わせ胡瓜もみ

ウォーキング黄泉路困らぬ足ならし

八尾市 平川幸枝

口紅をおとして素直夜のかお

お見送りリュックと帽子遠くなり

母の忌の墓に揃った夏帽子

美少女に秘密がふえていく帽子

ピン札をうまそうに食う販売機

サヨナラをしてから続く長電話

つゆ草を残して公園草をぬく

八尾市 田中トシエ

君が代に理屈はいらぬサポーター

欠点を総て家訓にしておこう

参院選消化不良のまま終る

高知県 桑名孝雄

ふとん干しも油断出来ない梅雨晴間

熟年の多いタンゴのコンサート

勝てるだろ思つて負けたジャマイカ戦

岸和田市 井伊東吉

草笛を誰か吹いてる過疎の道

炎天下みみずを運ぶ蟻の列

マイペース先ず睡眠を取つてから

今治市 野村清美

和歌山市 上地忍

居眠りの耳に程よい国訛り

内緒ごと出来ぬ家族でよく食べる

百メートル地下に御殿を建てた夢

兵庫県 中野とよ子

ふるさとが包みにうつる顔うつる

ねころべば一面緑青い風

緑色画用紙一ぱい春を告げ

家守る年金夫婦に余る部屋

浅知恵と頑固で老後支え合い

薄口に慣れさす妻は医者顔

唐津市 宗弘

新婚の描くデッサンすばらしい

島根県 菅田かつ子

東京の人人人でくたびれた

手ぶらで来燕こつばめ生んで去に

大阪市 亀井円女

クール便はち切れそうに娘の心

サッカードにはめられ燃えた老婆です

茶髪の子席を譲ってくれました

半分は何をしていた棄権票

余力あるうちに墓石建てておく

懐古談自慢話にならぬよう

今治市 渡辺南奉

朝顔のたよれる杖をさがす蔓
夏の花小さく活けてそばの店
レントゲン心の奥はのぞけまい

静岡県 中西 雅

ドクターの処方箋こそいのち綱
病院の空気に慣れてナース恋う
欲ばって百まで生きる夢抱く

鳥取県 山本 益子

バスツアー点から点は夢の中
冷凍の残りごはんが出番待つ
母の形見しつけ糸つき渡される

横浜市 伊藤 ふみ

七億キロ「のぞみ」火星へ旅立てり
一つ一つ初体験の米寿の身
プレッシャーでブラジル王冠取りそこね

熊本県 増田 一乗

私のリズムで今は這っている
這いつくばって蟻の仲間になつてみる
這つてみて山の高さを見届ける

米子市 足立 由美子

手をつなぐたった一人が見つからず
ひとり言やっぱり未練あるらしい
無人販売わたしも信じられている

藤井寺市 楠 昭子

忘れたいことはビールの泡にして
熟れたこと言わないトマト葉に隠れ
瓜漬けのコツが電話を離さない

出雲市 岡 秋造

父さんのおならにかなう家族なし
流行おくれのとおきおきの着物
参観日 我が子一度も挙手をせず

鳥取県 加藤 公子

梅漬を終えればあちゃんの軽い汗
おつきあいの程よい距離が難しい
少子化のゆえ寂れゆく地藏盆

京都市 勝山 美千代

手を焼いた子に教わっている世間
野に下る気骨がなくて天下り
涙を飲んだ分だけフアイト溜めている

尼崎市 清水 久美子

おだやかなお顔してはる辻地藏
改めてルーペで覗く猜疑心
北斎の不貞寝するよな涅槃像

高槻市 執行 稲子

ポケットは涙いっぱい食べている
好きだから嫌いと言って距離を置く
左遷地に馴染み訛りがやわらかい

鳥取市 有沢 せつ子

米子市 猪 森 スミエ

Gパンの小窓に覗く膝小僧
急坂の途中で膝が笑いだす
華やかに星に迫って散る花火

横浜市 生 坂 サト子

面影を辿れば古い写真帳
不器用な蝶ちよ結びをじっと待つ
衛星にハートも二つ乗せて揚げ(無人衛星おりひめひこほし)

池田市 木 村 一 笛

アイラブユー たっぷり書いたラブレター
ライバルがナイフを持っては俺も持つ
親ごころ解らぬままの少年期

豊中市 岸 田 知香子

造花かな そつと手を出す胡蝶蘭
足腰の弱らぬ内に無料パス
診察券一枚増えて老い仲間

愛媛県 安 野 案山子

梅雨空に咲くコスモスの慌て者
夏ばての胃袋撫でる朝の粥
ギャンブルが好きで貧乏苦にならぬ

西宮市 長谷川 淳

甲子園六甲嵐が哭き止まぬ
淡塩を無理に奨める妻の膳
添い寝してくれる女欲し古稀の夜

米子市 池 尾 保 子

愛煙家だんだん心細くなり
若白髪そのまま歳を取っていく
スーパールの目玉につられ無駄遣い

羽曳野市 安芸田 泰 子

過労死を知っているかい蟻の列
笑顔だから機嫌よいとは限らない
便り待つ耳はポストへ向いた儘

羽曳野市 山 本 たけし

雑壇に初心忘れた金バツジ
いい趣味とも悪い趣味とも言う競馬
西東イベント追うて忙しい

和歌山市 和 田 美寿子

当り前の事が美談となる世相
四捨五入して楽しもう老いの日々
こだわりを捨てて素敵な旅に出る

生駒市 川 端 きぬ子

ミニ菜園 汗に応えたナス キュウリ
ダイエットよりも心の贅をとり
紫の袱紗へ娑婆の義理をのせ

香川県 神 保 坊太郎

幸運の女神に出合うタイミング
大正は叱られながら親になり
三尺の土あれば足る終の家

大阪府 三浦 千津子

まだ翔べるチャンスへ女の第二章

蛍とぶ遠い慕情を追うている

強がりと言えぬ背中に齢が出て

羽曳野市 森田 四三郎

あの世の掟聞いておきたい逝くまでに

核保有と威張る国の民飢えて

祭神與外人さんもハッピー着て

三重県 尾崎 勤

立ち読みをさせる専門書の値段

都合良い方に出ている早合点

見当たらぬパスに昨夜を演技する

尼崎市 的場 十四郎

妥協からひらき始めた僕の運

アトリエの乳房が眩し梅雨の明け

ぼろぼろになった同士で庇い合い

島根県 槻谷 伸子

結婚もしない男女が増えている

少子化で子是我儘でいじめっ子

品物が増えて景気が悪循環

大阪府 中井 正秀

キヤッシュカード妻に貸したら返らない

草花も助けた恩は知っている

此の地球寄ってたかってどうする気

香川県 松村 輝夫

自立して命日だけは世話になる

食べてくれ今日は心が和む世話

只の酒一言褒めてご返杯

尼崎市 軸丸 勝巳

電飾の橋に浮かれる明石蛸

ほめたことない妻にまた土産買う

兵の墓あの日を偲ぶ夏の草

河内長野市 印藤 智子

ばあちゃんの暮しを学ぶ夏休み

スーパ－の手押し車を杖がわり

絵手紙を出そうだそうと日を送る

吹田市 西岡 豊

隅っこの好きな男で落ちつかず

先生と仲よい内は脈がある

雰囲気にかけて楽しい唄喫茶

河内長野市 水谷 正子

旅立ちの朝の緊張感が好き

待っているハガキが今日も届かない

掃除して花活けた日は誰も来ず

和歌山市 岡本 八重子

梅雨晴れ間あれこれさし芽いそがしい

漢方薬良いとすすめる看護婦長

水鏡七夕の月掬えそう

海南市 谷口義男
老いて来た証拠きれいに見える過去
腹探り背を向けて居る話合い

大阪府 前上英一
通帳の目減り打つ手の無い老後
割り切ったからの世間の広いこと
肩の荷のせめて一つを下ろしたい
許せないこと一つあり茶が苦い

今治市 塩路よしみ
つっぱりを甘く許して世は狂う
定年へ診察券がふえてくる
気の弱い男へ発破かける妻

羽曳野市 川田晋
人の目は見えないようにで見てるもの
母さんのやすらぐ場所は台所
定跡書読むと睡魔におそわれる
候補者が白手袋で擬装する
ライバルがいて同好会身が入り

大阪市 榎本舞夢
酔の効果聞いて何でも酔に漬ける
少子化の時代貯金も子は少し
声をきくさえストレスと啜う妻
場違いの服で出かけて部屋の隅
調子良い時だけ電話かけてくる
役者の子芝居むさばるように見る

鳥取県 平井栄翁
虫干しに自慢の着物派手に干す
慎ましく後を歩けば影を踏み
悪友に悪友らしいおつき合い
和泉市 横山捷也

和泉市 横山捷也
敬老会時々妻の方を見る
ささやかな幸せ作務衣で庭を掃く
団欒の笑い網戸を通り抜け

和泉市 横山捷也
八月の特進亡父の墓洗う
八月のドームに蟬の鎮魂歌
八月を綴る昭和正誤表

泉佐野市 稲葉 洋
 似て非なるパッチワークのような党
 当選の暁にはと何する気
 徳島県 安宅 美代子
 いつの日か宇宙へちよつとランデブー
 残り火が狂ったように風あおる
 八尾市 鷺見 章
 田植すみ水田初夏の風涼し
 久しぶりりハビリりに出て心持よし
 東大阪市 松山 隆
 大正の同期同士の拠りごころ
 補聴器を老いらくの見栄使わせず
 唐津市 岩崎 實
 軽トラの田んぼに緑の風受けて
 休耕田もんしろちようのとび回り
 尼崎市 松下 比ろ志
 燃える音確かに聞いた緋のカンナ
 夕焼けの池に鳥群れ夏日ゆく
 出雲市 加藤 スズコ
 一面の青葉に貰う今日の幸
 ぶらんこが子育て話を聞いている
 島根県 松本 聖子
 蟬の声と思えば私の耳鳴りか
 いわし雲幼いころへ押し戻し

横浜市 豊田 羊子
 吉田と橋本 顔の形で時代知る
 キャンソールこれが今年と悪びれず
 鳥取市 宮脇 道子
 我が頭覗いて見たら赤信号
 ひまわりが背のびしながら咲いている
 鳥取県 藤山 弘子
 反りあわず成績下がり保健室
 課長さんは働きざかり胃潰瘍
 堺市 見本 ちゃ子
 地球儀を何度も回し独り旅
 旅人となりて銀河に行った彼
 千葉県 大川 晩翠
 点字板ここが都会のオアシスカ
 貸し渋り情け無用の悲惨劇
 八尾市 井尻 民子
 タぐれの空にジャンボのサイン灯
 ジャパン技術世界に誇る橋渡る
 寝屋川市 瀧本 八十八
 冒険の夢ふくります宇宙船
 損しても得する商いしたたかに
 尼崎市 内田 美也子
 孫と待つ銀河を下る亡夫の笹
 九州へ来てまで何故か草むしり

枚方市 二宮紫鳳
パートには出たが医者代高くつき
友達にことは欠かないお人好し

八尾市 高橋明子
タンポポが耐えてこらえて屋根の上
知っていて何時も知らない顔をする

出雲市 川島和歌子
噂に聞く明石大橋バスの旅
あかりつけ暴走の子を待つも親

岸和田市 亀井皎月
大根を蒔いて田舎も秋の風
草に負け草に追われて夏が行く

和歌山市 上地登美代
弱いから八方美人しか出来ず
おまけの命多少の辛さ我慢せな

和歌山県 村中悦男
本心が見えかくれする話しぶり
朝顔と妻と孫とのいい会話

横浜市 三村八重子
アメ細工さえもパンダで人を呼ぶ
CTの所見に出ない物忘れ

大阪府 奥野義夫
お隣は近くて遠い間柄
厚化粧落としてママの参観日

東京都 清原悦子
二次会で意外な人がはしゃぎだす
晩酌へ自分の世界できている

益田市 岡田たけを
力むから周りの人に嫌われる
米寿まで生きたい欲の箸をもつ

米子市 小塩智加恵
顔のない電話勝手に物を売る
次つぎと来客続く不思議な日

和歌山県 中後清史
三猿の意地が息切れしはじめる
喝采に媚びて落ち目になる演技

大阪市 鈴木トヨ子
粗大ゴミ行きたくない泣いてます
災害地に朝顔一輪地主顔

伊丹市 榎谷郁子
辞書をひくその指先に老いが見え
熟年の恋が咲いてる菖蒲園

高槻市 江原秀夫
消費拡大年金夫婦も当てにされ
旅に出る弘法自前の筆を持ち

大阪狭山市 伊藤尚子
あと少し未来残して生きている
古コインプレミヤついて手放せず

(榎本日の出・宮本末子・八木芳水・大昇隆広・清水金太郎・谷岡清子・大工静子・松浦登志子八氏の句は51ページに掲載してあります)

沙湖抄

八木千代選

女人禁制きつと女人に負けた神

自分には見えない顔をいつも曝して

わたくしが立つとうしろが見えなくなる

寂しがり屋の金魚と二人居て太る

塔は未だ未完で風を疑わず

忍耐は真夏のカラスほどでなし

輪廻などと仏陀は怖いことを言う

炎昼や眼下の敵はまだ眼下

男とし女としての弁えだ

遊びなら戻ってこいと待っている

土性骨の傷は怠けて負けた傷

どの党に入れたか夫婦といえど黙

検診で決まる私の明日の飯

一生を閉じてしまった真つ赤な蚊

ロウソクが尽きると闇になる宴

姉だつて軽いライバルだと思つ

母の声静かに過ぎる藍十色

この友の存在感が華だろつ

回想の手鏡曇る濃あじさい

転ぶなら派手に転ぼう夏帽子

兵庫県 遠山 可住

西宮市 奥田みつ子

米子市 驚見 正子

富田林市 池 森子

同

東京都 佐藤 季頼

唐津市 井上 勝視

鳥取県 新家 完司

岡山県 小林 妻子

米子市 政岡日枝子

鳥取県 土橋 螢

西宮市 牧洲富喜子

和歌山市 牛尾 緑良

松原市 小池しげお

島根県 松本 文子

米子市 光井 玲子

和歌山市 野々 圭子

米子市 青戸 田鶴

和歌山市 木本 朱夏

吹田市 山本希久子

手が痛くなるほんどうのコンクール

思い出にぶどうの種が邪魔になる

終点に降りて見たのは白い地図

ひと息に路肩を走る影法師

未だ雨期エンピツ百本尖らせて

待つことを知らぬ半熟卵です

ふたごころ迷いゆらゆら葱坊主

水嵩が深くて憶いとどかない

全集が番号順に棚にある

しばらくは地を這うことも覚悟する

一寸の虫の魂 借りてみる

昨日すこしはしやぎ過ぎて悔いもなし

天の声そんなにわたし責めないで

流れついた岸で芽吹いている藻ぐさ

おどろかぬ耳が悲しい世紀末

引き込み線で癒して発たす母の駅

たっぷりとソースをかける一人旅

好きな人へ手は抜きませんおみそ汁

的になることを自負する赤い花

私の味付け次第 冷奴

影踏んで好きなあなたをこらしめる

横振りの首にだんだん荒れてくる

難題は山積クラゲ見えています

成りゆきでルールの出来る遊園地

水には水 人には人の味がする

人間でなければ言えぬ ありがとつ

海南市 三宅 保州

砂川市 大橋 政良

米子市 小西 雄々

米子市 林 瑞枝

和歌山市 古久保和子

鳥取市 石上 悦子

弘前市 佐治千加子

羽曳野市 吉川 寿美

出雲市 竹治ちかし

米子市 中井 ゆき

鳥取県 谷口 次男

吹田市 栗谷 春子

和歌山市 桜井 千秀

寝屋川市 森 茜

唐津市 久保 正剣

綾部市 藤田 芳郎

寝屋川市 江口 度

藤井寺市 太田扶美代

鳥取県 土橋はるお

富田林市 藤田 泰子

松江市 川本 畔

和歌山市 川上 忍

和歌山市 川上 富湖

米子市 石垣 花子

弘前市 一戸 ツネ

鳥取市 岸本 孝子

タレントのように手帳を埋めている
向こうから笑いながらの夏帽子
またあした言うてるうちに夏を越す
身のほどにやつと気をつく錆朱なり
かといつてのんびりできる蟻でない
塩ふって時々この身軽くする
ゴミ会議 猫やからすも呼ぶべきだ
ころあいをみてノーという返事だす
満開の白百合 留守を頼みます
断乎ノー言える男が見付からぬ
剃刀と言われた事がありますよ
三面鏡閉じて静める波ひとつ
今噛んでおかねば逃げる癖がある
こぼされる鬱を抱える宿根草
怖いほど昨日と違う風に逢う
さわやかな風なら答え出して見る
出たおいで私の中の誰かさん
ふるさとのホテルと群れている時間
物忘れ感情線だけよく伸びる
仲直りできるまでする口ゲンカ
共犯にされてしまった幕のなか
誰にでもやさしくすると悪いひと
とりどりの野菜百歳までの糧
細やかな輪で良い流れ清ければ
にっこりと試されているだまし舟
樹の幹に父の寓話が置いてある

米子市 足立由美子
今治市 月原 宵明
八尾市 高杉 千歩
八尾市 高橋 夕花
弘前市 斉藤 嘉
米子市 野坂 なみ
横浜市 保田 絹子
八尾市 村上ミツ子
鳥取市 武田 帆雀
尼崎市 春城武庫坊
愛媛県 中居 善信
和歌山市 川上 大輪
大阪市 三浦千津子
横浜市 三村八重子
横浜市 清水 潮華
米子市 茂理 高代
横浜市 山下 省子
米子市 門脇 晶子
倉吉市 野口 節子
和歌山市 堀畑 靖子
鳥取市 植田 一京
大阪市 立蔵 信子
西宮市 西口いわゑ
鳥取市 坂田和歌子
貝塚市 池田寿美子
羽曳野市 田中 透太

古稀という文字は白寿で使いたい
ライバルが大きく見えた日のフアイト
天青しやっぱり詫びることにする
留守電に軽い情けが入ってる
レシビばかり溜めて菜っ葉を炊いてます
牡丹ばさり昨日の夢を捨てよとて
こんな昼ところてんから食べはじめ
原始人は退屈などはしなかった
藍浴衣 母は奇麗な人でした
一杯の水飲み干して湧いた悔い
モナリザの絵にきてもらう壁のしみ
ひらかなの持つ哀しみは知っている
損得に走る私は腹黒か
私生活さらす携帯電話かな
ご自由に善意の傘が戻らない
指数から外れとうない命乞い
今日もまた縄一本を持ち歩く
丸木橋 左右を見ないことにする
風が聴くから恋の話を二つ三つ
音立てて咲いた桔梗におはようさん
しめくくる言葉はやはりありがとう
ふたりなら小さなお城築けそう
いい事も有りそうだから生きてみる
コンテナガーデン片仮名の可愛い花
まつ青な空よきれいに老いたいね
おもいきり燕返して風を斬る

唐津市 田口 虹汀
八尾市 大内 朝子
八尾市 吉村 一風
鳥取県 上田 俊路
西宮市 門谷たず子
岡山県 山本 玉恵
米子市 白根 ふみ
堺市 志田 千代
藤井寺市 高田美代子
鳥取県 西原 艶子
川崎市 和泉見早子
大阪市 一本 勇太
米子市 小塩智加恵
和泉市 中川 楓
高槻市 川島諷云児
寝屋川市 太田とし子
米子市 澤田 千春
川西市 松本ただし
三重県 佐々木森哉
三重県 布山 嘉信
横浜市 玉山 重人
松原市 玉置 重人
大阪市 本間満津子
米子市 木村富美子
枚方市 森本 節子
今治市 塩路よしみ
鳥取県 乾 隆風

自分史につかれ羅漢の顔を描く
 プライドを忘れて白い四人病室
 つまずいた石はお札の束らしい
 七十九 鶯の舞うのが羨まし
 時刻表開くと旅が目覚ます
 声かけた子供不審の目を返す
 おにぎりの芯から母が躍り出る
 結婚を望まぬ人の靴の音
 人はみな死のあることを知りつつも
 皿洗う幸せそうな音がする
 参道の馴染みになった生薬屋
 新人に頭の上でお辞儀され
 書き替えるたびに未練な遺言書
 般若心経すこし上手になって盆
 前線通過やとと自分をと戻す
 選挙カーみな減税の旗じるし
 ついうっかり笑い返して断れず
 一人だけ残った時の青写真
 ジャンケンで負けたら運が向いてきた
 もどかしくなったが杖は好きでない
 ざる蕎麦の一すじ毎にあるいのち
 落語好き聞いて帰って笑わせる
 後ずさり出来ない靴を買ってくる
 訥々と男が芯を通して
 ぐつたりの花へ点滴など思う
 首を斬る勇氣も試す管理職

兵庫県 中野とよ子
 富田林市 中井 アキ
 鳥取市 美田 旋風
 大阪市 榎本 露児
 八尾市 村上 剛治
 兵庫県 大谷幸次郎
 弘前市 高橋 岳水
 枚方市 前 たもつ
 横浜市 金森 徳三
 尼崎市 春城 年代
 守口市 森川まさお
 寝屋川市 堀江 光子
 和歌山市 福本 英子
 鳥取県 さえきやえ
 大阪市 神夏磯典子
 岡山県 矢内寿恵子
 大阪府 大森 年子
 和歌山県 坂東 和代
 倉敷市 田辺 灸六
 鳥取県 林 露枝
 河内長野市 水谷 正子
 寝屋川市 井上すみれ
 八王子市 播本 充子
 堺市 神原 文
 鳥取県 石谷美恵子
 横浜市 川島 良子

窮屈な老いの十訓などいらぬ
 第二志望の人生だけど幸せだ
 半世紀経っても八月は辛い
 本当の男ごころをまだ知らぬ
 家事の奥の深さに宵と酔うことも
 七掛けの人生論でもりあがる
 都市砂漠にも朝というひとつとき
 弱気になれば夏草に負けそう
 それぞれに部屋の時計がずれている
 のの言えば補聴器の耳つき出され
 マスコミをあつと言わせるため内緒
 それからのわたし狸になりそこね
 いつの間に壊された家建つた家
 改築の歯科医にわたし寄与して
 イラストと違つた顔で生まれて来
 あべこべに案じてくれる故郷の母
 夏草が覆う私の夢の跡

遠山可住さんの女人禁制が痛快でたまりません。私も含めての問題ですが、つい理屈に走りがちになり、どうかすると教訓めいた姿になりやすいのが近頃気になっていました。だから思わず「オー」と声を挙げたというものです。軽くて面白くて叙情があつて、きつと負けた神様に違いありません。奥田みつ子さんの曝された顔が内面をかなぎり出したように訴えてきます。大丈夫です。みんなだつて「曝した顔がいいよ」と大拍手しているのです。けれども自分には見えていない。本当は怖いですよ。鷲見正子さんのうしろの抜いに共鳴してしまいます。心の動きがしずかに揺られて深い匂になりました。人との関わりをさりげなく示唆してあります。

八尾市 宮崎シマ子
 鳥取市 春木圭一郎
 大阪市 町田 達子
 鳥取県 田村きみ子
 弘前市 蒔苗 果林
 横浜市 近藤 道子
 京都市 松川 杜的
 奈良県 鍛原 千里
 今治市 村上久美子
 横浜市 菱田 満秋
 和歌山市 宮口 克子
 寝屋川市 籠島 恵子
 和歌山市 福重 美子
 横浜市 長島亜希子
 三田市 北野 哲男
 枚方市 海老池 洋
 守口市 結城 君子

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 8月号から

藤 解 静 風

生きている証いびきがいとおしい

渡 辺 南 春

いびきの主は多分、奥さんでしょう。ご主人の優しい眼差しが温かい。

変わり者いいアナタは個性的

川 島 良 子

そうです。モノは言いよです。相手はこれできっと自信を取り戻すことでしょう。

いたずらをしそうな顔でカラス寄る

越 智 青 園

こんなカラスの集団に私も出会うことがあります。そう言えばこんな人間にもいるな。

言い切った言葉に裏が秘めてある

田 中 笑 子

言葉の裏側を読んで欲しい。

澤 田 和 重

年毎に妻が大きく見えてくる
ことに定年後はそう感じるようです。

不器用に歩くカラスに油断する

軸 丸 勝 巳

意地悪のカラスはちゃんと人間の心理を読んでいるのです。謀略には呉々も用心要心。構図だけ大胆に描くまだ喜寿だ

井 上 勝 視

その意気です。理想は高く、夢は大きく。頼りにはならぬ影だが連れて行く

武 島 ちよえ

ながい永い付き合いですからね。いままら袖にもできませんよ。

一行にドラマを秘める尋ね人

金 森 徳 三

いろいろな「想い」やドラマがたつた一行の中に込められているのです。

途中下車出来ぬしくみの口車

神 保 坊 太 郎

一旦乗せられると途中下車はできません。定型が好きなら暮してはみ出せず

近 藤 道 子

定型とはみ出しの見付けに拍手を送る。

八月のドームに蟬の鎮魂歌

加 藤 権 悟

何度詠まれても八月ともなればヒロシマを想起せずにはおれない。ことに今年印・パの核実験が世論を無視して強行されました。

ここから三句以下掲載の方々の句を取り上げてみました。水煙抄では三句以下の方々が全体の半数以上を占めております。私としてはこれらの方達への応援歌のつもりです。

安らぎは厨に湯気がのぼる刻

吉 村 さち子

女性でなくとも解るような気がします。紫陽花は虹にもらつた彩で咲く

今 岡 貞 人

虹は七彩、紫陽花は七変化。そうか、紫陽花は虹から彩をもらっていたのだ。

そう言えばオフクロの味忘れたな

中 井 正 秀

オフクロの味はちゃんと奥さんに継承されています。あなたが気付かないだけです。

ほろ酔いの機嫌夫にオーイお茶

北 沢 街 湖

ついにここまでできましたか。でも、お仲間よろしいようで結構、結構。

乾盃のあとジョッキがよく喋る

岡 田 幸 生

作句のコツを掴まれたようですな、乾杯。渦巻の蚊取線香に亡母がいる

水 谷 正 子

季節ごとに亡母への郷愁がよみがえります。団扇、蚊遣り器、昔の夏は風情があった。

尚香のむ

西出楓楽選

飾るもの何もない手に恩がある
遠い日が青葉若葉の奥にある

しみじみと着れなくなった服たむ
妻の乱 飯もおかずも買うてくる

城跡に立ってあしたを考える

雑音ばかり拾うてしまう老いの耳
奇跡などあろうはずない奇跡待つ

好きな色いろいろあつてまだ女

夏バテは決してしない茄子の紺

まん中で何時も黙っていてくれる

吊りしのぶ今日より明日と思う日々

ライバルはわたし自身のうちにあり

やんわりと言われてトゲがつきささる

夕刊とさんまの膳に一人つく

八起き目は根気でいこう杖の足

蔵のこと仕切っているのは蔵の神

咲く前の庭でいちばん美しい

真夏日でつまらぬことに腹を立て

切り返す言葉を抱いた孤独感

和歌山市 上地登美代

熊本市 永田 俊子

神戸市 船津とみ子

西宮市 西口いわゑ

米子市 驚見 正子

岡山県 矢内寿恵子

岡山県 土居ひでの

羽曳野市 芦田 絢子

藤井寺市 高田美代子

西宮市 牧淵富喜子

西宮市 奥田みつ子

堺市 神原 文

横浜市 近藤 道子

寝屋川市 坂上 高栄

大阪市 辻川 慶子

出雲市 石倉芙佐子

富田林市 藤田 泰子

今治市 野村 京子

弘前市 佐治千加子

仕合わせの途中で錆がこびりつき

一行の嘘でスピード出る手紙

玄関の幅に合わせた暮らしする

母の日がチャイム鳴らして届けられ

再発見しよう鏡近づける

生きるって大変だよね葱坊主

愛の字がうまく書けない一筆箋

嫌だとは言えず聞こえぬふりをした

復讐はアルカイックの微笑して

取って置き顔でワインを飲む火種

カード支払い忘れた頃にやって来る

小面のうちの苦しみなど見せぬ

フライパン女コントをくり返す

疼くものみんな疼いて熱帯夜

寶石燦然ぬくもりの無い握手

火もくぐり水もくぐって来た顔だ

逢いたいと思うひとあり天の川

いつまでの愛トースト二枚焼きあがる

菜包紙の鶴はとくに飛んだのに

きゅうり刻む妻が反抗してる音

お陽さまと優しさごっこ若みどり

百度でも二百度でもと踏む祈り

しめっぽい男を干しに行く散歩

草の名でもめて凶鑑を買わされる

ゆとり出来てから虚しさがつきまとう

移り気な風とまどろむ昼さがり

兵庫県 北川とみ子

和歌山市 古久保和子

愛媛県 黒田 茂代

横浜市 田中 笑子

米子市 政岡日枝子

和歌山市 川上 富湖

吹田市 山本希久子

寝屋川市 岸野あやめ

和歌山市 木本 朱夏

鳥取県 田村さき子

横浜市 清水 潮華

八尾市 大内 朝子

岡山県 大石あすなろ

東京都 佐藤 季頼

寝屋川市 堀江 光子

羽曳野市 吉川 寿美

和歌山市 田中 みね

西宮市 門谷たず子

八尾市 高橋 夕花

八尾市 宮崎シマ子

和歌山市 福本 英子

東大阪市 北村 賢子

寝屋川市 籠島 恵子

横浜市 長島亜希子

堺市 宮本かりん

尼崎市 長浜 澄子

子の恋はかなりいい線いっている
念入りに注油しているお晩酌

炎呑みそつと小さな息を吐く

心の中の雨がなかなか降り止まぬ
残されてまだ悲しみが畳めない

ワインドーの前でひととき自惚れる

本懐を遂げた徳利は寝かされる

知りません分かります逃げて上手

むきすぎた玉葱何も出ぬ答

満ち足りて洗濯物が揺れている

いつわりのやさしさとと言う罪がある

かくしたい齢をカメラが見てしまふ

寝返りを打って昨日の夢を消す

花いっぱい活けて景気と呼んでみる

この辺でスパイスほしい倦怠期

傷口へ他人がふれる好奇心

さりげない言葉で腹のさぐり合い

いつからか言い訳上手になりました

喚声へポップコーンが爆ぜている

健康茶 健康な人が飲んでます

ヒロインを遠く眺めて主婦に足り

陽に風に触れてもみたくい水中花

ひと呼吸置いたセリフに酔わされる

方便のうそも言えずに日々多忙

淋しさに鬼とも邪とも友となる

物忘れは警告ですと揺れる脳

鳥取県 西原 艶子
和歌山市 山根めぐみ

大阪市 日阪 秋子

藤井寺市 太田扶美代

倉吉市 野口 節子

和歌山市 森口 美羽

出雲市 園山多賀子

和歌山市 桜井 千秀

鳥取市 石上 悦子

大阪市 津守 柳伸

和歌山市 武本 碧

今治市 塩路よしみ

岡山県 山本 玉恵

鳥取県 植田 一京

和歌山県 坂東 和代

今治市 野村 清美

奈良県 井上すみれ

奈良県 鍛原 千里

川崎市 和泉見早子

大阪市 松尾柳右子

鳥取県 石谷美恵子

今治市 村上久美子

富田林市 片岡智恵子

大阪府 大森 年子

大阪市 川久保睦子
横浜市 三村八重子

大病院 病一つに料が三つ
奇麗だよ自惚鏡たまに言う

暫くはゆらゆらさせてさくらんぼ

鏡には百面相もして見せる

企みを見透かすように小犬の瞳

結構な月謝へ欠伸噛み殺す

物忘れ惚けたなどとは言わないで

世話女房 隣の老いもほつとけず

ダンディーな医師が血圧おしあげる

梅雨空の眼をたのしめます傘の花

主婦向けの雑誌で学ぶマネー学

淋しくないよ空としつかり腕組もう

好不況アタッシュケースは知っている

横浜市 鈴江 純子
八尾市 井尻 民子

守口市 結城 君子

米子市 木村富美子

大阪市 町田 達子

八王子市 播本 充子

芦屋市 黒田 能子

和歌山市 福重 美子

横浜市 保田 絹子

横浜市 山梨 雅子

和歌山市 堀畑 靖子

米子市 澤田 千春

横浜市 後藤 早智

登美代さんの句―十本の指すべてを飾るより、いつまでも思

うさま動かし続けるのが、指に対する報恩だと、作者にはよく

わかってる。けれど時には指輪で飾ってやりたい。それはと

りもなおさず自分自身への褒美だという、女心のいじらしさが

よく出てくる。俊子さんの句―老境が近づいてくると、伸びゆく

青葉若葉が、過ぎ去った青春の日々と交錯するさまが、自然

に詠まれていて心打たれた。とみ子さんの句―着られなくなつ

た理由は、派手になったのか、サイズが合わなくなつたのか、

いろいろ考えられる。しみじみに服への思い入れの深さとドラ

マが感じられ想像力がかき立てられる。中七のら抜き言葉に、

親近感が持てる。いわゑさんの句―結局は食事時間に間に合う

よう、夫のためにあたふたと帰ってきてきて終つた妻の乱。仲のよ

指

森田 文選



指輪さす緩いきついの日もありて
 十指みな糸の紐がついている
 いい方の指名ばかりと限らない
 指切りの澄んだ瞳を裏切れず
 人をさす指を自分に向けてみる
 いつかきつと指人形を踊らせる
 場違いへ指のダイヤが光り過ぎ
 骨太の指が昔を語り出す
 指切りの指一本を信じざる
 亡父送り仏間は母の指定席
 裏切らぬ十指に土の香が温い
 四面楚歌貴方の指に止まります
 働いた指が知ってる銭の価値
 十指皆遮二無二生きて仲が良い
 大仏も我が子も同じ指五本
 マニキュアもわすれ必死に世を泳ぐ
 指触れた余韻は夜更けまで続く
 名工の指から命吹き込まれ
 マニキュアの指が重荷になってきた
 どの指も未来の天を持っている
 指先で市場の活気左右する
 十本指がある合掌ができる

雅楓 シマ子 正 甫 恭 昌 たもつ 俊 子 庸 佑 妻 子 緑 良 銀 波 (女)美代子 多賀子 雄 々 志 重 ちかし 愛 論 洞 庵 保 州 たす子 政 良 蛸 輝 夫 螢

赤ちゃんに十指そろっている安堵
 亡母さんの指貫私にもピタリ
 点字読む指に明日の陽が昇る
 この指にとまってくれる人がいる
 少年の指をサタンにするナイフ
 嬉嬉として語る指輪の一代記
 ワープロをよちよち歩く太い指
 指の爪親に貫った色じやない
 箸を持つ指がうごいた少しずつ
 指切りをした美代ちゃんに結ばれる
 軽い気で押した拇印に裁かれる
 指笛を吹いて帰らぬ父を待つ
 約束を今も小指は覚えてる
 不器用な指でしあわせ止まらない
 ジャンケンポン僕の拳が開かない
 佳

はるお 充子 ひで めぐみ 芳 水 虹 汀 久仁於 圭一郎 鉄 治 まさと あらた 可 住 大 輪 善 信 日 枝子 徳 三 (女)美代子 俊 路 さち子 岳 水 小池しげお

主婦の座を降りて可愛い嫁まかせ
 二人降り一人も乗らぬ田舎バス
 中流を降りるしかない低金利
 もう下車と盲導犬の立ちあがり
 私よりいい女なら降りましょう
 トイレ休憩待ちかね降りるバスツアー
 主婦の座を降りたい時もある苦勞
 候補者を降りて素顔に戻る朝
 居眠りの車三途の川で降り
 終電車乗ったが降りる駅がない
 ラーメンがうまいと聞いた駅で降り
 結論は玉虫色で幕降りの
 緞帳が降りてトイレに走り込む
 降職が恐くて振れぬ赤い旗
 バスツアー降りると何か買ってくる
 通帳からおろしたタンクへしまいこみ
 エレベーターっかり人について降り
 不景気の責任総理降りなはれ
 役降りて風切った肩丸くなる
 勝ち負けを降りて笑顔を取り戻す
 知らぬでは済まずトップの座を降りる
 無人駅降りて道聞く人捜す

岩原喬水選



降りる

登美 雄 々 美 羽 甚 一 さち子 和 枝 勇 太 靖 巳 庸 佑 杜 的 雅 子 シマ子 美 子 セツ子 寛 子 圭一郎 あらた まさと

生涯を賭けた椅子から降りて飲む
傘寿でも降りる気配のない議員
二階からりんごの歌が降りて来る
青松が枯れて天女は降りられず
降圧剤小さい粒に余命かけ
話上手に降りる駅通り抜け
渋滞へ降りて先頭何しとる
天寿全う母安らかに暮降ろす
階段を降りるあいだの物忘れ
遮断機が降りる悲鳴の救急車
職降りた父に淋しい靴すべり
ゴミの日は鳥山から降りて来る
定年がなくて主婦の座降りられぬ
頂点を降りる梯子をはずされる
顔ぶれをながめ勝負の前に降り

雄幸 俊路 是盛 正嗣 愛論 寿美 朝子 吉之助 たず子 宵明 正子 可住

克治 やすお 剛治 一花 哲郎
涙もろい人いい人と限らない
売られ行く牛は涙へふり向かぬ
汗などと言わず素直に泣きなさい
勝った涙負けた涙も皆辛い
叱る方の母が沢山出す涙
ライバルに悔し涙は見せられぬ
汗をふくしぐさで父は涙ふく
嬉し泣きそんな日待つ涙壺
泣くがよい悲しみ流す涙なら
老いてから父は涙をかくさない
駅伝の汗と涙を見たタスキ
嘘も本音も一杯溜めた涙壺
真実の手話の涙に愛宿る

井上柳五郎選

涙

逆縁の若さへ涙隠さない
美しい涙に虹をかけてやろう
不器用な涙がロケを長引かせ
大正の男恥じらい涙拭く
大粒の涙に何度騙された
自分史に口惜し涙は省いとく
いろいろな涙を年とともに知る
太陽は涙を見せた事が無い
幸せの涙ハンカチ知っている



ふと涙介護する人される人
七彩の涙へ転ぶおとこたち
涙ぐみ埋めてやりますベットの死
番号があつたキラリとこみあげる
少年の涙を遺書に知る重さ
惜別の涙は鬚を切る手にも
男にも面い涙の壺がある
夜叉の面をうと涙を溜めている
がむしやらに生きて孤独の涙消す
妹の涙を拭いてやる迷子
臉濡らし一人仮設で見るドラマ
一粒で終わる涙のリアル感
ガッツポーズの好きな男の目に涙
惜敗の汗も涙も塩辛い
せめて一矢涙の後に誓うもの

武史 螢 充子 俊路 善信 周信 旋風 大輪 美也子 たず子 可住 弘一 やすお シマ子 庸佑 俊子

杜的 ひで 白光子 タミ めぐみ 勝視 章久 勇太 妻人 重人 晴翠 正劍 岳水 洞庵 愛論 正雄 良知 勤

初歩教室

題 — 決める

吐 ^は田 ^だ公 ^{きん}一 ^{いち}

川柳ではよく一句一姿といわれる。創作された一句の姿が大切であり、人間でいうなら八頭身美人(やや古い表現だが)である。八頭身であるためには贅肉があつてはならない。できる限り贅肉を削ぎ落し、洗練された句姿にすることが第一要件とされる。

決心をしてから易の列にいる 幸 枝

この句のようにその立つた姿がスラッとして、均整のとれていることが望ましい。人間の持つ迷いの心を簡潔に巧みに表現されている。色々と表現したいこともあつたらうが、思い切つて削除したところに深みを感じられる。なかなかこのようにはゆかないが、一句を削つた時ご自分で推敲を重ねることが重要。

添削句

○水増を決めて補助金長けた人 輝 夫
時事吟としては少し古い

▽補助金の水増し決めた事務次官

○清原が決める逆転ホームラン 弘 子
個人を出さず、高校野球などを勘案して

▽優勝を決めた逆転ホームラン

○決めるのにあれやこれやと魔がはいる トシエ

▽下五を邪魔とすればよかったのに

○決断へあれやこれやと邪魔が入り

▽決断力舗道を渡るカッツムリ トキ

○蝸牛を擬人的に生かすとすれば、舗道より

▽車道の方が適切では。(蝸牛=老人)

○決断力車道横切のカッツムリ

▽決心は固しとことん頑張つて 静 子

○他の二句が縁談であるので付度すると

▽決心は固い縁談見向きせず

○最後には母の一言決まります 寿 代

▽この場合は中八になつても一言でのて入

れるとよかつたのでは。

○我が余生柳と心中決めている 政 子

▽柳とあるのは川柳のことと思うが、それで

あればこの省略では全く意味をなさない。

▽川柳で余生送ると決めてある

○腹決めて禁煙挑戦すぐける 敬之介

▽下五がいま一つ。下六の破調句だが

○腹決めたはずの禁煙三日坊主

▽決めてから一層迷い深くなり 路 子

○できればその迷いの原因を具体的に

▽縁談を決めて迷いが深くなり

○いつからか決定権は嫁が持ち てる代
三世代とすることにより、シャモジ権の移譲がわかるのでは

▽三世代決定権は嫁が持ち

○二次会を飲む顔ぶれは決めてある(例信

子 推敲不足)。を、は、とすべきでしょう。

▽二次会で飲む顔ぶれは決めてある

○休肝と決めてはみたが、いる勇氣 武 治

▽下五の表現で句を壊している

○休肝と決めてふんぎりまだつかず

▽決められた制服ミニに針を持ち (幽雅 子

針を持ちより針そのものを擬人的に扱えば

いいのでは——

▽決められた制服ミニにしている針

○不信増しこの一票を決めかねる セツ子

▽上六にはなるがはっきりと表現すること

○政治不信この一票を決めかねる

○大学出職が決まらぬ暑い夏 トヨ子

▽選挙者の氣を引くような言葉が必要

○内定が決らぬ汗の夏スーツ タツエ

▽昔ならお見合いすれば親が決め

説明句に近い。

▽親の決めた縁に嫁いだのは昔

○決めごとは必ず果す堅い夫 円 女

▽この場合必ずしも省略できる言葉

▽義理堅い夫で決まりごと果す

○腹を決める昨日に変わる穏やかさ 郁子
昨日に変わる穏やかさ、昨日の立腹をそれとなく匂わせる作風で感心。ただ全体としてみた時何となく物足りなさを感じる。句意は異なるが。

▽腹決めて聞けば何んでもない話
▽なるようになるさと今は腹を決め

○決め球のつもり上手に受ける嫁 捷也
決め球は投手が打者を打ち取るのに最も得意とする球のことで受けるとは反する。むしろ打ち返してこそ打者の技が光る。

▽決め球を嫁は上手に打ち返し
○判決は白と決めてるさわやかに 圃八重子
下五で句が萎んでしまった。時事吟として

▽判決は白と決めてるロス疑惑
○飛び石にリズムを乗せて決意する 雄幸
中七が何を意味する決意か。人生とすると

ポンポンと飛び越えて出世する出世街道を意味するのだが

▽飛び石のような人生決意する
○土俵下決める軍配仰き見る 栄翁
下五がなおざり。参考句は下六だが

▽優勝を決め軍配へ切る手刀
○定年後家事分担を決めている 和可
前後を置き換えてみる。

▽家事分担決めて定年後のくらし

○蟹食へに行けば割勘決めて行く 美寿子
ストレート過ぎる。蟹とするより一般的な表現を用いた方がよいと思う。

▽割勘と決めて遠慮のないグルメ
○両親の決めた線路が狂い出す よしこ
下五に熟考を。句意は多少異なるが

▽両親の決めたレールに子は乗らず
○決めてからわいた不安な黒い霧 宏
下五が強烈なわりには内容に乏しい。

▽決めてから不安が湧いてくるプラン
○この人と心に決めて日記閉じ つよし
やや具体性を欠く。

▽この人に嫁ぐと決めて日記閉す
○スカーフで嫁のお古決めている 省子
中七が原句のままでは意味を持たない。多

分この意味であろうと思うが
▽フアッションを娘のスカーフで決めておく
○減税はアメリカ向いてやっとな 勝久
上五が説明的。前後を入れ換えると

▽アメリカを向いて減税やっとな
○脱サラを決めて決まらぬ日々過ごし一乗
中七以降が冗長

▽関々の日々脱サラを決めかねて
佳句

月決めの小遣い足りぬ子等のスト 芳水
命名は若い二人にまかせます 啓子

花びらを千切り明日を決めている ふみ
緑台の決め手を欠いた長将棋 圃八重子
濡れ落ち葉決定権は持っている 一典
きつちりと流行決める古稀の洒落 宗明
目移りで決めかねているショッピング サト子
Lサイズ決めかねている試着室 久子
決めかねて又着くらべる試着室 幸子
あっさりとした決めた同居で板ばさみ 君江
嫁にやる決めた日からの父のうつ Mitsuo
もつ止さう矢つ張り張り米作り よし子
(後継のない農家の悩みがー)

手に残る試合を決めたホームラン 勤
この勝負決めるつもり四番打者 慕情
決め手なく無罪に法が試される 純子
(時事を上手に)

決める彩少し派手目と花袂 茂代
決められた梓はみ出した茶髪の子 知香子
(これも現世でしょう)

決め球をひとつ握って妻安堵 智加恵
(主人はたまったものでない)
決め球を投げてきつちり話つけ 蕉子
(文句なしの佳句)

私の句
骨抜きにされて法案通過する

路郎賞 候補作品中間発表

川柳塔賞

平成十年五月号〜八月号

路郎賞候補作品

吉岡美房

悔いのないくらしを神に見てもらい

神様の情けか藁が流れ着く
千日の稽古世界が見えてくる
此の道に来てこの道の他知らず
婿殿が来るぞ来るぞと障子張る
鯛の目の何と大きな子の写生
夫病んで雑草ぬくもためらわれ
かけがえない人でした好きでした

田辺 灸六
近藤 春恵
加島 由一
早川 盛夫
鷺見 正子
堀江 光子
黒田 真砂
細川 稚代
小白金房子
山本 玉恵
堀端 三男
古久保和子
さなきやえ
桂子

板尾岳人

水すましあかず輪を書く飽かず視る

風船の逃げた彼方は夢だまり
古稀という大きな息の深呼吸
読み返す手紙の余白さくら散る
カミソリの音が男を主張する
所詮は喜劇で生きる足の裏
人間を脱いで人間らしくなり
放任を許さぬ足の爪をきる
霊気深々小鳥も水も木も語る
中尾深介のいないこの世となりけり

中村ゆきを
土橋 登
木本 朱夏
玉置 重人
一戸 ツネ
西谷 大吾
江口 度
越智 一水
新家 完司
塔 寛子
長浜 澄子
白根 ふみ
吉田あずき
浅田 隆樹
川崎ひかり

小池しげお

焦るなよと今夜も時計十二打つ
中村ゆきをを

エリート顔がだぶるよ熱帯魚 牧淵富喜子
定位置はことボタンの穴がある 石川侃流洞

千円の真珠いくらに見えるかな 岩本美智子
背かれて背いて母と娘の絆 山本希久子
書きすぎぬよう人妻に書く手紙 藤解 静風
黒いから何時もカラスは損をする 工藤吟笑
夫婦してポックリ寺の酒を飲む 川久保陸子
若草に座るお風呂の中のよう 蒔苗 果林
間柄不明で都会の夜が更ける 竹治ちかし
大ぜいの仲間と橋を架けている 高橋 夕花
破れ傘どう回しても顔が出る 大橋 政良
七転びしてから強い達磨さん 中山 雅城
あそびごころにかあるく白をまぜている 白根 ふみ

小島蘭幸

途中からなさげなくなる汐千狩 桑原 道夫
なくさめてくだるる方は好きでない 高田美代子
生きているわたしのためにさくら咲く 新家 完司

雪が解けました御先祖様に逢う 牛尾 緑良
おままごみために亡母の骨拾う 原みさを
エコロジー枕ことばとなりけり 藤生アト
情熱もやがて放物線となり 藤解 静風
若草に座るお風呂の中のよう 蒔苗 果林
賑やかな人から淋しさを貰う 松本 文子

只酒を飲んで沈んでいった人
 やがて夕暮れ善人は悪人に
 古里も墮落 温泉湧いてから
 正座して大和撫子ここにあり
 散骨はしない先祖の墓がある
 大文字亡夫が好きな位置にいる

河内 天笑

ニコヤカに聞いて帰って皆忘れ
 すっかりした妻にしたのはこの僕だ
 前 たもつ
 プライドの一つ二つはへし折って 福井桂香
 美味そうに食べる男は惹きつける 楠見章子
 消火器はあるが期限は切れている 氏林洋敏

川柳塔賞候補作品

川島 諷云児

可も不可もなく定位に夫婦箸 吉村さち子
 角隠す帽子を買って姑になる 西村りつえ
 ランドセルもつ偏差値が待っている

豊かさの陰で心が風邪をひく
 旭屋で道頓堀の雨に逢い
 いい年で笑い上戸に泣き上戸
 これしきで酔うはずのない酒に酔う

大野 蒼流
 岸本 宏章
 木太久正一
 亀井 円女
 山本 宏

だまつてる方がききめがありそつだ
 権代 康女
 犬猿の刺戟があつて生きられる 鈴木 公弘
 にわとりと同じポーズで薬飲む 古久保和子
 から元気出してるうちに調子付き
 宮本かりん
 気持よく貰つてもらふ難しさ 早川 盛夫
 核ボタン猫が踏んだらどうしよう

加害者が被害者よりも自己主張
 遠い日の人と会釈ですれ違い
 ほつといてくれる友情ありがたい
 空き缶を拾つて田植準備する
 伊藤 寿美
 成重 放任

自分史に書く上り坂下り坂
 三浦 強一
 回覧板昼寝をしたり泊つたり
 西岡 豊
 何時の間に一人になった縄電車
 野村 清美
 七人の敵を味方にする余生
 江原 秀夫
 安住の地は何処にあるはぐれ雲
 田辺 鹿太
 罪一つ溶けぬ絵皿の底を這う
 一本 勇太
 一筆箋 息子夫婦とつなぐ糸
 中井 アキ

榎本 吐来

小ジワまで撮つたカメラが憎らしい
 木村 親路
 小半刻話して名前出て来ない
 福島かづ子
 銀行は貸さぬ笑顔も持つて居り
 清水金太郎
 異常なし言われて他の医者探す
 大橋 鐘造

汗知らぬ手が華やかにテーブ切る 岸本宏章
 生命線の長い手相を信じよう 一本 勇太
 言い分のある手も含め多数決 三浦 強一
 ピンチとは言えず正念場と社長 井上京一郎
 裏口から出ない決意で入院す 山本 一宏
 探し物から一日が動き出す 和泉見早子
 ほどほどと言ふ物差しに悩まされ
 国米きくゑ

小林 由多香

社説書く人大臣になつて欲し
 長谷川 淳
 聞き流すことも覚えて登り坂 西垣美知子
 添削の朱に猛然と湧くファイブ 與田 明
 祝電が以下同文の仲間入り 福重 美子

悩み事無くて夕陽が美しい
 安達 厚
 リハビリの朝も欠かさぬ薄化粧 井上つよし
 余生とはいいつの事やら孫の守り 有沢せつ子
 おかわりを言わぬ仏へてんこもり 野村清美
 マネキンと妻をしまじみ見比べる 大西文次
 誰にでも調子合わせて敵がない 円増 純子
 これしきにつまずく足をなでてやる
 小塩智加恵
 嬉しくて孫の合格ふれ歩く 家守 政子
 ウーロン茶も君と飲んだら恋の味 山原昭水
 心臓も傘寿の音で脈を打つ 西岡 豊
 過去は過去にやさしくしてあげる

暗算で足る年金の使いみち 森安夢之助
 子育ての膝は丈夫に出来ている 田辺 鹿太
 澤田 和重

遠花火夫婦で別のこと思う
補聴器もやっぱり好きな銭の音
和田美寿子
松本 良

福本英子

節穴でなかった母の目の高さ
可も不可もなく定位に夫婦箸
噛み合わぬ感情線がシヨートする
さまざまな杖を頼りに生き延びる
荷ぐずれをやめない程度に嘘を積む
汗知らぬ金で一生活に振る
合鍵を貰って巣立つ燕の子
心技どれかが先に行きたがる
幸せにするよと軽く言いつぎた
死んだことないから死んだ気になれず
西垣美知子
吉村さち子
湊 修水
小泉久子
田辺鹿太
岡田芳江
大西 文次
中村 好恵
中村 充子
播本 清史
木村 親路
芦田絢子
安達 厚
荒井 広和

宮口笛生

無駄の一つもやしの尻尾とっている
職人の目が職人の仕事する
おかわりを言わぬ仏へんこもり
申告が済んで去年は遠くなり
三寸の舌何と大きな事を言う
ふくれてもすねても美女は花になる
塩路よしみ
今岡 貞人
野村清美
安達 厚
井上すみれ
有田加寿老

番傘創立90年記念全国川柳大会

—'98川柳 番傘同人句集発刊—

とき 10月11日(日)10時開場
ところ 三井アーバンホテル・大阪ペイタワー
開会のことば 森中 恵美子
あいさつ 磯野 いさむ
祝辞 仲川 たけし氏
講演 郎選選選選選選
宿題 「笑いってなんやろう」 露の 五郎
「だんご」 大木 俊秀子
「ひらく」 大鈴 木木 咲子
「壁」 墨土 碯 洋介
「歳月」 土居 哲秋
「これから」 福岡 紫蝶
「泊まる」 伊豆丸 伊豆丸 紫竹

◎当日の出句締切 12時 席題なし
閉会のことば 田中新一
事前投句 「集まる」 片岡つとむ 選
◎事前投句・宿題とも各題1句 欠席投句拝辞
◎事前投句は所定の用紙に記入して9月10日必着
会費 3,500円(軽食・同人句集・記念品呈)
懇親宴 10,000円 17時~18時30分(予約制)
事前投句・懇親宴の申込は9月10日までに下記へ
〒530-0047 大阪市北区西天満5-6-26-605
番傘川柳本社 (☎06-361-2455)

他人さんのことで血圧上げてます
心臓に悪い握手をしてみよう
どちらへも味方はしないやじろべえ
いい話種子はいっぱい持っている
武本 碧
名原純子
素顔には尊い人生刻んでる
生きがいと思つ手ころな畑がある
西垣美知子
櫻谷 郁子
円増純子
小野句多留

『平成十年』

高瀬 霜石

新家元司氏の三冊目の句集、『平成十年』

が、この平成十年にちゃんと出版された。

「こまでの氏の過去二冊の句集のタイトルが、『平成元年』と『平成五年』だから、どうしたって今年中に『平成十年』を出さないわけにはいかなので、当たり前といえは当たり前だが、これは常人にはなかなか出来ない技だ。何故なら、ファンに対して、死ぬまでずーっと約束手形を切り続けるようなものだからだ。これはすごいブレッツシャーだと思ふのだが、なにせ氏は鉄人、きつとそれを楽しんでるのだろう。」

僕は川柳に対してはなほ不真面目で、作句はまあ楽しいけれど、柳誌や句集を読めばすぐ眠くなるタイプ。そんな僕に、「霜石さんも、少しは勉強したら。ついてはそつね、新家元司さんを読んでみたら。きつと気に入るはず」とガールフレンドの一人が教えてく

れたのだった。そして間もなく、彼女の言葉通り僕は「元司の追っかけオッサン」になつてしまつたのだった。

数年前、神戸で川柳大会があり、ふらり出かけてみた。その場に薫風主幹もおみえだったので、一応僕も「塔」の末席に名を連ねているわけだし、この際と思ひ、主幹の前に立ち挨拶申し上げたところ、

「せつかく遠くまで来たのだから、誰か会いたい人はいませんか。誰でも紹介してあげますよ」とおっしゃる。

急にそんなこと言われても、日頃不勉強な僕は関西の川柳人の名がすーつと出てこない。誰でもいいと言われても、実は誰も知らない。いや待て、そうだ、新家元司だ、こういうチャンスはそうないと思ひ、主幹に氏の名前を告げた。

主幹は遠くにいた氏を会社の部下でも呼ぶように、「オーイ、完ちゃん、ちよつと来て」と気軽に手招きして、僕を紹介してくれた。

僕は緊張してその時何を話したかは記憶にないけれども、後日、氏から『平成元年』と『平成五年』の二冊の句集が送られてきたことからして、僕が氏のファンであることはわかつてもらえたのだろう。

憧れの氏の句集『平成五年』の「あとがき」

に、こうあった。

「『平明で深い』句を理想としているが、『平明』を想えば平凡に、『深く』を指せば難解になり勝ちなものである。」

僕が川柳をこころざしてから、いつも想ひ、考え、時に地団駄を踏んでいることの答えが、氏の句に、氏の文中にあったのだ。そして、この二冊の氏の句集は、以来他のどんな入門書、解説本、そしてどんな有名作家の句集よりも、僕の川柳の支えになり、教科書になつたのであった。

そして、『平成十年』である。

この欄を書くにあたって、はじめ僕の気に入った句をずらり並べてみようとしたのだが、あまりに載せたい句が多すぎて、すっぱり諦めた。何故なら、氏の句の素晴らしさは、僕がとやかく言う前に『川柳塔』の仲間だったら誰でも知っていることだからである。

とにかく、『平成十年』を手にとつて欲しい。一句一句、上質のドラマ（そう、例えて言えば、山田太一脚本の、大人のドラマのような）を覗いているようである。

これで、又新しい完司ファンが増えることは間違いないけれども、あんまり増え過ぎると、実は面白くないのも、ファン心理。

ファンとは、実にやっかいなものである。



悼 吉本菁風君

平成十年七月七日死去 67歳

菁風君を葬送る

菱 田 満 秋

連日三十度を超す猛暑の中で吉本菁風君の訃報をきかされた。青蛙川柳会出身者で川柳塔に籍を置いているのは、彼と薫風主幹と私の三人だけとなっている。だからどんな炎熱の中でも葬儀に列席して霊を慰めねばならぬと思い、酸素ボンベを抱えている主幹に代って行くことにした。

葬儀式場のご自宅は三年前に建てられたばかりで、まだ木の香の匂う立派なお邸だった。彼はこの素晴らしい邸から出て、年老いたお母さんの面倒を見るべく堺へ移住してきたのを機に、作句を再開し川柳塔社の句会へも顔

を出すようになったのだが、大会などで私が下阪すると必ず逢いに出掛けてくれた。平成六年に私が路郎賞をいただいた晩に、豊中の薫風居で朝まで麻雀をやつて、翌日、新大阪駅まで送ってくれたの思い出す。

葬儀は百人を超える参会者で溢れ、弔電も多かったが、三人のご子息の勤務先社長からのものに続き、薫風主幹の献句の入った電文の四通だけで以下省略されたのは解せない。葬儀屋は出棺に合わせることにしか考えていないようだった。

柳友を代表してお骨も拾わせてもらおうと火葬場へのバスの中で、菁風君の亡くなった日が奇しくも路郎先生の忌日と同じと聞き

七夕は師の日 君の忌忘れな
と浮んできた。ご遺族は菁風君が川柳を楽しんでいた事を知っていた方も少なく、戒名は「観真弘覚居士」と命名された。その意はミ

ノルタに永年勤めた関係から観真であり、弘覚は本名弘一から決めたということだったが川柳作家でもあったことを任職が知っていたら、別の名が付いたに違いないと思つたら、心から冥福を祈つた一日だった。

菁風君の思い出

橋 高 薫 風

昭和二十九年の末、西宮の明和病院に入院したら青蛙川柳会というのがあった。何となく作句をはじめた頃に入つて来たのが吉本菁風君で、西尾栞先生のご指導で毎月一度、課題での作句をたのしんだ。

昭和三十二年には会員が六、七十名にも増え、その春、麻生路郎先生を迎えて川柳大会を開くほどになる。北川春巢、松江梅里といった路郎門の高弟が選者であつた。その後の路郎先生のご稀祝賀の大会には、小浜牧人、河相すむ、本城弦月、樋口舟遊、吉本菁風や私が藤田美術館へ馳せ参じた。

菁風君と私が作句に熱を入れ出した頃で青蛙会が川維明和病院支部になっていたと思つた。

菁風君はのみ込みが早く、うがちを上手に
駆使して佳句を成した。

パン食の後も漬物つまんどき

片親で盗汗のことは言わず置き

聞いてやるだけで年寄り満足し

お婆ちゃん生れた土地で死にたがり

漫才の洒落も笑えぬ十二月

という風な句柄は、そうこうするうち大阪市

民川柳大会の兼題「重役」若本多久志選で

好きなそば取って重役登にする

が市長賞を獲得、病院中をよつと言わせた。

退院をして明和研究会を結成したあと、西

成支部や他社の句会（ふあうすとやせんば）

で作句をたのしんだが、本社句会で、

黒靴をわざわざ買って式を挙げ

で月間賞（兼題「黒」路郎選）を取ったのも

菁風君が最初であった。

豊橋へ転勤して作句を中断したのは惜しま

れるが、私たちグループにとつて、ともに旅

をし、酒を酌み、麻雀にほうけた一人として

忘れ難い。

今年の一月号の川柳塔には

ラ・クンバルシューター俺にも若い血が残り

の句が見えて、死ぬなどつゆ程も思いもよら

なかつたのに。もう会えぬ君に——合掌。

弓削川柳社創立50周年記念
紋土600号記念・岡山區芸術祭参加

第50回西日本川柳大会

参加吟行のお知らせ

とき 平成10年10月31日(土)・11月1日(日)

10月31日午前、貸切バスで大阪を出発

ところ 倉敷大原美術館・チボリ公園 見学

宿泊 大原美術館近くの民宿(かも井・くらしき特産館)

11月1日朝、倉敷を出発

川柳大会会場(岡山区久米南町中央公民館)

10時半出句締切までに会場到着

費用 二五〇〇円

募集人員 三〇名(先着順受け)

★弓削川柳社のある久米南町には麻生路郎先生の句碑をはじめ、

中島生々庵先生の句碑、ほか、三百基以上の句碑が公園遊歩道

に建立されています。

日本一の川柳の町です。

◎詳細は10月号に発表します。

申込みは川柳塔本社事務所まで

担当 板尾岳人



ああ児島与呂志さん

塩満敏

一九九八年七月十一日夜、川柳塔社常理事の吉岡美房さんから訃報が届く。その朝、川柳大阪の句会が高須賀金太さんから「与呂志さん危篤状態らしい」と聞いたばかり。

「もう一国会いたかった」の思いしきり…。

大正11年11月に大阪市浪速区で生まれ、ねっからの大阪っ子の与呂志さんの柳歴は40余年の長歲月です。「川柳大阪」という柳縁に結ばれ、橋本緑雨、北川春巢、富岡淡舟の諸先輩の指導を受け、「川柳大阪」講師の路郎先生の薫陶を受け、路郎先生にベタ惚れ心服してました。

川柳塔社から表彰状を受けた折り、「路郎先生からも表彰状もらったことがある。」と、とても大喜びでした。

一九七九年六月七日発行の与呂志さんの川柳句集『地下鉄』の末尾に、不二田一三夫さんの「編集を終えて」があります。

『川柳雑誌』時代から『川柳塔』の今日ま

で受け付けなどを手伝ってもらっていて「光明寺」時代や「文楽座」時代には下足までお願いした。人の嫌がることをイヤな顔ひとつしないところが与呂志さんの本領である。」

と。「句会場には一時間早く行く」というのが持論で受け付けに座る和呂志さん。「受け付けは僕らがやるから。あなたは、川柳塔社副理事長だから主幹の隣席にドンと座りイナ」と言っても受付役を譲らなかつた逸話もあります。

与呂志さんの選は、いわゆる厳選で抜ける句が少ない。「主催者の言う通りにしたら」と忠告しても与呂志流を貫いたものです。

与呂志さんは、徴兵で満州・中支に従軍し、辛じて無事生きて大阪に復員しました。

大阪交通局電車部鶴町営業所の組長（七組あり、自動的に大阪交通労組鶴町支部の代議員を兼ねる）も務められ、支部文化祭には川柳・生け花・書を出し、お茶会も催した与呂

志さんでした。それぞれの師匠の資格も持っていた多才な与呂志さんでした。

市電廃止で鶴町営業所が閉鎖され、私がいいた東梅田支部に「川柳大阪」会員の与呂志さん、浜畑胡蝶さんが転属して来ました。この二人と玉置重人さん、和氣徳松さん、敏で「川柳東風」を創刊しました。

地下鉄に移って一年後、復刊した「川柳大阪」編集責任者（与呂志さんの後任）に敏が就任しました。

与呂志さんは、高速部（地下鉄）難波駅に転属。そこでも、川柳仲間を募集し職場川柳会を作りました。当時の川柳仲間に川柳塔社理事の中原比呂志さんが居ます。

「与呂志さんのいる所川柳あり」と冷やかしたことがあります。我が意を得たりと照れていましたっけ。

定年後、大正区から比呂志さんの世話で藤井寺市に移転するや、「川柳藤井寺」を創立。娘さん達が住む和歌山県岩出町に移転すると、「川柳岩出」を創立しました。

「川柳塔」六月号の各地柳壇に、児島与呂志報「川柳岩出」が掲載されています。

人生のまど窓「ことにある日照り 与呂志 与呂志さんらしい遺句とします。

児島与呂志先生

を偲ぶ

川柳岩出副会長 上岡 正直

こよなく川柳を愛し、私達をご指導下さいました児島与呂志先生。今悲しくも幽明境を異にされたご霊前に類ずき、在りし日の先生を偲ぶものです。

先生によって昭和六十二年十一月、岩出に川柳の種子を蒔かれて以来、今日まで欠かさず月一回の句会でご指導、また各句会での選者として偏に川柳の発展と、社会教育の向上のため力を尽くしていただき、先生のご活躍に今後とも期待していただいております。

しかしながら、病魔は見えざるところで徐徐に進行し、平素の摂生も効なく、ついに病床に伏することとなり、ご家族の皆々様の寝食を忘れたご看病もむなしく長逝されるに至りました。

先生の温厚に満ちた人柄は、いま彷彿として眼前に蘇り追慕と哀惜の情、切なるものがこぼれます。

ここに「川柳塔社」「川柳塔わかやま吟社」の先生方及び「川柳岩出」の皆様による弔吟が寄せられ、改めて先生の遺徳を心から偲ぶものです。

与呂志先生辞世の句
雨の日に夢の中で死んでった

さよふならよい句出来たら速達で

桶高 薫風

与呂志さん何故に僕より先に逝く

野村 太茂津

沙羅双樹満開安らかに安らかに

牛尾 緑良

句集地下鉄出して面影偲んでる

堀端 三男

盆の月待ってたようじと与呂志さん

玉井 豊太

訃報とは句集地下鉄抱きしめる

中島 正博

天国へ行く地下鉄が早すぎる

川上 大輪

地下鉄の音をあなたの声と聞く

川上 富湖

炎天下御霊を急かす雲の峰

福本 英子

青々と稲の波間を逝く御霊

坂部 紀久子

今一度酔ってまみえよ君よ噫々

坂口 公子

根来路に落ちた巨星の影寂し

寺岡 呑天

紙とペン抱いて浄土の旅に立つ

宮口 克子

ええがねと優しいお顔もう逢えぬ

井神 昌子

師の教え永遠に生きてる我が胸に

上岡 正直

改めて偉大な星と知る別れ

小倉 アサ

永久に逝き柳師を偲び在りし日の

小倉 智恵子

師を偲ぶ回想の空果てしなく

杉山 精子

振り返る軌道に恩師偲ぶ数珠

福田 和子

永久の旅恩師を偲ぶ根来坂

藤井 春子

鑑だと慕った恩師もつけない

村中 悦男

梅雨晴れに辞世句置いて黄泉の旅

和田 良一

本社 八月句会

八月七日(金)午後五時半

アウイーナ大阪

暦の上で翌八日は立秋というのに、酷暑の
 続く中、熱心な九十七名の参加を得て、八月
 句会が開会された。

句会に先立ち、去る七月に他界された、吉
 本善風氏と児島与呂志氏を偲んで、黙祷を捧
 げた。

おはなしは麻生路郎師の孫で、現在同人と
 して活躍中の西村哲夫氏。テーマは「事」と
 「物」とについて。

最近、物の中から事を知るのが、大変難し
 い時代になったという。その例をお伽噺にと
 って落語風に語られたが、さすが僧侶で説得
 力があつた。川柳とは人生の全ての事を伝え
 るもので、祖父路郎のとなえた人間陶冶とは、
 自分自身の事を川柳によって伝える手段であ
 る、との結びに一同深く感じ入つた。

月間賞は高橋夕花さん(八尾市)に輝く。
 (司会―朝子)(記名―ゲン吉・いわゑ)
 (受付―たず子・房子)(清記―楓楽)

席題「だらだら」 藤田 頂留子 選

だらだらが性に合わない自動ドア

だらだらしてると明治の母に叱られる

だらだら小言 一人去り二人去り

かたつむりだらだらしている訳じゃない

だらだらと見えて眼力するこい人

探してもだらだらしている蟻がない

だらだらを一喝すこい稲光

酔生夢死だらだら責める蟬時雨

思考して行きつ戻りつ脳回路

ニュアンスの違いでグラタラする会話

だらだらの縁切坂で見る夕陽

だらだらと思案一步が踏み出せぬ

風鈴も拗ねてだらだら熱帯夜

だらけそうな空気へ母の熱いお茶

夏休み子のだらだらへヒステリー

だらだらと幹事困らすくどい酒

充電とだらだらコミック読んでいる

だらだらとしてたら孫が背を叩く

だらだらと来る中学生を避けている

接待が減るとだらだらして困る

だらだらの議会を締める多数決

お父さんいつまで飲んでるつもり

だらだらとしてガツチリ貯めている

この不況一牛のよだれで粘ります

気を抜くとだらだら坂にさしかかる

だらだらの電話を切れとにわか雨

だらだらと言ひ訳ばかりする役所
 点滴がだらだら落ちて長い夜
 だらだらと歩いていると家出かと
 定年の日からだらだらお邪魔虫
 叱られただらだら歩き叱る番

佳

だらだらの日がなを責める庭の草
 だらだらと引けば鮑もいがみ出す
 策があり昼行灯がだらだらと
 ライバルが見てるだらだらしておこう
 だらだらとしているその間も脈は打ち

人

だらだら坂過ぎてこれから正念場
 だらだらとロシアが延ばす北の島
 天
 核廃絶 言い出してから何年目
 がんばろうだらだらしても腹は空く
 軸

兼題「引く」

靱山隆盛選

幕引きの役に徹して無位無冠
 一行に引きつけられた一筆箋
 残り火に触れず女は紅を引く
 友情を保つ太目の線を引く
 引き際の美学を男持つっている
 五割引き原価一体なんぼやねん
 夏風邪を引いてしばらく無口なり
 一步引くことも教える夏休み

紫香

ますみ

東雲

愛論

かすみ

寿美

一風

勇太

度

かすみ

みつ子

正雄

保州

頂留子

四郎

満津子

アキ

楓楽

寿美子

金太

房子

英子

ニュアンスの違いでコーヒーが冷める 森子

兼題「身辺」 江口 度選

まん丸になれば身辺風まかせ
 整理するほどのことなし身の回り
 ふるさとでバブルの傷を癒してる
 古いものが消えてしまった身の回り
 身辺に妻の目がある日曜日
 身辺を洗うと謎が増えてくる
 他人事なら身辺はみな絵まんだら
 ゴキブリもトンぼも蟬も居る平和
 急浮上した身辺がきな臭い
 余りにも身綺麗すぎて疑われ
 身辺を洗うが如き蟬時雨
 身辺はいつも身軽な蝸牛
 身辺に医者と坊主のいる強味
 調子よい男の身辺謎ばかり
 葬列で身辺のことふと思つ
 安らかな夫のいびきだけ聞え
 パウエルよ身辺整理しておきや
 身辺をこっそり入れる貸金庫
 リストラの噂 身辺落ちつかぬ
 身辺にいつもぼすたるガイド置き
 身辺整理ラブレターからはじめ
 視線変えれば身辺にいる味方
 身辺に鬼も天使もはべらせる
 保証印 押しで身辺波が立ち
 リストラの風 身辺にうそ寒い

満津子 剛治 洋敏 扶美代 典子 大輪 義子 仁清 澄子 一三三 保湖 富湖 シマ子 千里 英子 半蔵門 金太 雅文 寿美 かすみ 哲夫 いわゑ 靖巳 柳宏子

気が付いてみれば団地の最古参
 身辺の綺麗な人について行く
 身辺に甘い言葉を撒き散らす
 身辺に不気味な風よストーカー
 身辺を探る抜け目のない風だ
 身辺でリモコン代りしてあげる
 透明な身辺税上がらない
 毒盛った犯人 身辺にいる噂
 身辺を飾り己を見失い

佳

仁清 英子 森子 朝子 美代子 泰子 萬的 倫子 洋

身辺が騒がし過ぎる大統領
 身辺危うしトカゲの尻尾切り落す
 身のまわりいつもきれいな葱坊主
 身辺をこっそり整理する左遷
 身辺整理しだすと夫折れて来る
 人

乱雑な部屋も方程式がある

地

保州

身辺を語るど愚痴になつてくる

天

楓 楽

今度こそあかんと思つ身辺の整理

軸

笛 生

身のまわりマンガで埋めて趣味読書

兼題「平等」

玉置 重人 選 度

どの子にも平等に鳴る母の鈴
 平等でないと末っ子から抗議
 大臣の椅子 平等に割り振られ
 平等にどの子も乗せる母のひざ

充子 庸佑 昭子

平等に育てたはずの子が背き
 父の日も母の日並みにして欲しい
 平等に朝はまあるい陽が昇る
 割勘で男に負けぬ大ジョッキ
 平等に切れぬ西瓜へ瞳がささる
 息子にも炊事洗濯教えねば
 平等を主張 差別の重い壁
 神様も差別をなさる好き嫌い
 平等は空気がだけです深呼吸
 平等を切札にする茶髪の子
 叱る時は叱る継子も実の子も
 平等をちよつぱりこばむ自尊心
 平等でないからこの世面白
 木喰仏みな平等の笑いじわ
 子に分ける嵩は遠えぬ母の箸
 折角のやる気 平等論に萎え
 東西南北 五円と決めたお賽銭
 平等にみえと差のつく二十四時
 義理人情絡むと平等狭くなる
 不平等ハイビスカスの鳥が基地
 平等の言葉にこわい影がある
 平等をいつも願っている小皿
 飢餓がある限り平等とは言えぬ
 実力は言わず平等主張する
 貧も富も同じ人間ではないか
 落ちこぼれにも先生の目がぬくい
 平等と言うから錯覚してしまい
 平等に割つても揉める遺産分け
 向日葵も私も同じ神の視野

房子 石舟 かすみ 周信 英子 満州 笛生 房子 仁清 理村 文秋 扶美代 たもつ 義子 靖巳 柳宏子 かすみ 雅楓 愛論 隆盛 狸村 典子 保州 梨里 金太 洞庵 千梢 諷云 森子

同じもの食べても痩せている夫
千歩

象の鎖 平等なんて言えません
落児

平等に褒めて上手に歌わせる
たず子

どなたにもお早うを言う父でした
美代子

王様も遊んでほしい隠れんぼ
洞庵

あきらめも平等 遮断機下りている
茜

あれからのアダムとイブの不平等
しげお

満ち足りた方が平等説いている
ダン吉

水やりは平等咲く花咲かぬ花
シマ子

平等をとつても嫌う玉の汗
重人

兼題「養う」 橋高薫風選

養いの苦勞喋らぬいいおやじ
狸村

再起する為に養生せよと言う
紫香

一病に喜怒哀楽を養われ
四郎

アイドルに扶養家族が多すぎる
充峰

養父母と共に祖国の土を踏む
久峰

養った英気吐き出す甲子園
三男

戦争展 子ら養ったあのリュック
高栄

夏山で英気養う汗流す
洋

休養の観光バスは揺れどおし
しげお

養殖の鯛も目出度い日のメイン
洞庵

のんびりと養われてる奈良の鹿
度

餌付けされ家族の顔になる狸

臆かしられていた頃は輝いていた

年下のおとこ養う力こぶ

酒とろりふーと心を養われ

リストラで妻に扶養をされてます

扶養をされているのはオスの金魚です

養育費なくて離婚もせず済み

仏壇の前で叱られ扶養する

酒という培養液のある私

老いた脳養う本を読んでいる

髭生やし養子に來ても良いと言ひ

扶養家族しばらくいい旅いたしましよ

ピーチクパーチク扶養家族を食わして

口養い我が身一つを持て余す

国中で悪を養うきのう今日

クローンのいのち養う世紀末

裸婦を見る目は養うておりません

義務教育終り養殖池を出る

私を養うて来た棚の本

養うてやったは口にせぬことだ

たまごっち養う口はむつかしい

ひとときを皇后様とする蛋

車椅子 犬を養うおばあさん

養父母になかなか言えぬ好きな人

養生訓 欲捨てたらと母が言う

大切な人に養毛剤贈る

名曲にこころ養う深いいす

柳宏子

重人

朝子

いわゑ

セツ子

森子

千秀

半蔵門

典子

養

扶美代

笛生

章久

美代子

朝子

瑠美子

大輪

寿美子

仁清

千歩

かすみ

利武

あやめ

千里

賢子

義子

養ったなどと思つていない母
夕花

養老の酒 年金で飲むべかり
薫風

第12回 堺市民芸術祭川柳大会

とき 9月13日(日) 13時開場

ところ 堺市立梅文化会館3階

堺市桃山台2-2-1

☎0722-96-00015

(東北高速鉄道とが美木多駅3分)

おはなし「川柳あれこれ」 梶川雄次郎

宿題 コスモス 荻野浩子選

来る ページ 海堀酔月選

鴉(からす) 門谷たず子選

もしも 久保田元紀選

舞台 重谷峰彩選

瓦 竹山逸郎選

藤田泰子選

◎席題なし 各題2句 締切14時

参加費 1000円(作品集・参加賞)

主催 堺市文化団体連絡協議会

後援 堺市・堺市文化振興財団

連絡先 59044堺市榑屋町東一丁2-12

〒09 梶川雄次郎方 堺川柳協会

☎0722-22-5298

老地神壇

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

岸和田川柳会

長谷川昌万報

流石名優見ごたえあつた大舞台
年の功流石に巧く嘘をつく
板前の腕流石と口がはめている
人間国宝流石気品のある踊り
人朝を叱る流石明治の土性骨
金のこと流石抜け目のない女将
土俵ざわ流石に強い二枚腰
三つ指にしどろもどろの頭下げ
あの娘なら嫁に欲しいという騷
お金では買えぬローカル美味い空
花形の轍はためくドサ廻り
ローカルでゆつくり楽しむフルムーン
A型型わき見の好きな私です
わき見癖昔のままと母小言
あれこれとわき見しながら五十年
參觀日こちらを向いて手を振る子
フルコース隣のマナーわき見して
わき見せずこの一筋の匠わざ
絶景にわき見注意の標示板

俵子 鹿太郎 一齋 甚一郎 辰郎 萬的 狸村 基 松風 敏光 盛之 富志子 和歌子 洋 昭二 美津江 路子 苑子 呂万

漫画本わき見もせず読み通す

脇見する度人生の曲り角

縁起物の猫がときどきよそみする

国会のヒナ段わき見よく目立ち

星条旗にわき見ばかりをする総理

脇見する余裕は妻がもっている

赤札についた高値があほらしい

赤札を値切り店主にしかられる

頭から足の先まで赤札品

赤札を酔眼が見る二度二度

エリートといわれ赤札吊るされる

せつつ川柳万画会

延寿庵野鶴報

女関を開けて待つてる旧い友
娘がくれし花柄かわいアンブレラ
長老の説法聞いてなるほどと
送別のジャンボ花束重く受け
呑み込めないがなるほどと言っておく
さわやかな言葉も持たずカズ帰国
さわやかを取り戻したい闘病記
ちよつと待て別れたくない好い女
紫陽花に慰められた梅雨のうつ
骨肉の矢玉をくぐり花咲かす
近寄ればなるほどでかい角力取り
さわやかな笑顔でかくす下心
好きな人待つ身はつらくなかりけり
旅立ちへシャンペンの音さわやかに
まてまてと何時まで待たすよい返事
花道のはずが酷評天下り

さよ子 ひで 洞庵 白光子 ダン吉 柳宏子 美智子 東雲 東吉 蛙城 一弥 鐵雄 久子 京子 孝治 夢之助 晴子 満寿蔵 喜久造 勇次郎 英雄 紫香 昌子 清澄 好治 永壽 東園

風少し冷たき朝のさわやかさ

化けかたを相談してる夕桜

なるほどと相づち打って聞き上手

脳味噌にジンジンとくる旬の味

一輪のばらに答えをせまられる

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

天井の染みもローンの一部なり
ぐるぐると天井まわり出す迷い
蜜月のねずみ賑やか天井裏
プランコを天まで涙置いてくる
天井の隅にたまっている思索
天井の闇へ身の内問う夜更け
かじりつく石を持たず吾老いぬ
鼻かけた石の地蔵に油蟬
一度だけ人間追うて見たい牛
川柳塔おつぱこ吟社 木村あきら報
まだ少し燃える火種に虹を差す
Tシャツの絵柄気になる大ジョッキ
痛い目に遭うたか腰が低くなる
酒二合付けて留守番頼まれる
頂点を目指す男はよを見せぬ
年金を当てた誘いの縄ノレン
誘われて返事は妻の顔色で
夫婦路も道草は許されぬ
五千株花に絵心誘われる
呑み口がよくてツイツイ誘われる
礼服を着る度スボン直す夫

欣史子 能子 シマ子 喜美子 あずき 田実子 香住 弘直 清芳 いさむ 治 マツエ 坊太郎 あきら 吟笑 捨楽 文仙 かおり 輝夫 くに子

空缶を拾つて田植準備する
死に花を咲かせた友の愛らしき
カーネーション母病床の枕辺に
寺参りいつも貴方に誘われて
幸せが背中を向けて逃げてゆく
光る日信じて今日も磨く石
込み入った話は聞かぬ事にする
川蟬の獲物を狙う急降下
先輩の過ぎ去りし影追いかけて
デュエットの調子外れて歌終る

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

旅の宿入れ歯忘れておあわて
歯ぎしりに寝言がついた旅の宿
足腰も弱い歯も抜け口達者
W杯年がいもなく歯ぎしりを
縄文の人に歯痛を問うてみる
白い歯と笑顔がマッチしていま
歯ぎしりが先に眠って寝つかれぬ
歯並びがよくて笑顔が美しい
にが虫を噛んで大事な歯が欠ける
自慢した歯だけと今は医者通い
歯痛など知らぬ幸福感をもつ

川柳塔ふくべ

橋本多哥由報

色即是空緑になった草を引く
汲み上げる愛の泉が澄んでいる
流されて見よか遅い恋だけど
化粧した顔が緑に染まりそつ

放任
チカエ
治延
節子
ひかり
はつ恵
よしみ
正雪
なみ子
貞月
鈴木
久子
和代
公美枝
正光
弘子
静江
康女
智恵子
信敬
雄々

来た道も行く道も消え岸に立つ
緑地帯ベットの糞が恋の邪魔
澄んだ瞳にすべてを託すことに決め
絵筆買つ緑の山を描きたくて
朝の陽に真珠の露が消えて行く
恋人とお茶を飲んでる四畳半

川柳東大阪

森下

愛論報

思い出と土に還つて行くいのち
お節介やいて路地裏かしましい
大方は見えて見ぬ振りをするナイフ
さわやかな弁舌人を逸らさない
さわやかな女で過去を語らない
さわやかな空気をくれる水芭蕉
さわやかな風にあいたい水中花
心から詫びてさわやかペダル踏む
母親にそっくり似てる美人顔
自慢にもならぬ仕事草が生き写し
追い越せば似ても似つかぬ遠い人
うたた寝に赤紙がきた怖い夢
白紙答案先生の顔逆なです
紙一枚ハンコ一つで他人です
本心を見抜き白紙にもどす緑
白紙委任紙は重さをまだ知らず
薄暗い死角で女ホロホロと
花しおり暗い過去から立ち直る

川柳後楽吟社

従野

健一報

コップ酒を分け合う些細なよろこび
道博
寛子
正和
皓司
信子
春恵
多哥由
雅文
猪太郎
晋吾
庸佑
治也
太郎
あや子
東雲
正博
頂留子
シマ子
恭昌
賢子
朝子
たもつ
愛論
湖風

愛してるなんていままさら言えるかい
安楽死望まず点滴打ちつづけ
痛みさえいとおいしいまだ生きている
紫陽花が散つて私も裁かれる
退職してから下座へ座るとく
梅雨冷えて備えセーター残しとく
痛みこころ母のふところ暖かい
朝顔が咲いたと仏に供えたり
本音言うマイクは逆に向けてあり
不景気を笑いとはした肥満体
都合よく忘れて惚ける老いの知恵
潮時に気がついてる足の裏
繰り返すいのちと思ふ新生児
期限切れまだまだ恋をしています

佳句地十選 (8月号から)

菫 田 獭 杏

民芸は無名の腕で守り抜く
偏差値も鼻も低いがわたしの子
ゆつくりとお休み猛女へ弔辞読む
世がせなら等とルーツの酒を酌む
のんびりのどの芽も母は可愛がり
夫婦だから言えぬ台詞の二つ三つ
父の影のこして山の木も太る
花開く小さな庭が社交場
いやな人にもにこやかにこんにちは
石を投げると老人に当りそう

まさお
佐加恵
幸子
健一
哲郎
柳五郎
金吾
照路
博友
忠成
浄美
拓治
青銅
邦季

佐代子
重人
田実子
弘治
楓
百合子
静江
早智
ルイ子
度

手を叩くから手を叩くとおい耳
 マラソンで培った人生の粘り
 ポーナスですこし狂う夫婦の歯車
 ユーモアが少し欲しい世の中だ
 アルバムをめくれば亡母の星がふる
 当選祝の義理が絡んで贈る酒
 丸くする団子玉虫色が良い
 心身良好気軽に投げてド真ん中
 男下駄おとこの生きざま響かせて
 情けを貰うと集金人が来る
 後ろ向く蛙に悲しい過去があり

三幸川柳教室 三宅 保州報

ふっ切れたらしい尺八良い音色
 ふっ切つて神に頼らぬようになる
 ふっ切れずふつふつたぎる愛と憎
 後ろから押しつけてくれたらふっ切れる
 万全の布石固めてふっ切れる
 ふっ切れば弾みて落ちた目の鱗
 吹っ切れぬ胸に打ち込む句読点
 飛んできた種一つが土を抱く
 ちっぽげな地球に父の土地がある
 土付かずの天狗が嵌まる落とす穴
 鉢の土だけしか知らぬ家に住み
 土の味知らぬ娘のハイヒール
 泥んこになつても守るものがある
 足を元を掬われそうて近寄れぬ
 目測で挑んだころの青春譜
 距離開けてあなたはいつも生き上手

吟平 桃風 敏明 秋月 正秀 吉則 信善 美智子 草風 鮫虎狼

第三者だから争点よく見える
 ゴルフアーの命を削る一センチ
 好きだからついでにアミスをしてしま
 距離おいてみれば誰もがつかしい
 針のない時計の好きなきんぎょ
 砂時計余生の脈を読みにくる
 計画が大きすぎたか電池切れ
 計り知れない夢乱雑な子供部屋
 計算に入れてるうなぎ屋のうの字
 計画を詰めた靴が振り回す
 コンピューター恋の深さは計れない
 容赦なく誤算の風が身を責める
 匙加減おおよそのまま来た誤算
 人一人倒れて時計狂い出す

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

憎しみの深さで墮ちてゆく蛍
 愛しさが憎さに変わる万華鏡
 嬉しさが消えてさつと身をひく憎い人
 憎しみの涙と共に捨て骨拾う
 大粒の涙とわかれる初対面
 骨のある人だとわかる初対面
 右腕に骨のある奴探してる
 暗い青春泣いて拾った戦友の骨
 時効まで女がたどる七変化
 整形に自信を持つている時効
 シベリヤの怨みに時効などはない
 戸を叩く風におびえて待つ時効

百合子 朱夏 碧 めぐみ 嘉平 豊太郎 正圃 和子 章子 起世子 鉄治 敏子 千秀 公子

時効待つ指の先より日が沈む
 時効まで独身寮へ入れておく
 うどんつるる今日も阪神負けた
 大阪のうどんに慣れた嫁の味
 素うどんにばっちり京の九条ねぎ
 素うどんて天下国家を論じても
 縁談をもつれるように父がする
 ごめんねと言えはもつれが解けるのに
 もつれたら上出来連敗タイガース
 双方に正論があるもつれ糸
 家裁からもつれた糸がほぐれたす
 嫁姑もつれが消えた車椅子
 究極のもつれをほぐす母の知恵
 タイガース勝つて女房もホツとする
 価値観の違いで乾くのど仏
 まだ一人顧問に明治の顔がいる
 墓まいり好きと今頃言うてみる

竹原川柳会 時広 一路報

いつも二人空は青いまんまです
 外人を見ると英語がしゃべりたい
 アメリカン恋はからりと続いている
 珈琲が匂う素通りできません
 珍しくコーヒー入れたと父の声
 珈琲一杯やすらぎぬなり夕暮れる
 コーヒーを麻葉のように胃に満たす
 コーヒーが好きだったね灯と語る
 ホコホコと沸く珈琲と模索する
 やさしゅうに包んでくれる母がいる

高栄 紫香 スミ子 杜的 柳宏子 一夫 克治 秀夫 武庫坊 靖巳 大輔 満寿蔵 和歌子 澄子 茶の子 晴美

誰よりもやさしきくれる嫁が居る
やさしさに嫁ぐ心を決めました
葛藤の中でやさしき欲しい夜

やさしい顔してむづかしい事を言う
孫の声聞くとやさしくなるお顔

お母さん虹だよ早く出ておいで
極楽浄土やさしい虹をかけて待つ
シャボン玉小さな虹が消えてゆく

マドロスも虹を眺めていいコース
たましいをゆきふりに来る雨後の虹
掌の中にひとりの虹を握ってる

酸性雨それでも虹は美しい
故郷すてた日の虹夫婦だけの虹
虹色にアジサイの恋僕の恋

通過点の一つに過ぎぬ虹だった
帰省した僕を迎える虹の橋
背伸びして歩くと虹が消えてゆく

城北川柳会

神夏磯典子報

カッブルがコレクトコールで無事知らず
難聴な母に内緒はやめておく
にっこりの遺影へなにもかも有す

老いぬればもうとまだまだ思う日々
散骨を遺書に一寸すねてみる
いつかくるオリンピックを見る意欲

カーネーションつぼみのままで出番待つ
末っ子に流れる母の内緒金
丹精の菊た雨にも濡らされぬ

にっこりと猫なで声で逸らされる

喜久恵
笹舟

貞子
勲

節夫
八重美

カツ子
規代

美佐雄
喜美子

一枝
力

不朽
笑子

静風
菁居

一路
一

佐津乃
トヨ子

登美子
高栄

博遊
千恵子

あい子
あやめ

達子

完走のシャツが重たい雨と汗
そこら中濡らして父の台所
にっこりがとつても恐い領収書

にっこりと試されているだまし舟
熱のない人から貰う花封書
目が物を言ったと母は合点し

片袖が濡れたまんまの遍路旅
嘸きが耳に残っている微熱
回覧板内緒話もついている

パーシロード父の心も濡れている
言うまいと思う内緒の胃の重さ
熱おびた瞳に何か有りそう

それぞれが我が身にくらべて見るドラマ
ポケットの内緒がバレる衣替え
胸の奥棲む鬼がおり経を読む

内緒ごと無くして明るいうちの家
疑心暗鬼金魚も同じ不眠症
雑魚なりの夢に向かってる弾み

小玉では気に入らぬ児のシャボン玉
困ったとき叩けば開く母の胸

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

お怖い寝たきり婆が起ち上がる
老い先を考へ子等を考へる
運勢欄笑って読める齢である

懐石の膳より野良の握りめし
飛行機雲綺麗に咲かす急降下
無党派がゴルフへ急ぐ投票日

勝ちと見てハッシハッシと打ち進む

史風
求芽

勲
寿美子

昭子
睦子

政子
静枝

一枝
和歌子

倫子
白峰

順三
久留美

千歩
朝子

春蘭
公一

輝夫
實

勝視
弘

あき
久仁於

幸夫

梅雨晴間何はさておき干している
若い声褒められている電話口
悪いことすれば我が社は首がとぶ

目頭が熱い訃報は耳で聞く
お馴染みの飯屋あれかと念を押し
ミサイルの挽歌待ってる火縄銃

川柳大阪 坊農

ようかんを等しく切るの難しい
ゴキブリは忘れた頃に増えてくる
どの子にも等しい事が出来まますか

孫四人三角ケキ割る技術
駆除しても次々と出る悪の華
政界の駆除特効薬はないものか

スイングが良いと口数多くなる
口数でスイングしてる草野球
不景気を駆除願いたいエビスさん

全て好きそんな一時期ありました
煩惱を全て捨てさるなど出来ぬ
カッカ来るお腹の虫も駆除したい

負け犬にも等しく照らす日の光
等しくはないなと宿のメロン皿
榮転が等しい仲に水をさす

世渡りへ一円玉も意地を持ち
火葬場もタイオキシンが出て困る
皿の上パパと同じと子の笑顔

人類を駆除するつもり核実験
憎らしい電話販売駆除したい
わたくしの全てをあげる恋蜜

夕ミ
晴翠

高明
虹汀

正剣
四郎

柳弘報
真紀

信醉
末坊

照月
喜楽

川童
河童子

川笑
かよこ

酔舟
酔舟

美花
一風

雅巢
鉄心

洛醉
本蔭棒

柳昌
比呂志

希久志
朝子

この薬虫は死んだが木も枯れた
 スーパーは僕が行きます均等法
 等しいと言うから答え間違える
 無党派よコピー参院どうしよう
 駆除剤のよくて実験くり返す
 核抜きで全ての海が風いでくる
 結局は妻と等しくなる歩幅
 スイングが怖くて橋が渡れない
 核実験人類全てを裏切つて

大原川柳社

矢内寿恵子報

濡れてます裸線を追っているカメラ
 泣き濡れた過去は女の玉手箱
 ぎこちない相合傘で共に濡れ
 濡れ落葉もえて燃やした頃の夢
 煩惱を捨てる雨なら濡れましよう
 汗に濡れた父の重味を語る背な
 いきなりの旅へ財布が淋しすぎ
 いきなりの指名仰天させられる
 リストラの風いきなりが怖くなる
 晩婚がいきなり親子連れくる
 拳骨がいきなり飛んだ父を恋つ
 フルムーン夫いきなり歩を変えろ
 稲光いきなり夫に抱きつかれ
 幸せにつなぐ涙に濡れている
 濡れ衣が暗れるとドラマ幕になる
 濡れ衣を着せられては午前様
 雨に濡れ核反対の座り込み
 露天風呂七十年の愚痴流す

まつお 一步 青道 三十四 丹吉 金太 笑風 重人 柳弘

いきなりに呼び止められた人違い
 という訳で相合傘で濡れてゆく
 神の目に叶う生き方濡れぼたる
 一億の涙に濡れた敗戦忌

京都塔の会

松川

焼きものの蛙征服したかたつむり
 途中下車したい所にある桜
 日も耳も口も達者な瘦せ蛙
 もう降ると予報している雨蛙
 夢の中までもがき続けている男

昭子 あすなろ 和子 寿恵子

庭先へまかり出て候ひき蛙
 飛ぶ鳥と遊んでみたい蛙の子
 蓮の葉に悟りをひらく雨蛙
 鶯が鷹生むこともありカエルの子
 蛙鳴くそのまん中に無人駅
 底なしの沼でもがいている野心
 もがく者同土痛みを頷ちあう
 運の無い小石が余る川の底
 カラフルな色で余生の糸でまり
 気張つてもどうせ僕の子蛙の子
 池埋める話聞いたか蛙たち
 足元の見えぬ蛙の自己批判
 小町井戸蛙も美人が好きらしい
 神のてのひらで人間がもがく
 もがくほどするずる落ちる夢の中
 途中から焦点外す長電話
 途中まで来て思い出す定休日
 途中下車そこにヒントが落ちていた

求芽 白溪子 楓云児 波留吉 豊次 吉之助 友熙 とし子 克治 武庫坊 礫 女

杜的報

サークル檸檬

小林 一夫報

途中まで先に出かけて待つ夫
 こっぴりがのどかにころぶ京の坂
 土の香が掌にも嬉しい菊根分け
 めだかにも喰われる餌があるんだな
 病氣と寿命は別だと若い医者やさし
 民宿の良さは蛙の歌の中
 一日が終りあしたがあるだろう

紫香 春蘭 年代 美穂 福子 水客

うぶみ川柳会

西村 黙光報

終戦後虫歯直さず総入歯
 夫婦でも虫歯の数は内緒です
 家計簿に笹が仕掛けてあるらしい
 溜まり場はちよつとあぶない笹に水
 内緒した信じた人が笹だった
 空出張役所の笹は目が荒い
 ふる里のグルメが笹に盛つてある

華子 鬼桜 雅女 ユリ子 くに お 黙光 雄人

夏休みになればとみんな先送り
真つ赤な夏拍車をかける蟬しぐれ
ブライドを微塵に砕く夏の空
寝入りばなを起してまわるわらび餅
丸干しにされそう汗の炎天下

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

頑張ると出て来たけれどゼロでした
と言いつつ足が心がスキップする
出しゃばりがぎりぎりに来て前に立ち
頑張った形で花が枯れている
紫陽花のいっぱい咲いてる街が好き
ぎりぎりのところで神になりそこね
ぎりぎりに生きて未だぎりぎりに生き
古箏笛亡母の面影捨てられぬ
片減りの靴も少し頑張るか
ぎりぎりでの気になったいい返事
ぎりぎりの線で耐えるレオタード

ローズ川柳会

山崎

君子報

取れそうなシャツのボタンに亡母の声
シャツの衿立てでサンダル颯爽と
ラディッシュを花型に切り人を待つ
無農薬元氣な虫も頂戴し
輝いていたいあしたへシャツ洗う
ペンだこが出来た昔が懐かしい
フルムーンせめてピンクのシャツを着て
父の日だ野菜もすこし肩を張り
命火の脆さを知った茄子の馬

三男
賢子
千里
春子
洋

聖子
惠美子
好栄
ちよえ
英子
はるみ
鈴江
かつ子
博利
清泉
白汀

哲子
トミエ
貴代子
まさお
澄子

無造作に緋のシャツなど着る時世
実篤の画く野菜には奥がある
茄子のぬか漬け日々自慢の色になる
棒鱈と煮込む野菜を決めている
友くれしみつ葉しなやか温か
季節感のうすい野菜が愚痴こぼす
花好きの亡夫好みの花を活け
Tシャツの胸に縫い込む嘘一つ
川柳塔鹿野みか月
土橋

いわゑ
武庫坊
年代
はつ絵
君子
義子
笑女
雅子
螢報

寺々の晩鐘聞いた子供たち
いい鎌と出合いを探し街歩く
夢叶い晩年のいま花開く
初ものを心風ぐまで噛みしめる
にこにこにこにこ書留が来てくれた
にこにこ出来ぬ理由は君にある
気炎あげ味方同士が手をつなぐ
川柳の仲間の気炎すばらしい
嫁にふらふら孫にふらふら尻尾ふる
むらさきの風ふらふらとポストまで
お気の済むまでふらふらしておいで
不意の雨ちよつと隠れる場所がない
み仏に不意の悟りを聴いている
樹を倒す不意の話が恐ろしい
礼砲が不意に作動をしなくなる
いつまでもふたりの影を残したい
影法師お前も頭禿けたかい
月影でポケットベルが急に鳴る
影売った男に戸籍などはない

汲香
野草
かつ乃
弘子
喜与志
武子
八重子
はつ子
節子
きみ子
和子
公子
睦子
富久江
和歌子
久枝
三千代
智恵子
阿宣子

影絵にも映らないほど薄くなる
影法師お前も腰を曲げている
おだやかな影はやつぱり母になる
灰になったら私の影も浮くだろう
輪廻とや影がわたしをはなれない
障子の影がうまさうしに飲んでいる
蟬の影から鎌が伸びてくる
まだ妻は遠い男の影と生き
大きめの影にすっぱりいる私
悪人の悪人らしき黒い影

実満
房子
諷人
隆風
くに子
はるお
盛桜
鬼桜
(出)宣子
螢

川柳塔おとり

原みさを報

ライバルの頭がいつも先に着く
叱つても褒めても同じ子の頭
詰め過ぎた頭で記憶引き出せぬ
よく切れる頭で勇み足もある
アイディアが芽吹く頭を認め合う
顔よりは頭の良さに惚れました
頭から湯気を出してる大銀杏
内閣は頭大きく尻すばみ
両親に貰った頭愚痴言えぬ
不景気と五パーセントがまだ攻める
妻の乱兵糧攻めが効いてくる
切り込みの角度を変えて攻めてゆく
お得意の口と涙で攻め落とす
減反の攻めは終身刑かも知れぬ
元も子もつまい話にもつてかれ
健康が取柄なんでもうまく食べ
川柳が上手に出来て天うらら

和子
舍人
幸次郎
由多香
艶子
千秋
敬之介
小生
清子
風花
宏章
庸二
ゆきの
野草
孝子
伝住
道子

うまい手に乗った話で座がしらけ
窓際に干された訳が瞬に落ちぬ
熱燭を飲み干し明かす胸の内
太陽が好きで家中みんな干す
干されてるするめ波音恋しがり
ムツゴロウ干て人間もやがて干る

はたる川柳同好会

井上

直次報

ワープロの一字が違う子の年賀
ワープロが扱えますかと安定所
ワープロも英語も教材買っただけ
ワープロで打てば凡句も秀に見え
約束を破らせるには金がいる
長電話約束ごとを言い忘れ
幸せの約束手形期日なし
カッコよくした約束で悩んでる
指切りの温味を胸に夕仕度
約束に記憶のメモを繰っている
約束の場所に白旗立てておく
約束は定年までのはずでした
約束の場所間違えてドラマ生む
泣くときは泣く女女しくと言われても
土壇場になると女女しくなる男
家裁出る女女しく男振り返り
女女しいとヒンタクったが生きてる
女女しいと言われやケクソ一気飲み
女女しさを微塵も見せず判子押す
女の毒とおもつ女女しいとも思っ
女女しいと思えど犬に独り言

崇 雄々 黙光 せつ子 登美 美さを
明光 吉太郎 善守 祥風 博史 竹二 勝 見清 喜美子 昭子 和歌子 まみ子 雪子 螢柳 直次 正安 正三郎 よしろ 保子 敏子

女女しさを悟られぬよう口拭う
指示待ちが増えて女女しくなる戦後
宵山の鉾見る顔の落ちる汗
川柳塔まつえ吟社 恒松 町紅報

よつやくに靴がなじんだ二度の職
この土地の水になじんだ町あかり
転勤地やつとなじんだ町あかり
東京の水になじめずUターン
セツとした髪になじめぬ帽子
青蛙なじむと旅へ出たくなる
ひとりでも漫画のような日が暮れる
本棚の真ん中占めている漫画
漫画ありビールがあつて夏休み
餓鬼大将漫画だったら顔寄せる
漫画史に残るフクちゃん忘れぬ
永田町漫画にされる茶番劇
程々の餌で華麗に舞う金魚
にこりともせずマルサが撒いた餌
餌運ぶつばめ会話を絶やさない
餌まいて釣れた魚拓が誘い出す
餌になり今日もどこかで梯子酒
祭りという餌につられて里帰り
面と向かつてさすがに言えず後戻り
年くつてさすがの人見る目あり
無言劇さすが三日目折れてくる
年の功さすがと言われ知恵がある
フランスに開催国の意地を見る
さすがです鯨やっぱり乳のます

久子 セツ子 馬洗 茂美 登美子 登美子 早苗 雄々 邦代 久枝 登志子 友子 日出子 多賀子 静恵 太泡 きみ子 房子 米子 奏子 桂子 静江 昌枝 すみこ 草丘 蘭水

水たまり越すのに人柄匂わせる
人柄と思つ人にも裏がある
人柄が滲むひと言葉座が和む
人柄が温かい風もつてくる
人柄が良く傾く鬼瓦
盃を重ね人柄変えている

富柳会

池

森子報

今行くと言われて困るお昼時
果立つ娘に今ドラが鳴るドラが鳴る
堪えてきた月日があつて今がある
花びらの上で迷っている明日
老残の五欲の海や木の葉舟
自画像を描けばマンガになって来る
クレヨンが教えてくれた黒い海
いろいろなお茶に酔っちゃうハーブ園
陽の当たる場所で錯覚してる朱
ふき抜けることをためらう風がある
生きざまは漫画のような父でよし
優先座席でヤンゴ漫画を見て眠る
病床を癒やしてくれたのはマンガ
友が逝くまで友が逝き陽が沈む
とんちんかんあなたに合わす周波数
一コマのマンガに託している時間
今はもう極楽に行く準備だけ
趣味欄に読書と書くがマンガだけ
ストレスの解消マンガ読んでます
幸せのリズムが軋むハイヒール
ひらがなで祈りが書いてある手紙

芳枝 ひふみ 義良 咩 与根一 叮紅 三和子 冬虹 アキ 文子 勇太 靖巳 宏 和歌子 夕花 呂島久 紅紫朗 義清 方子 登子 昭子 鐘造 昭水 勇 智久 花梢 欣之

鬼あざみのつらい寝言を聞いてやる
一点を決して赦さぬ紅しようが

翠洋会

児玉

蛙報

晴美
森子

盛りつけの雑な娘に泣くお皿
手抜きした料理をうまく皿に盛る
短冊を吊るしひとつまき抱くロマン

包丁はないが皿だけ揃ってる
回る寿司お皿の数に老いを知る
皿洗うそんな仕事もう出来ず

紙皿におにぎりお茶は紙コップ
いそいそと集うしんどい事忘れ
拝領の皿は人目に触れぬまま

甲子園汗と涙とカチワリと
金時をたっぷりうちのかき氷
票集め妻が隣で泣いてくれ

皿かわき橋龍がっば沈没す
笹の葉にてんとう虫も参加する
大皿に鯛でんとある孫誕生

好きな皿だんだん数がへつて来る
九谷古伊万里使わぬ皿ばかり
皿割れる音を寢床で妻が聞く

姑に未だ打ち明けてない皿のきす
無党派票集まり動き出した山
集まりが悪いといつも待り出され

夏ばりの皿にたっぷり盛るサラダ
海遊館魚を呼び集め
あいたいがあふたりの中に天の川

当てにした受皿を消す不況風

蛙

東雲

節約をしました今日はどうどん食べ

美智子

選挙戦夏雲だけが燃えている

紫香

まだまだのおもい笑つて死のはなし
残り物愚痴をこぼさぬ母の皿
皆元気がいいに食べた皿洗う

港町旗へんぼんとかき氷
いいお皿独り暮しも五枚買う

柳川クラブわたの花

吉村

一風報

炎天の蟻よりわたしキリギリス
白無垢の花嫁自我の色を秘め
大物になった夢みるただの人

灼熱の夏が好きだという若さ
知識より友を作れと言いつか
古傷の話を妻は小出しする

出世するはずだ大きい鼻だから
大きいのは地声と言つて無理とおす
どうしても声の大きい方を向く

大きい方を取る癖がまだ直らない
孫が来る度に大きくなる背丈
大げさに読者を煽る週刊誌

大きいなあジンベイ鮫とにらめっこ
老いてまだ頼りにされて嬉しそう
愛のある介護に潜むうらおもて

反抗心この一票にぶつける
反抗期けんかした娘も二児の母
昼寝する話し相手のない金魚

好きなのはでかい橋より丸木橋
星空に吸われてみたい熱帯夜
フルムーン二人三脚弾む

美智子

八寿子

保育器のわが子を覗く若いママ
霧開きが肌になじまず転職す
朝顔が目覚し時計早起きす

朝顔の爛で酔わせる喉ぼとけ
夏祭り亡母の形見の肌ざわり
肌寒く聞いた地球の温暖化

すぐキレる少年の罪肌寒い
ことわりの電話大汗かいている
覗いても疵には触れぬ夏木立

お守りを肌身はなさず試験場
もつれ糸母がほどいた愛の汗
子供部屋覗けば斬もれてくる

腹立てた辞表不況の筆に乗る
汗拭きふきまだ続いている立ち話
夫婦肌ちぐはぐ生きて仲がよい

選挙戦夏雲だけが燃えている

美智子

八寿子

保育器のわが子を覗く若いママ
霧開きが肌になじまず転職す
朝顔が目覚し時計早起きす

朝顔の爛で酔わせる喉ぼとけ
夏祭り亡母の形見の肌ざわり
肌寒く聞いた地球の温暖化

すぐキレる少年の罪肌寒い
ことわりの電話大汗かいている
覗いても疵には触れぬ夏木立

お守りを肌身はなさず試験場
もつれ糸母がほどいた愛の汗
子供部屋覗けば斬もれてくる

腹立てた辞表不況の筆に乗る
汗拭きふきまだ続いている立ち話
夫婦肌ちぐはぐ生きて仲がよい

選挙戦夏雲だけが燃えている

美智子

八寿子

保育器のわが子を覗く若いママ
霧開きが肌になじまず転職す
朝顔が目覚し時計早起きす

朝顔の爛で酔わせる喉ぼとけ
夏祭り亡母の形見の肌ざわり
肌寒く聞いた地球の温暖化

すぐキレる少年の罪肌寒い
ことわりの電話大汗かいている
覗いても疵には触れぬ夏木立

お守りを肌身はなさず試験場
もつれ糸母がほどいた愛の汗
子供部屋覗けば斬もれてくる

腹立てた辞表不況の筆に乗る
汗拭きふきまだ続いている立ち話
夫婦肌ちぐはぐ生きて仲がよい

さと美
志華子
綾子
周信
絹子

あれ以来大きいことが言えません
すこやかな妻の寝息か旅の宿
来る度に大きくなって孫の靴
大きいのが小も叶える器です
若いのが乗り回してリンカーン
十字架を背負う覚悟で渡る橋
思いっきり大愚の国よしあわせか
核を持つ大愚の国よしあわせか

朝子
一道
ますみ
トシエ
まさと
祐子
明子
鬼遊

いつふみ
春江
知佐子
美代子
民子
明

分別を厳しく覗くゴミ袋
亡夫の写真肌身離さず身の守り
少年のこころを覗く恐ろしさ
保育器のわが子を覗く若いママ
霧開きが肌になじまず転職す
朝顔が目覚し時計早起きす

富世
江美
一閑
鹿太
モトコ
まさ

剛治
ミツ子
道子
江君
春子
一風
幸枝
隆盛
寿代
信子
司

朝顔が目覚し時計早起きす
人肌の爛で酔わせる喉ぼとけ
夏祭り亡母の形見の肌ざわり
肌寒く聞いた地球の温暖化
すぐキレる少年の罪肌寒い
ことわりの電話大汗かいている
覗いても疵には触れぬ夏木立

澄子
昌子
すみ
勇次郎
正治
まさ
満寿蔵

友甫
逸子
美智子

お守りを肌身はなさず試験場
もつれ糸母がほどいた愛の汗
子供部屋覗けば斬もれてくる
腹立てた辞表不況の筆に乗る
汗拭きふきまだ続いている立ち話
夫婦肌ちぐはぐ生きて仲がよい

六浦
向西
弘治
夢之助
十四郎
紫香

友甫
逸子
美智子

お守りを肌身はなさず試験場
もつれ糸母がほどいた愛の汗
子供部屋覗けば斬もれてくる
腹立てた辞表不況の筆に乗る
汗拭きふきまだ続いている立ち話
夫婦肌ちぐはぐ生きて仲がよい

六浦
向西
弘治
夢之助
十四郎
紫香

友甫
逸子
美智子

お守りを肌身はなさず試験場
もつれ糸母がほどいた愛の汗
子供部屋覗けば斬もれてくる
腹立てた辞表不況の筆に乗る
汗拭きふきまだ続いている立ち話
夫婦肌ちぐはぐ生きて仲がよい

六浦
向西
弘治
夢之助
十四郎
紫香

友甫
逸子
美智子

お守りを肌身はなさず試験場
もつれ糸母がほどいた愛の汗
子供部屋覗けば斬もれてくる
腹立てた辞表不況の筆に乗る
汗拭きふきまだ続いている立ち話
夫婦肌ちぐはぐ生きて仲がよい

六浦
向西
弘治
夢之助
十四郎
紫香

友甫
逸子
美智子

お守りを肌身はなさず試験場
もつれ糸母がほどいた愛の汗
子供部屋覗けば斬もれてくる
腹立てた辞表不況の筆に乗る
汗拭きふきまだ続いている立ち話
夫婦肌ちぐはぐ生きて仲がよい

六浦
向西
弘治
夢之助
十四郎
紫香

友甫
逸子
美智子

お守りを肌身はなさず試験場
もつれ糸母がほどいた愛の汗
子供部屋覗けば斬もれてくる
腹立てた辞表不況の筆に乗る
汗拭きふきまだ続いている立ち話
夫婦肌ちぐはぐ生きて仲がよい

六浦
向西
弘治
夢之助
十四郎
紫香

友甫
逸子
美智子

お守りを肌身はなさず試験場
もつれ糸母がほどいた愛の汗
子供部屋覗けば斬もれてくる
腹立てた辞表不況の筆に乗る
汗拭きふきまだ続いている立ち話
夫婦肌ちぐはぐ生きて仲がよい

六浦
向西
弘治
夢之助
十四郎
紫香

覗いたら覗くなバカと書いてある 柳宏子
 はびきの市民川柳会 安芸田泰子報

ペランダにストレスを十す椅子がある 絢子
 抱き合った首脳同士の腹の中 聡
 飲む程にうちとけてくる両隣 昭平
 旅の宿社長で通した二日間 俊男
 母さんによく似た人に叱られた 末一
 句の味調子狂ったエルニーニョ 昇
 父の日に割引券を置いて行き 美喜
 五十年ぶり生きてて良かった同窓会 敏
 小錦が髭を落してコマージュル 一壺
 酸欠の街に情けが落ちている 志洋
 幸せな出会い拾った独り旅 辰子
 あの一円拾っておけば足りたのに 信子
 各駅の電車で拾う季節感 敦子
 ころぶたび拾った知恵で生きのびる りつえ
 愛ひとつ叶えてもらって拾い癖 敦吉
 あったかい言葉大きな夢拾う 庸佑
 ペンネームいくつも持って趣味多彩 たくし
 びつたりのニックネームに出る笑い 洞庵
 父の名は太目に書いた遺言書 かつみ
 引退後引く手あまたのネームバリュ みつこ
 道草が好き私のペンネーム 晋
 作品が泣き出しそうペンネーム 元紀
 ネームにはこだわってない月見草 四三郎
 美人ナースの名前は直ぐに覚えられ 吐来
 出来るのが一番後に従って行く 重人
 悪いのは私でしたとお茶を淹れ

悪ぶって愛を求めているのかも 泰子
 休日は空缶拾いちよっと見栄 和歌子

横浜あおば川柳会 菱田 満秋報

あれそれで歯車まわる老い二人 笑子
 稲光り父の権威も脱ぎ捨てる 充子
 歯車の軋みに母の潤滑油 広和
 新しい生命を待っている産着 良子
 駅前の明かりにリングよく光り 雅子
 どの道も訪ねるほどに奥深い 絹子
 深読みをされて作者が困ってる 亜希子
 思い出が眠り続けるグムの底 和可
 新しい入歯でいまだレミアアのド 見早子
 山道のこぼれ陽浴びて深呼吸 八重子
 助手席に乗ると指図がしたくなる 街湖
 奥歯から軋がり出したうそ一つ 道子
 いじわるが乗せてくれぬ縄電車 徳三
 懐の深さに惹かれ共白髪 数の子
 乗り越しの駅に見た夢置いてくる 鈴美
 子沢山母が入れ歯を自慢する 歌子
 歯をむいて怒れば犬と変らない かつ子
 なけなしの歯を丹念に磨いている 嘉信
 風に乗る尾ひれをつけて飛ぶ噂 羊子
 総入歯はめて鬨う貌となり 句多留
 深酒がさめて気づいた途中下車 早智
 太陽に向かって白い歯が笑う 純子
 深々と下げた頭が嘘を言い 政勝
 新調のスーツが出会う五月病 サト子
 深爪に神経質な人と見る

命懸けケンジとヘイケ間に舞う ふうみ
 横槍に最終案が乗り上げる 潮華
 一円を投げ透明度たしかめる 満秋

川柳高知 川竹 松風報

改装をした食堂の味が落ち 圭風
 食堂も四季を知らせる花を活け 功
 お袋の味で食堂よく流行り 菊野
 レース編み女に早い季がめぐる 有佳
 婆ちゃんにただ脱帽という粗食 子龍
 飽食の果てのカルテが狼狽える 朱坊
 飲み慣れた里の泉を汲み帰る 竹萌
 遠足は雨弁当が泣いている 六峰
 家で食う雨天中止のにぎりめし 佳風
 生き甲斐のように弁当作る母 美々
 母さんの弁当だけは忘れぬ 和江
 お願いの声届かない流れ星 千恵子
 願ってもない縁談に娘が乗らぬ 幸
 願わくは目覚めぬ朝で終りたい 快風
 極楽のポストへ願書入れておく 孝雄
 一生のお願い何度聞かされる 松風

倉吉川柳会 松本よしえ報

裸婦像の前がますます混んで来た 雄々
 眉ひとつ動かぬ人を信じ切る 艶子
 震度七微動だにせぬ父の眉 節子
 減入る雨蛙ますますわめき立て 康志
 目が合ってから幻抱いている 美ツ千
 昭和から平成夢か幻か 螢

明け方の夢幻の夫と会う
 城跡の昔幻がよみがえる
 関心がますます深くなる隣
 幻か千羽の鶴がとびたつた
 選ぶ間もなしに嫁いだ戦時中
 勝ちに行く朝は太目の眉を引く
 父の樹をますます揺する低金利
 まむし酒をますます姑だけに効く
 逢いに行く土産のメロン選っている
 天国へ選ばれぬようひっそりと
 おばさんがますます若い色を着る
 石頭には幻は現れぬ
 お茶替えてますます話長くなる
 褒められて僕はますます調子づく
 幻の人をえがいて夢を見る
 公約も幻となる戦争あと
 幻の秘薬と聞くが効果ない
 幻と言わせない戻し税
 幻を見てしまったと理解する
 幻灯機夫の形見と捨てられず

南大阪川柳会

吉川

寿美報

ちよ子
 よしえ
 睦子
 御前
 和枝
 康子
 園喜美子
 ゆり子
 完司
 秋草
 石花菜
 かつみ
 季芳
 民枝
 賀寿恵
 次男
 智子
 玲坊
 仙紀美子
 楓楽

ちぎれそつなボタンと疲れた夜の道
 納豆を食べて疲れを取るといふ
 窓際に疲れた鬼がまだいてる
 ああしんどやつと阪神勝ちました
 白足袋の疲れはずしているこはぜ
 みんな疲れて夕焼けに浸る
 真っ白い紙に包んだ子の未来
 まだ欲を包む風呂敷持っている
 新聞で包むと弁当うまくなる
 義理と見栄悩んでいますます熨斗袋
 人間を丸ごと包む人と居る
 包み方上手で中味生きてくる
 湯けむりに包まれ美女に見える妻
 のし袋きもちしつかり包みこみ
 あともどり出来ぬ貫くはかはない
 失楽園恋貫いたなれの果て
 父さんが貫き通した愛一つ
 縦に首振らせる金をそつと積む
 もう積む荷ありませんよという不況
 丸い背は母の歴史の積み重ね
 生きている証に欲を山と積む
 エネルギー使い果して終い風呂
 見せ金を積み上げ売り値たたかれる

川柳やがわ

江口

度報

萬的
 東雲
 章久
 直子
 秋子
 アキラ
 寿美
 千里
 重人
 柳宏子
 たもつ
 凡子
 賢子
 千梢
 頂留子
 柳伸
 咲
 庸佑
 慶一
 正博
 志華子
 久峰
 三郎
 一途
 ルイ子
 かすみ

芽の出ない靴をはげますいわし雲
 グループの中で泳いでいる天狗
 井戸端のグループ抜けるのが怖い
 素晴らしいタクトグループよく揃う
 秘書室の灰皿が知る杜の浮沈
 生き抜いた戦後の証アルミ皿
 人生にも欲しいと思う薬味皿
 紙の色女にもちよつと味方する
 恋の皿バナナ映すガラス皿
 絵の具皿得心行かぬ海の青
 合鍵をもらい口笛出そうになる
 すぐあける鍵をおんなはしめたがる
 鍵穴がまともに合わぬ午前様
 鍵ばかり増やして寒い城に住む
 鍵かけて自分の顔をとり返す
 部屋に鍵かけて少年病んでいる
 足腰が弱り脳にも来てるよう
 再生紙トイレに命尽き果てる
 ぬるま湯に堪忍袋が浮いている
 貸金庫ちよいちよい行つて覚えられ
 年一度あついロマンの天の川
 ジンベエ鮫終身刑の狭い海
 冷房のある図書館で昼寝する
 義理人情団扇の風があるかぎり
 鍵握る男が座る薄笑い

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

一風
 冬葉
 仁清
 時弘
 波留吉
 弘一
 洋
 恵子
 とし子
 庸佑
 吉之助
 朝子
 博泉
 光子
 たもつ
 小路
 高栄
 英壬子
 あやめ
 日出子
 一笑
 順三
 淳朗
 度磔
 龍人

軽い一票されど一票入れに行く
夕暮れとほとばははに逢いに行く
大正の男のんびりなど知らず
万物の命を軽くするヒト科
お喋りが静かになった夏みかん
じつくりと耐えて熟女の夏みかん
野に降りて屈託もない太公望
とほとばと泪こらえて貝になる
いつの世ものんびりできぬ蟻である
還曆に子から二枚の旅行券
迎えが来たら杖を頼りに行くだろう
一銭五厘鴻毛の身は軽すぎる
それとなく妊娠と知る夏みかん
のんびりとさせてくれない船とムチ
木枯しが吹いて猫背が直らない
たんぼぼの羽根にも意地がある飛翔

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

隼人 北歩 凡々子 井蛙 ツネ 花匠 銀波 慕情 愁女 順風 しげる 一花 五楽庵

ネクタイを外すと落ちる目の鱗
荒武者が落城を見て腹さばく
金髪が浴衣にうちわスニーカー
特急に抜かれる駅で深呼吸
染み雀登らせてあげます別れます
老夫婦登の茶漬をすする音
パイプルを持つ女には近よらぬ

岬川柳会

八十田洞庵報

諷云児 一 笛 登代子 求芽 和歌子 明光 落児 倅子 年子 里子 幸子 孝子 信博 龍弘 和美 とみ ユミエ 正美 ミチエ ヤエ 令子 庄六 鉄男 朋子 悦子 昌夫

石頭白を黒いと押し通す
色褪せた押し花に過去よみがえる
話し合い押ししのきく人つれて行く
売る方がお手頃というゼロの数
候補者にカリスマ無いと批判する
正論は裸になって押し通す
お経あげ心安らぐ歳となり
負けました押しの一手にほだされて
背を押しやっど決断隊に行き
三文印押し保証の怖さ知り
保証印軽く押ししても来る重さ
頼みごと忘れないでと念を押す
ほけた母数え歌を十までも
喧嘩したあとに好きかと念を押す
千代大海押しして勝越す大相撲
押しどころつばをはずした討議する
どこをどう押ししたら景気良くなるの
孫の数みやげ揃える古都の旅
退職後中元ぐんと数が減る
何もかもみだてもオオペもアメリカで

みやこ 辰郎 洞庵 敦子 三郎 正一 二南 花梢 昌子 志洋 悦子 和樹 網歌 登八 昭子 治子 トミ子 史郎 美房 六郎 恒雄 婦美枝 宗一 和子

川柳藤井寺

高田美代子報

満潮に押され揉まれた鯛の味
京都弁ちつとも押しが利きまへん
同情で押ししたハンコに背かれる
呼び鈴へせて女の髪を撫で

親切を素直に受けてふと思つ
物忘れ一から勉強しています
嘘です枕を濡らした悪い夢
雑巾が濡れて平和な明け暮れで
濡れてからやっど見付けた雨宿り
追伸の母の言葉が濡れている
相合傘気づかう肩が少し濡れ
一徹な父の目濡らす角隠し
濡れ衣を着せても許す母といふ
胸の内喋るとコーヒーが旨い
あじさいのお喋りを聞く梅雨晴れ間
喋られて困る尻尾を握られる
しゃべくりが上手サラサ生きている
洗い浚い喋ってからのむなさきよ
デイナーショーフランスポンがよくなる
毎朝のお喋り線香消えるまで
論点をすりかえられて言い負ける
K点を越えて男は鳥となる
句説点それから話纏れだし
政治家の接点国を歪めてる
点になるまで見送っている未練
点字読むあの神経の敏感さ
点になるまで見送る最後かも知れぬ

点滴の一滴一滴にあるのぞみ
欠点がえくぼに見えた頃もある
欠点の多い私で好かれてる
点になった小さな亡母が胸に棲む
頂点に立ち底辺の声聞こえるか
パントマイムを忘れて喋りそうになり

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

遺言状真ん中にして無言なり
家計簿の真ん中西瓜大と書く
真ん中を走って西と落ちてける
真ん中に座って皆を盛り立てる
巻き寿司は真ん中よりも端がよし
幸せの真ん中辺にある悩み
真ん中をくぐる茅の輪の夏祭
減反をかこつあんパン食べながら
パンを焼く幸せそんな妻の顔
ピフテキと仲良しのパン耳がある
コッペパン戦後はうまいパンでした
パンのみで生きるにあらず聖書読む
暮に夢中アンパンだけですませてる
浮き上がたくて六法練つていた
水泳教室私も浮いてくれました
浮き沈み通天閣に灯が点る
初当選菌の浮くような世辞も聞く
軽石が沈みこの世の嘘が浮く
浮いている心を運ぶ終電車
雑踏の波に孤独が浮きあがる
根回しがかなり効いてる決まり方

春蘭 春蘭
かつみ かつみ
アキ アキ
扶美代 扶美代
修六 修六
美代子 美代子
義子 義子
能子 能子
江美 江美
春蘭 春蘭
正とし 正とし
義芳 義芳
貴代子 貴代子
正坊 正坊
文 文
トミエ トミエ
比る志 比る志
松煙 松煙
武庫坊 武庫坊
とみ子 とみ子
周信 周信
萬的 萬的
鹿太 鹿太
涼子 涼子
颯云児 颯云児

灯あかあかかなりもめてる会議室
かなり昔の火傷を妻が忘れない
CTスキヤンかなり疲れている脳だ
決断にかなり迷った跡がある
背伸びしてかなり苦勞をしてるらし
もつすこし夫婦でいたいアッパツパツ
足並が揃い不安がふとよぎる
人生のしみ込んだ部屋持てぬ父
だんだんと母に傾く父の椅子

堺川柳会

河内

月子報

住み慣れてルノの顔に目もくれず
夫との会話このごろずれてゆく
バイキングのあと吉兆へ連れてゆく
天真らんまん男を食べている女
土の菌もダイオキシンの食当り
このごろは大丈夫かと足に聞き
つまみ食いおかしくなった胃のリズム
マイセンの皿に盛られた水なすび
老眼鏡だけでこのごろ字が読めぬ
何かある夫この頃弾んでる
丸すいか井戸から上げた日を思う
腹の虫食べてしまった貯金箱
好き勝手ルール違反が目に残り
このごろは早寝早起きしています
もろきゅうを一品足して大ジョッキ
よく文句言うなあこの頃のわたし
もいで来たトマト真っ赤だよい朝だ
すんでのことルックスだけに目がくらみ

佳秋 佳秋
たず子 たず子
みつ子 みつ子
房子 房子
富喜子 富喜子
しげお しげお
澄子 澄子
信子 信子
透太 透太
春蘭 春蘭
二二三 二二三
哲平 哲平
勇太 勇太
健吾 健吾
日の出 日の出
春 春
舞夢 舞夢
伽羅 伽羅
磯子 磯子
紀美女 紀美女
冬虹 冬虹
梓 梓
半銭 半銭
満州 満州
かりん かりん
五月 五月
千代 千代

売れるまでスイカぼんぼん叩かれる
すり切れて流転の果ての免罪符
少子化ですこし淋しい地蔵盆
日本を叱っています唐辛子
この頃の雨は心に降りしきる
茄子の花裏切ったこと数多ある
素晴らしたルールの踊り目を奪う
スーと来てルール無視する迷惑車
恙なく食べて吐息のでる平和
釘の錆効いたカナナビ彩がいい
夏野菜で伏した悲劇の鳥がある
このごろの野菜季節とかくれんぼ

川柳塔打吹

米田

幸子報

塾通いだあれも空を見ていない
晩酌を飲んでぼちぼち投票へ
血統を調べ敬遠すると決め
煩惱の空念仏に鐘が鳴る
空と海合わせのみこむ大あくび
この願いかなえてくさな鱈さま
願かけて願いかなえば酒やめる
好き嫌い好まぬ白梨の花
憧れて独り暮しの夢かなう
ぼちぼちとワープロ打ってばけ防止
この辺でぼちぼち詰めの駒を打つ
寄付の金かなう程度に出しておく
かなうなら一寸あの世が覗きたい
目にかなう夜の金魚の宙返り
ぼちぼちと言ってそれから長い腰

昭子 昭子
美代子 美代子
りつえ りつえ
みつこ みつこ
扶美代 扶美代
泰子 泰子
洞庵 洞庵
頂留子 頂留子
アキ アキ
東雲 東雲
金三郎 金三郎
つづや つづや
完司 完司
石花菜 石花菜
かつみ かつみ
螢 螢
順子 順子
しろう しろう
一夫 一夫
和歌子 和歌子
逸子 逸子
禎元 禎元
博丈 博丈
季芳 季芳
よしえ よしえ
勝見 勝見
たけの たけの

物言わぬ敬遠らしい懐手

ルンルンでかなった二人ハイベビー

羽ばたきがかなわぬ終身刑の鳥

ぼちぼちと身体あちこちがたがくる

世の習いぼちぼちですとうまく逃げ

敬遠をされた僕にも月優し

ぼちぼちと嫁のメツキが剥けてきた

空々し他人ぶって深い仲

夢かないでんでん虫は雲の上

鼻先のサラブレッドをよけて行く

天下り敬遠企業鬼になり

敬遠を知らんふりして天下る

大虎が敬遠されて一人飲む

敬遠したはずの病と仲が良い

子供から敬遠される親になる

尼崎いくしま川柳会

春城 年代報

スラングが続き基金会替えてみる

スラングにへこたれません汗を拭く

スラングと妻が財布を振っている

寝酒一ぱいスラングを連れて行く

スラングに押しつぶされて胡瓜もみ

スラングが内野の頭こえて行く

スラングの脳で一日空を見る

真夏日の午後はスラング抱いている

虎の尾を踏んでスラング跳び超える

老母病み虫の知らせか動悸打つ

蝶一羽花屋の花と知らず舞う

虫の音に酔えない苦勞抱いている

玲子

セツ子

和枝

玲泉

富枝

芳光

雄々

孝恵

一京

克枝

小生

康子

猿沓

節子

幸子

人間も蟻も走っている真昼

今日一日出ばなをくじく走り雨

円安で下降景気がつつ走る

いつも小走りに消える幸運のかけら

ロボットが先頭走る時がくる

どうしても答えが出ない診断書

寝ころんで一人居すこす雨雨雨

本を読むビーンツあればなお楽し

傷つたのはわたくしなのに風つたら

誰のぼたんかばつんとひとつ青畳

アスパラガス北海道に梅雨はない

梅雨空の合歡の花咲く北摂の山

喜寿が来て分った顔して聞きながす

ずしり来る保険税金業代

美談には恐い秘密も有るのです

子離れた母は寂しく米を研ぐ

雑音を入れて反応確かめる

日の丸を立てる律義なおじいさん

かわはら川柳会

上田 俊路報

仕事終え川に入って暑さよけ

暑い夏冷房病で厚着する

猛暑にも耐えた背中が痩せてくる

節くれの指が貧農物語る

恋すれと指輪の光じやまをする

指切りの手が生き方をかえてくれ

逃げようとしている気持指摘され

嫁の話指の先からこぼれ落ち

わが手さえ指の表と裏がある

十四郎

愛

久子

薫

富美子

武庫坊

千恵

ヤス子

澄子

光穂

紫香

正子

吉太郎

富世

和歌子

夢之助

白浜子

芳子

道子

ふじ子

泰良

寿子

静子

悦子

聴

茂登子

秀子

不器用な指でハートがつかめない

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

いちにちを咲ききる命うらおもて

膝までも埋もった泥田から生まれ

景気よく喋りしよほんとして帰る

掌を合わす神が刻んだ茜雲

原っぱの落とし穴には気が付かず

隣り家をのぞきし手がなるつゆの花

叱られること下手になり直ぐキレる

眉上げて振り向きもせぬ門出の子

咲けば散る神の摂理のままだろう

ポンポンタリや咲き梅雨のウツ和む

フアッションを鏡で冒険したくなる

皿を回す老人だけの遊び場で

背もたれの存在感を知るひとり

アイデアが浮かんだ時は要注意

また一つ肩の荷ははずす旅なかば

友だちとこころの沖に灯を点す

うっかりと乗り遅れた火星行き

子の縁で身近になった奈良京都

砂山に靴をとられてばかりいる

俊路

八重子

日枝子

玲子

ゆき

寿々子

天雀

花子

田鶴

晶子

千代

文葉

てい子

春枝

瑞枝

恵子

正子

荒介

大阪川柳の会

とき 10月2日(金)17時開場

ところ 〓サソケイビル本館3階322号室

題と選者 〓抱く・中山おさむ△ニュース・赤井花城△シヨック・西出楓楽△きつと・磯野いさむ

各題 2句 席題なし 会費800円

18時締切

柳界展望

整髪が立派で海へ入れない
 増田 紗弓
 ★「川柳研究」583号の
 渡邊蓮夫代表追悼号に「渡
 邊蓮夫さんを偲ぶ」と題し
 た薫風主幹の悼文を掲載。

★NHK学園発行「川柳春
 秋」(季刊)が7月1日、第
 50号を刊行した。同号には
 薫風主幹が「創刊50号に寄
 せて」たのしい川柳に挑戦
 を」を寄稿、また、同人の
 春城武庫坊氏の「めおと川
 柳」残照の中」と川上富湖
 さんの「一人50句」が掲載
 されている。

★第53回尼崎市文芸祭川柳
 部門に同人三氏が入賞した。

〈第一席〉

母の手はいつも濡れてた
 割烹着 永田 俊子

〈第二席〉

けつまずくたびにメッキが
 剥けてくる 川島諷云児

〈第四席〉

二人三脚紐はゆるめにし
 ておこつ 奥山美智子

★NHK学園第七回根上川
 柳大会は7月12日、石川県
 根上町総合文化会館で開か
 れ、特選に本社同人の川上
 富湖さん、増田紗弓さんが
 選ばれ、紗弓さんは根上町
 長賞を受賞した。
 楽しくて暫し時計を眠ら
 せる 川上 富湖

8月1日、堺市総合福祉会
 館で開かれた。本社同人の
 各題秀句つぎのとおり

虹の立つあたりいきつと
 いる詩人 榎原 公子
 魂は売らぬ男の固い椅子
 海老池 洋

笑い声で兎小屋が揺れて
 いる 八十田洞庵

出る 嵯峨根保子

期待しているからアメは
 与えない 西出 楓楽

狙われているのか空咳が
 続く 政岡日枝子

相手よりでかい味方を連
 れてくる 黒川 紫香

▽人事往来△

■7月12日、NHK学園根
 上川柳大会に薫風主幹は事
 前投句「幕」の選者として
 石川県行き。

■天笑理事長夫妻は7月18
 日川柳会梨花、7月19日大
 砂丘大会のため鳥取県行き。

▽同人消息△

■川内叭笑氏は6月10日か
 ら一週間、日伯民謡使節団
 としてサンパウロとアレジ
 デンテ・ブルデンテ市へ行
 き、日本人が開拓した牧場
 群などに、苦労の歴史と古
 き良き時代の日本が残って
 いるのに感銘を受けた。

■芳地狸村氏は岸和田市展
 の俳画部門に「龍壁」を出
 品、市長賞に選ばれて11月
 3日に表彰される。

新同人紹介

神保坊 太郎
 楓楽・あきら・吟笑推薦

富山 檳榔樹
 薫風・螢推薦

■川内叭笑氏は6月10日か
 ら一週間、日伯民謡使節団
 としてサンパウロとアレジ
 デンテ・ブルデンテ市へ行
 き、日本人が開拓した牧場
 群などに、苦労の歴史と古
 き良き時代の日本が残って
 いるのに感銘を受けた。

■8月号P26(川柳塔)
 上段17行目「終焉は花咲く
 ころと決めている」は本人
 の申し出により削除。

▼訂正とお詫び▲

■8月号P118(柳界
 展望)上段7行目満中きく
 子↓満仲きく子

▼訃報▲

■児島与呂志氏(参与・川
 柳岩出会長・和歌山県)は
 7月11日、病気のため死去。
 13日、プライベートホール岩出
 の告別式には同人・会員多
 数が見送った。77歳

▼おこわり▲

■7月号P61(水煙抄)
 下段22行目「前向きになる
 と握手がしたくなる」は本

数が見送った。77歳

9 月 各 地 句 会 案 内

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	4日(金)午後1時から 風・送る・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	5日(土)午後1時から 夢・すっきり・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川柳塔 わかやま	6日(日)午後1時から 隙・地 凶・投げる	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
ほたる 川柳 同好会	8日(火)午後1時から 試す・引く・緩い	豊中市立堂池公民館 阪急・モノレール堂池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市堂池中町3-10-28 井上直次
堺川柳会	10日(木)午後1時から 迫る・冗談(共選)・もなか(折句)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
八尾市民 川柳会	10日(木)午後6時から いっぱい・比べる・手紙・躰	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 まつえ	12日(土)午後1時半から 長寿・父・秋	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から テープ止める・遙か・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
高槻川柳 サークル 卵の花	17日(木) 正午から 丁寧・珍しい・じっくり・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
岸和田 川柳会	19日(土)午後1時半から 冷却・老練・わざと・あげあし	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒569-0827 岸和田市上松町610-85 芳地裡村
川柳 ねやがわ	20日(日) 正午から 関心・記憶・楽観・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時から 魔法・はかない・恨む・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南大阪 川柳会	23日(水)午後6時から 内縁・中身・訛り・難解	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
京都 塔の会	25日(金)午後1時から 技・うろたえる・正味	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
東大阪市 川柳 同好会	26日(土)午後6時から 食べる・想う・介護・土	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市川 民会	27日(日)午後1時から 利口・オーバー・「愛」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★九月十五日は敬老の日と
いうことで、敬老〇〇の活
字が目につく。

★一九七〇年、万国博が大
阪府吹田市の千里丘陵で開
催された。千里ニュータウ
ンはその頃脚光を浴びたと
記憶している。それから二
十八年、今は老人の多い街
になったと聞く。

★私ごとで恐縮だが、我が
家もその頃、マンションに
移り住んだ。子供の小学校
中学校の入学の時期に合わ
せて、入居した人が多かつ
た。だから、三十歳代、四
十歳代の夫婦に子供たち。
庭ではキャッチボールや、
縄跳びをする親子、また、
たどたどしいバイエルの曲
や、子供の声が聞こえ活気
に溢れていた。

あるが、ほとんどの人がそ
のまま、住み続けている。
今や、夏休みになっても子
供の声もあまり聞こえず、
静かなものである。静かと
いうより沈滞している感じ。

★子供たちはみな巣立って
あとは、年金生活者たちが
ひっそりと自分々々の暮ら
しを楽しんでいるというこ
ろか。三十年近い付き合い
に気心も知れ、安心して
暮らしてはいるのだが…。

★敬老も結構だが、自分が
年金生活者になって、本当
に敬われる老人なのだろう
かと反省することばかり。
確実に、体力も知力も落ち
ている。体力の中でも、平
衡感覚は二十歳代の20%と
か。だから自転車に乗って
いても危いと感じることが
多くなるわけ。体力だけで
なく、物の考え方、判断力
の平衡感覚は鈍っていない
のだろうか。

(み)

ひとこと

賞状のない賞

その電話を頂いたのは正月。K
さんからである。御主人の会社
倒産し月給もボーナスも未払い。
顔を合わすと愚痴から夫婦喧嘩、
揚句は生きる死ぬの話にまでなる
つらい毎日。そんな時に私の賀状
の川柳を見て、こんな時こそ一心
同体で明日へ向かい希望を持って
生きてゆこう。その気持を忘れな
い為に賀状を目につく所に飾って
います。本当にありがと〜と。
川柳ってなんと素晴らしいのだ
ろう。私のつたない句が友に勇氣
を与えた。賞には無縁でコツコツ
川柳を作っている私に、Kさんか
ら賞状こそないが、こんなに大き
な賞を頂くことが出来た。

川柳万歳/Kさんありがと〜！
賀状の句
明日への夢は夫婦で丸く書く
(川崎ひかり)

▼大阪という土地は、灘と
伏見の酒どころに挟まれて
いる。灘は男酒、伏見は女
酒といわれるが、これは灘
には「宮水」があり、伏見
はかつて「伏水」と書いた
ほど水の豊富な地域である。
なにとなくさんあるとは、驚
きであった。以下その銘柄。
▼「秋鹿」能勢町、「呉春」
池田市、「國乃長」
「緑」池田市、「片野桜」
高槻市、「清鶴」交野市、「
利休梅」交野市、「長龍」
八尾市、「近つ飛鳥」羽曳
野市、「天野酒」河内長野
市、「三輪福」「元朝」「豊
稔」岸和田市、「秀長」貝
塚市、「一等國」熊取町、
「都娘」泉佐野市、「浪花
正宗」阪南市。
▼私が飲んだのは、「秋鹿」
「呉春」「長龍」「三輪福」
「元朝」「豊稔」「一等國」
の七銘柄。今は三輪福の純
米酒か、純米ではないが原
酒を愛飲している。文字通
りの地酒である。(金)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「 発表（11月号）

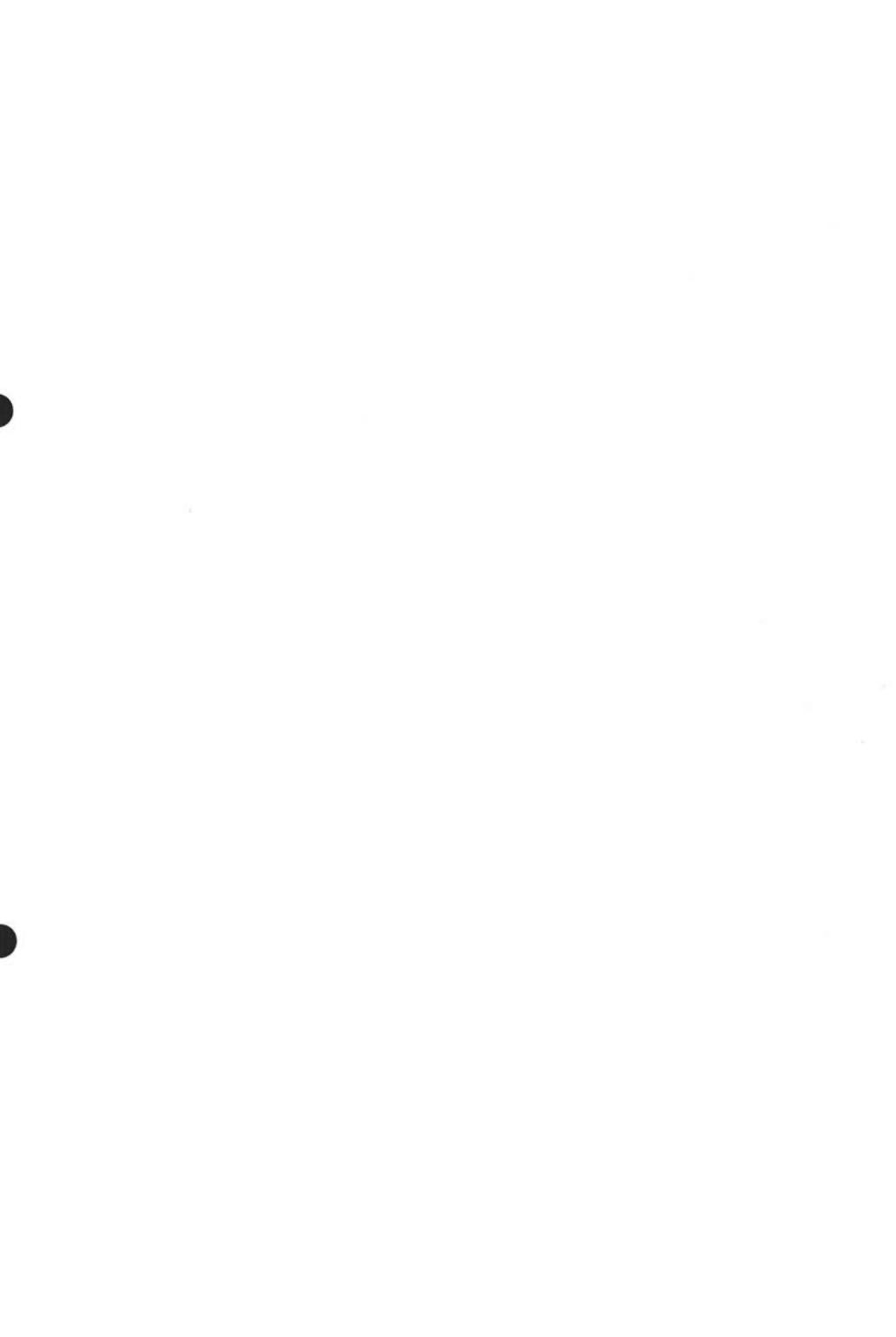
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



第四回川柳塔まつり

きりとりせん

〔平成10年10月7日(水)〕

ホテル・アウィーナ大阪

NO.	

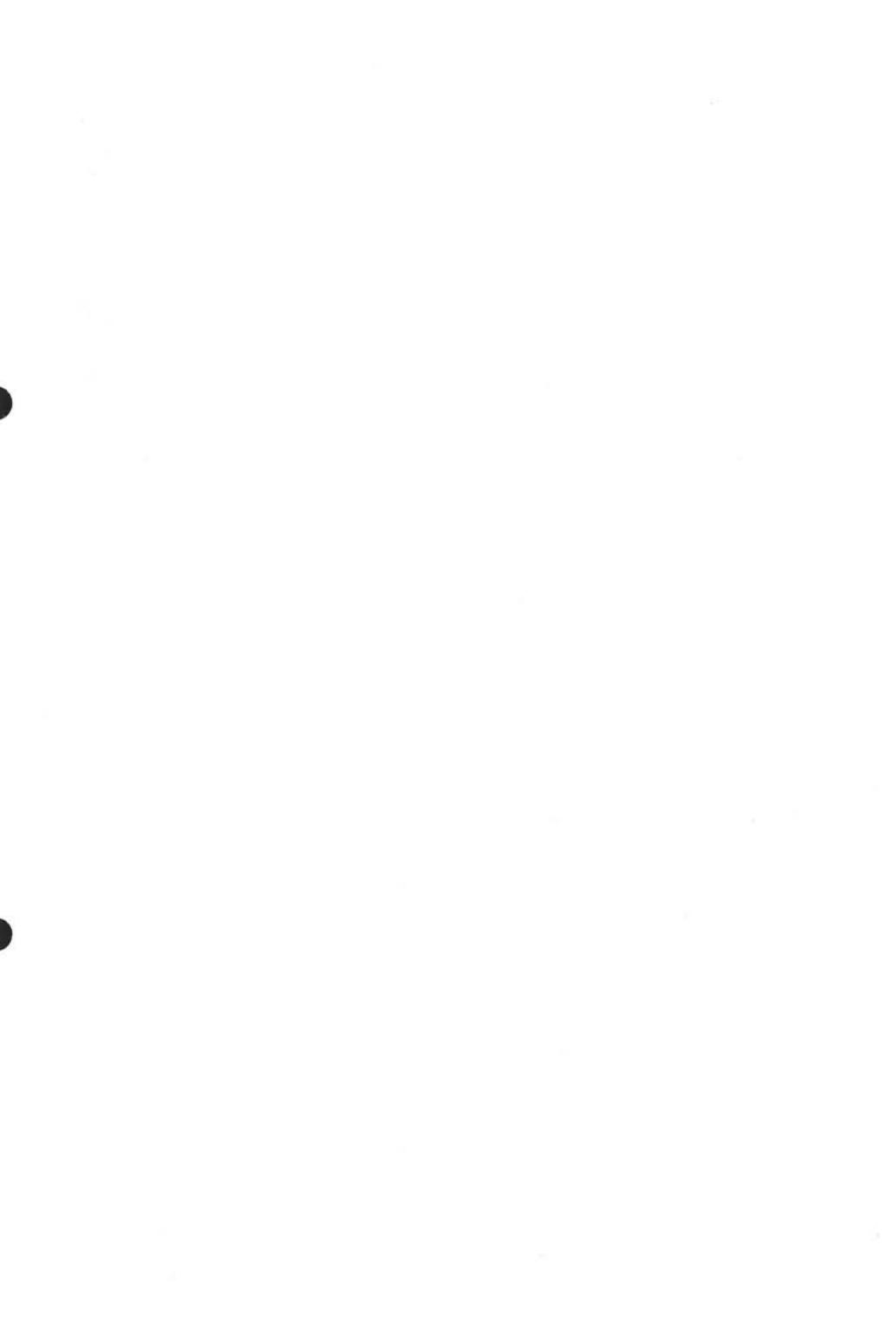
事前投句「進む」

橘高薫風選

(9月10日締切 出席者に限る)

懇親宴 8,000円 会席料理 不参加 参加	NO.	
	〒	
宿 泊 ホテル アウィーナ大阪 シングル 朝食付 8,000円 当日泊 前日泊	姓 <small>ふりがな</small> 雅号	住所
	TEL	
◎句会費は当日いただきます。 懇親宴・宿泊の代金のみ同封の 払込用紙で御送金ください。		

申込締切 9月10日



作品募集

11月号発表（9月15日締切）

川柳塔（8句）	橋 高 薫 風 選
水煙抄（8句）	河 内 天 笑 選
渺湖抄（3句）	八 木 千 代 選
茴香の花（3句）	西 出 楓 楽 選
「谷」	安 本 晃 授 選
「ま」	一 戸 ツ ネ 選
「つぶやく」	西 岡 洛 醉 選
課題吟（3句）	
吐田公一担当	

12月号
課題吟「ぜいたく」「学ぶ」「失う」
初歩教室「出発」

本社9月句会

とき 9月7日（月）午後5時半
ところ アウィーナ大坂 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題「体調」 藤田泰子選
「告白」 桜井千秀選
「捨てる」 高須賀金太選
「まぐれ」 榎本吐来選
「飛ぶ」 橋高薫風選

席題 1題 当日発表（各題2句以内）

会費 500円 投句料 400円

本社10月句会は、第4回川柳塔まつり記念句会として開催いたします。

夜市川柳募集

第4回「恋」 菱田満秋選
ハガキに3句 9月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限りません。
- (2)渺湖抄・茴香の花欄および一路集（課題吟）への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花欄は女性だけ。
- (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・氏名）を明記してください。
- (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いいたします。

定価 六百元（送料76円）

半年分 四千元（送料共）

一年分 七千九百元（同）

平成十年九月一日発行

編集兼 橋 高 薫

発行人 橋 高 薫

印刷所 美 研 ア ー ト

大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一十六
ウエムラ第2ビル202号室

〒545-0005
発行所 川 柳 塔 社

電話 〇〇六元一六九一四番
振替 〇〇九八〇一五一一三三六八番

川柳たけはら五〇〇号突破

記念誌上川柳大会

竹原川柳会誌「川柳たけはら」は、平成十年八月号で誌齢五〇〇号を迎えます。これを記念して、誌上川柳大会を開催します。

ご支援くださいますようお願い申し上げます。

宿題(各題二句・題別に連記)

「情熱」 竹原市 小島 蘭 幸選

「山」 今治市 月原 宵明選

「内緒」 西宮市 小松原 爽介選

「静か」 東広島市 石原 伯峯選

「水」 豊中市 橘 高薫 風選

賞 各題の三才に選者染筆色紙

締切 平成十年九月三十日(水) 当日消印有効

参加費 一〇〇〇円(郵便小為替)

発表 川柳たけはら十二月号誌上

◎市販の原稿用紙または適宜用紙に、住所・氏名(雅号)を明記し、参加費同封の上、左記までご郵送ください。

投句先 〒725-0022 広島県竹原市本町一―一四―一三

小島蘭幸方「竹原川柳会誌上大会」係

電話 0846-12216626

第5回 鳥取県民文化祭主催事業

第22回 鳥取県川柳大会

と き 10月11日(日) 午前10時開場

ところ 倉吉シティホテル(☎0858-261611)

(JR倉吉駅から南へ徒歩7分)

兼題と選者

「倉蔵」 高杉 鬼遊選

「吉」 桑田 砂輝守選

「土」 天根 夢草選

「天」 大家 風太選

「飛ぶ」 熱田 圭詩朗選

「壁」 白根 ふみ選

「桜」 鈴木 弘選

「陶器」 谷 季芳選

出句締切 午前11時半厳守(各題2句・席題なし)

欠席投句 9月20日締切(当日消印有効)用紙自由

〒689-2221 鳥取県大栄町由良宿2072-17

参加費 当日会費 2000円(昼食・発表誌呈)

欠席投句 1000円(発表誌呈)

宿泊(夕食会も) 倉吉シティホテル10月10日午後6時から

15000円(予約約先着40名)

*7月末まで受付

連絡先 〒689-2221 鳥取県大栄町由良宿2072-17

谷口次男(☎0858-13714735)

主催 鳥取県川柳作家協会・鳥取県文化団体連合会・鳥取県

後援 倉吉市・新日本海新聞社ほか